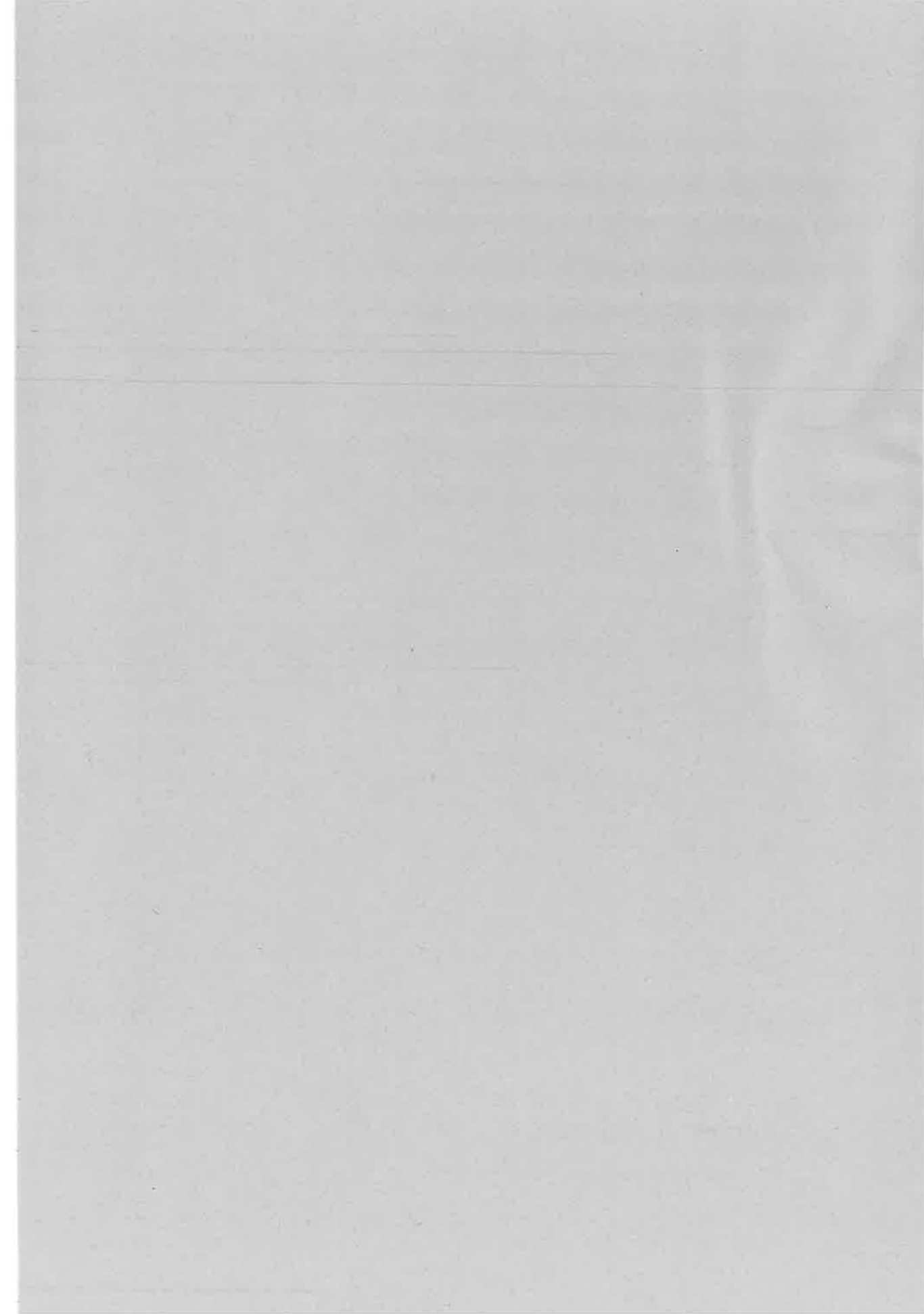


# 山口県立美術館年報

昭和 60 ~ 61 年

ANNUAL REPORT  
1985~86  
THE YAMAGUCHI PREFECTURAL MUSEUM  
OF ARTS







# 目 次

山口県立美術館概要 .....	4
事 業	
I. 展覧会 .....	5
(1)企画展 .....	6
(2)常設展 .....	27
(3)共催展など .....	55
II. 普及活動 .....	69
(1)山口県美術展覧会 .....	70
(2)現代美術展 .....	74
(3)美術講演会および講座 .....	80
(4)美術館ニュース「天花(てんげ)」 .....	82
(5)移動美術館 .....	84
III. 入館者数一覧 .....	89
収集資料	
I. 館藏品貸出利用状況 .....	93
II. コレクション .....	97
III. 美術図書 .....	113
組 織 等 .....	127

## 山口県立美術館概要

所在地 山口市亀山町3番1号  
敷地面積 11,545.470平方メートル  
建物概要 構造 鉄筋コンクリート造地下1階地上2階一部鉄骨造  
建物面積 4,077.168平方メートル  
建物延面積 5,420.350平方メートル  
工期 昭和52年8月～昭和54年3月  
設計 鬼頭 梓建築設計事務所  
監理 山口県建築課  
鬼頭 梓建築設計事務所  
施工 鹿島建設株式会社  
日本電設工業株式会社  
株式会社 大気社  
塩田工業株式会社

総工費 17億円

### 展示事業

#### 常設展示

本県の美術文化の歴史や郷土の生んだ代表的作家の全貌、郷土の風土と生活の中に育まれた代表的な工芸などがわかるよう常設展示をする。

#### 企画展示

館の調査研究にもとづき、テーマを設定し、内外のすぐれた作品を借用して、ユニークな企画展示をする。

#### その他の展示

新聞社や他館との共催展、美術団体展、文化庁巡回展などすぐれた展覧会を誘致し公開する。

### 普及教育事業

#### 移動美術館

館蔵品による移動巡回展を県内各地で行い、県民の生活に密着した展示活動を実施する。

#### 講座・講演等

実技講座、美術講座、講演会等を実施し、県民の創作の場、教養修得の場を提供するとともに、友の会を組織して、より多くの県民の密度の高い利用をはかる。

#### 公募展等

県美術展覧会等公募展を開催し、県民の作品創作の場を提供する。

### 調査収集事業

本県の美術に関する調査研究を実施し、基礎資料や作品を収集するとともに整理・保管する。又、これら資料の有効な利用をはかる。

---

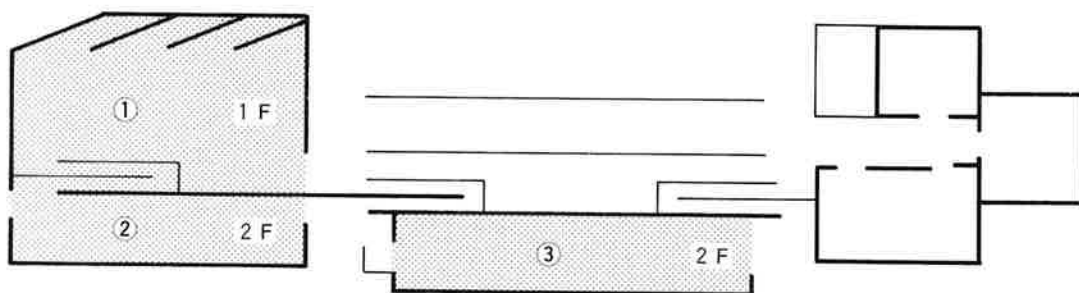
# 事業

---

## I. 展覧会

## (1)企画展

館主催による自主企画展を毎年3本ひらいている。内訳は、予算規模に応じて大型企画展2、小型企画展1の割りで開催しているが、大型企画展ではおもに個人作家展およびテーマ展、小型企画展（普及活動）では現代美術をそれぞれとりあつかっている。会場は、基本的に企画展示室Ⅰ①・Ⅱ②を使用。内容によっては両室を別々の展覧会に利用することもあり、また大型企画展の場合、この2室に加え常設展示室Ⅱ③を併用し3つの会場を効果的に利用するなど、会場使用の原則には内容に応じて柔軟性をもたせている。



①企画展示室Ⅰ 583.298㎡（延べ面積）

②企画展示室Ⅱ 304.695㎡（ 〳 ）

③常設展示室Ⅱ 471.825㎡（ 〳 ）

※ 凡例 企画展記録は、名称・趣旨・会場構成・展覧カタログ・出品作品・展評の順で編集されている。



## 中国陶磁2000年の流れ

1985(昭和60)年7月13日～8月18日

月曜日休館



主催 山口県立美術館  
会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ  
常設展示室Ⅱ



### (1)趣旨

チャイナ CHINA が普通名詞として、陶磁器全体を指すようになったのは、16～17世紀のことらしい。はじめは中国の陶磁器、それもそのころヨーロッパでは生産することができなかった磁器をさすことばとして使われはじめたという。半透明で、かたく、うすい素地に透明な釉薬をかけ、釉薬の下、もしくは上に色あざやかに文様が描かれた中国の磁器は、長いあいだヨーロッパはじめ、西アジアなど各地の人びとのあこがれの的であり、それらの国ぐにへ輸出された。さらには、それを再現しようという試みも、それらの国ぐにで行われた。この磁器だけでなく、中国陶磁は、そのはなやかさ、堅牢さなどにおいて、つねにリードし、他の国ぐにの製陶に影響をおよぼし続けた。

この中国陶磁に対して、その歴史的展開を学問的に追求しようという試みは、19世紀後半から中国だけではなく、欧米、日本などで本格化する。とくに、新中国成立後の考古学的発掘は大きな成果をもたらした。文献だけで知られていた窯の窯跡が発見されたり、後世の文献が軽視したジャンルに正確な陶磁史上の位置づけがなされたりした。まだまだ、不明な点も多いが、大まかな流れ、展開のようなものがわかりかけてきたというのが、現状であるといえようか。この大きなうねり、展開を中国陶磁史で見るとき、その展開の合理性におどろかされる。とくに、土や釉薬など素材の精製、焼成方法などの方向性に、中国陶磁の特質をうかがうことができる。

本展では、ひとつのまとまったコレクション(大阪造船所のコレクションで、まとまった形での公開は初めてになる)を中心に、漢代から清代までの2000年の展開を、以下の3部に構成して概観した。

第1部 古代陶磁と俑・唐三彩

第2部 青磁・白磁と磁州窯

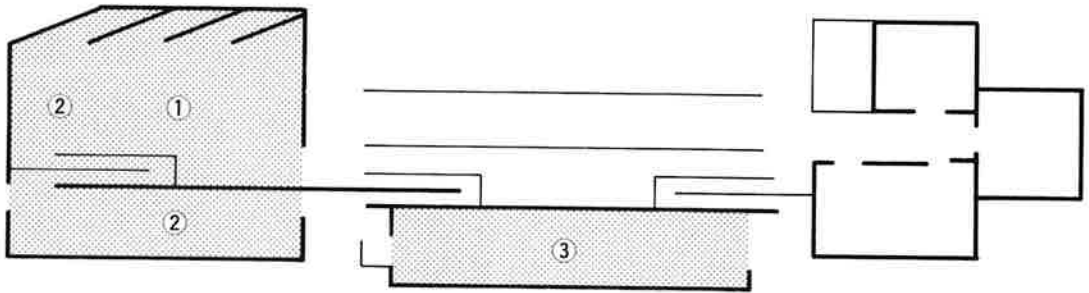
第3部 青花から五彩へ

中国陶磁の発生は、すでに約8000年以上も前の土器の存在が確認されているが、本展では、私たちになじみのふかい漢から始めた。時代的には、1部は漢から唐、2部は五代、遼、宋、金、3部は元

から清といったところであるが、あくまで目安で、どちらかといえばジャンルに重点をおいた。そのため2部の青磁には元から明にかけての作品があるといった構成としている。

自然釉から灰釉をへて、青磁の成立、原料の精製による白磁の完成、器体に刻りつけるという加飾から、ブラッシュワークでの加飾、下絵付、上絵付などの加飾法の変化、これら中国陶磁史の展開のダイナミズムをとらえられるような展示を意図した。

## (2)会場構成



- ①第1部 古代陶磁と俑・唐三彩 ②第2部 青磁・白磁と磁州窯  
③第3部 青花から五彩へ

## (3)カタログ

責任編集 榎本徹

内容

ごあいさつ

中国陶磁概観 長谷部楽爾(東京国立博物館学芸部長)

カラー図版

モノクローム図版

作品解説 中澤富士雄(大阪市立東洋陶磁美術館学芸員)

榎本徹

中国主要窯址地図

中国陶磁関係年表

出品目録

- A 4版 226ページ ● アート紙110kg
- ／4色オフセット84ページ 1色オフセット116ページ
- 上質紙90kg／オフセット26ページ



## (4)出品目録

作品番号	作品名	制作年・時代	寸法 (cm)	備考
1	灰陶加彩雲氣文蓋付壺	B.C. 3—A.D. 1 世紀・漢	口径21.0 胴径42.0 底径24.6 通高59.0	
2	灰陶壺	B.C. 3—A.D. 1 世紀・漢	口径20.3 胴径39.0 底径15.7 高49.2	
3	灰陶加彩耳杯・案	B.C. 1—A.D. 3 世紀・漢	耳杯 (大)12.1 (大)10.5 長径(中)10.2 短径(中)9.0 (小)8.8 (小)7.8 案 長辺(盤)40.7 高 (中)3.7 短辺(盤)30.0 (小)3.1 高 9.0	
4	灰陶加彩盒	B.C. 1—A.D. 3 世紀・漢	長径25.2 短径14.6 通高14.0	
5	灰陶加彩雲氣文奩	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	口径27.9 高17.2	
6	緑釉狩獵文博山奩	A.D. 1—A.D. 2 世紀・漢	口径16.5 通高19.3	
7	緑釉鼎	B.C. 1—A.D. 1 世紀・漢	胴径18.8 通高18.0	
8	緑釉壺	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	口径20.7 胴径37.5 底径22.5 高43.0	
9	緑釉蓋付壺	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	口径17.0 胴径33.0 底径18.5 通高40.6	
10	緑釉函	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	径21.5 高28.2	
11	褐釉耳杯	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	長径14.7 短径11.5 高4.3	
12	緑釉耳杯	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	長径14.2 短径12.0 高4.7	
13	灰釉鳥文双耳壺	B.C. 1—A.D. 3 世紀・漢	口径10.5 胴径38.4 底径19.4 高33.0	
14	灰釉鳥文双耳壺	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	口径15.3 胴径30.7 底径16.3 通高38.0	
15	灰陶加彩女子	B.C. 3—A.D. 1 世紀・漢	高54.5	
16	灰陶加彩女子	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	高67.1	
17	灰陶加彩鎮墓獸	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	高22.5	
18	灰陶加彩鴟鴞	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	高14.8	
19	灰陶加彩鴟鴞	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	高15.3	
20	緑釉猪	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	高13.0	
21	緑釉鴨	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	(A)高17.5 (B)高17.2	
22	緑釉鷄	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	高20.6	
23	緑釉農舍	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	長辺22.2 短辺15.5 高9.2	
24	緑釉樓閣	A.D. 1—A.D. 3 世紀・漢	高51.0	
25	青磁神亭壺	3—4 世紀・西晉	胴径19.3 底径11.2 高30.6	
26	青磁四耳壺	4 世紀・西晉～東晉	口径14.8 胴径28.7 底径10.7 高26.2	
27	黒釉天鵝壺	4 世紀・東晉	口径6.9 胴径13.2 底径8.4 高17.6	
28	灰陶加彩官人	5—6 世紀・北魏	高61.1	
29	灰陶加彩武人	5—6 世紀・北魏	高33.2	
30	灰陶加彩牛	5—6 世紀・北魏	高14.0	
31	加彩牛車	6—7 世紀・北齊～隋	(牛)高22.3 (車)高30.1	
32	緑褐釉駱駝	7 世紀・隋～唐	高45.5	
33	褐釉胡人	7 世紀・隋～唐	高28.6	
34	褐釉羊	7 世紀・隋～唐	高12.6	
35	白磁瓶	7 世紀・隋～唐	口径5.8 胴径13.5 底径7.4 高22.0	

作品番号	作品名	制作年・時代	寸法 (cm)	備考
36	白磁碗	7世紀・隋～唐	(A)口径11.0 底径4.5 高7.4 (B)口径11.3 底径5.0 高7.5	
37	白磁龍耳瓶	8世紀・唐	口径11.0 胴径25.7 底径13.0 高53.5	
38	三彩瓶	8世紀・唐	口径7.8 胴径10.5 底径8.5 高23.5	
39	三彩瓶	8世紀・唐	口径5.1 胴径9.6 底径6.5 高22.0	
40	三彩鳳首瓶	8世紀・唐	口径4.6 胴径12.0 底径9.5 高28.3	
41	三彩弁口水注	8世紀・唐	胴径18.3 底径9.4 高32.7	
42	白磁蓋付壺	8世紀・唐	口径8.6 胴径16.8 底径9.2 通高21.8	
43	綠釉壺	8世紀・唐	口径12.4 胴径21.4 底径11.4 高17.7	
44	綠釉壺	8世紀・唐	口径6.5 胴径13.7 底径6.8 高12.0	
45	三彩壺	8世紀・唐	口径7.3 胴径13.3 底径7.5 高11.6	
46	三彩蓋付壺	8世紀・唐	口径6.8 胴径13.0 底径7.1 通高14.0	
47	三彩壺	8世紀・唐	口径11.4 胴径22.0 底径11.4 高22.2	
48	三彩四葉形盤	8世紀・唐	一辺14.9 高4.7	
49	加彩鷹匠 (一對)	8世紀・唐	(左)高41.6 (右)高38.2	
50	加彩女子	8世紀・唐	高47.0	
51	三彩女子	8世紀・唐	高31.2	
52	加彩馬	8世紀・唐	高51.6	
53	三彩馬	8世紀・唐	高61.7	
54	三彩馬 (一對)	8世紀・唐	(白)高34.0 (茶)高33.5	
55	三彩鴨	8世紀・唐	高17.8	
56	三彩蓋付小壺	8世紀・唐	口径3.7 胴径9.0 通高7.5	
57	藍彩小壺	8世紀・唐	口径3.4 胴径6.0 底径3.2 高7.9	
58	三彩小壺	8世紀・唐	口径4.3 胴径5.8 底径2.9 高6.8	
59	三彩小水注	8世紀・唐	口径3.5 胴径6.0 底径3.3 高6.3	
60	三彩小水注	8世紀・唐	口径3.0 胴径5.2 底径3.0 高5.8	
61	綠彩小水注	8世紀・唐	口径5.6 胴径6.2 底径3.3 高4.9	
62	藍釉弁口水水注	8世紀・唐	胴径5.8 底径2.7 高8.7	
63	黃綠釉絞胎弁口水水注	8世紀・唐	胴径7.9 底径5.3 高15.5	
64	黃釉絞胎小碗	8世紀・唐	口径10.6 底径5.5 高4.6	
65	三彩小碗	8世紀・唐	口径10.2 高3.7	
66	綠釉小杯	8世紀・唐	口径6.9 底径3.0 高6.0	

作品番号 作品名	制作年・時代	寸法 (cm)	備考
67 緑褐釉小杯	8世紀・唐	口径7.6 底径3.2 高6.6	
68 三彩小杯	8世紀・唐	口径8.0 底径3.7 高6.5	
69 三彩小杯	8世紀・唐	口径4.9 胴径5.7 高4.9	
70 藍釉合子	8世紀・唐	径6.8 通高2.6	
71 藍褐彩合子	8世紀・唐	径9.3 通高3.7	
72 緑彩合子	8世紀・唐	径7.4 通高3.3	
73 三彩合子	8世紀・唐	径7.9 通高3.3	
74 三彩合子	8世紀・唐	径9.4 通高4.4	
75 三彩笛	8世紀・唐	(緑)径4.3 (青)径3.7	
76 緑釉兔形枕	8—9世紀・唐	長径13.4 高7.1	
77 白磁象形枕	8—9世紀・唐	長径12.5 高8.2	
78 白磁象形燭台	9—10世紀・唐~五代	高27.3	
79 白磁娥文合子	10世紀・五代	径7.9 通高4.5	
80 緑釉皮囊壺	10世紀・遼	口径3.5 胴径14.5 底径8.5 高21.8	
81 褐釉皮囊壺	11世紀・遼	口径2.8 胴径10.8 底径6.9 高28.7	
82 三彩花文盤	11世紀・遼	口径24.7 底径8.3 高6.7	
83 白地鳳首瓶	11世紀・遼	口径7.0 胴径16.2 底径9.8 高46.0	
84 白磁鳳首水注	11世紀・北宋	口径4.1 胴径11.6 底径6.8 高20.2	
85 青磁蓮弁文多嘴壺	11世紀・北宋	口径7.0 胴径18.6 底径13.8 通高33.2	越州窯
86 青磁牡丹文輪花盤	11—12世紀・北宋	口径18.6 底径5.5 高4.4	耀州窯
87 青磁花文盤	12世紀・北宋~金	口径19.0 底径6.6 高4.2	耀州窯
88 白磁瓜形水注	11世紀・北宋	口径5.7 胴径9.4 底径5.4 高15.6	定窯
89 白磁牡丹文碗	11—12世紀・北宋	口径18.2 底径4.4 高5.0	定窯
90 白磁瓜形水注	11—12世紀・北宋	口径6.6 胴径12.5 底径8.6 通高24.0	景德鎮窯
91 白磁輪花杯・托	11—12世紀・北宋	(杯)口径13.5 底径4.0 高4.3 (托)径12.8 底径4.8 高7.4	景德鎮窯
92 白磁唐子唐草文鉢	11—12世紀・北宋	口径20.8 底径5.7 高7.2	景德鎮窯
93 澱青釉紅斑杯	12—13世紀・金	口径8.6 底径2.8 高4.5	鈞窯
94 紫紅釉碗	12—13世紀・金	口径11.5 底径3.6 高5.6	鈞窯
95 白地鉄斑文瓶	11—12世紀・北宋	口径8.7 胴径12.7 底径7.2 高21.6	磁州窯系
96 白地牡丹文鉢	12世紀・北宋~金	口径28.2 底径9.5 高13.1	磁州窯系
97 白地七宝文鉢	12世紀・北宋~金	口径14.1 胴径16.8 底径7.3 高14.7	磁州窯系

作品番号 作品名	制作年・時代	寸法 (cm)	備考
98 緑釉牡丹文枕	12—13世紀・金	短径23.0 長径30.4 高11.2	磁州窯系
99 黒釉牡丹文瓶	12世紀・北宋～金	口径6.4 胴径19.6 底径9.2 高31.4	磁州窯系
100 白地牡丹文瓶	12—13世紀・金	口径3.8 胴径17.6 底径10.5 高39.4	磁州窯系
101 白地牡丹文瓶	12—13世紀・金	口径6.9 胴径19.9 底径12.2 高21.8	磁州窯系
102 白地鳳凰文壺	14世紀・元	口径12.8 胴径35.3 底径13.8 高34.1	磁州窯系
103 黒釉堆線文瓶	12—13世紀・北宋～金	口径14.9 胴径14.6 底径12.1 高33.8	磁州窯系
104 黒釉銹斑瓶	12—13世紀・金	口径6.6 胴径16.7 底径12.8 高18.3	磁州窯系
105 黒釉銹斑蓋付鉢	12—13世紀・金	口径14.5 胴径7.7 通高16.5	磁州窯系
106 黒釉草花文壺	12—13世紀・金	口径20.1 胴径27.3 底径13.6 高19.8	磁州窯系
107 黒釉草花文瓶	12—13世紀・金	口径7.2 胴径15.7 底径7.0 高27.5	磁州窯系
108 白地牡丹文碗	13世紀・金	口径15.7 底径5.4 高5.9	磁州窯系
109 白地牡丹文碗	13世紀・金	口径12.5 底径4.7 高3.5	磁州窯系
110 三彩魚文盤	13—14世紀・金～元	口径15.5 底径10.6 高2.7	磁州窯系
111 玳皮釉双鸞文碗	12—13世紀・南宋	口径15.0 底径3.6 高4.7	吉州窯
112 青磁三足香炉	13世紀・南宋～元	口径13.7 高11.8	龍泉窯
113 青磁八卦文香炉	13世紀・南宋～元	口径14.2 高8.8	龍泉窯
114 青磁琮形瓶	13世紀・南宋～元	口径6.7 胴径9.6×9.6 底径6.5 高26.0	龍泉窯
115 青磁牡丹唐草文瓶	13—14世紀・元	口径11.9 胴径13.2 底径8.2 高25.8	龍泉窯
116 青磁双魚文盤	13—14世紀・元	口径23.5 底径11.6 高6.6	龍泉窯
117 青磁蓋付壺	14世紀・元	口径25.8 胴径35.3 底径20.6 通高30.7	龍泉窯
118 青磁牡丹唐草文蓋付壺	15世紀・明	口径24.2 胴径30.8 底径19.3 通高33.0	龍泉窯
119 青磁盤	14—15世紀・元～明	口径62.3 底径39.8 高10.5	龍泉窯
120 青花魚藻文壺	14世紀・元	口径21.8 胴径34.7 底径19.5 高29.5	景德鎮窯
121 青花鳳凰文瓶	14世紀・元	口径7.2 胴径15.1 底径9.3 高28.7	景德鎮窯
122 青花菊唐草文瓶	14世紀・元	口径7.3 胴径12.5 底径7.2 高23.5	景德鎮窯
123 青花花卉文八角瓶	14世紀・元	口径7.7 胴径13.0 底径7.8 高25.4	景德鎮窯
124 釉裏紅牡丹唐草文瓶	14世紀・元～明	口径8.5 胴径19.8 底径12.0 高32.2	景德鎮窯
125 青花牡丹唐草文瓶	15世紀・明	口径5.2 胴径20.0 底径12.1 高31.6	景德鎮窯

作品番号 作品名	制作年・時代	寸法 (cm)	備考
126 青花花卉唐草文扁壺	15世紀・明	口径8.6 胴径34.6 底径14.6 高43.9	景德鎮窯
127 青花花文双耳扁壺	15世紀・明	口径3.5 胴径20.5 底径7.3 高29.8	景德鎮窯 「大明宣德年製」銘
128 白磁龍文盤	15—16世紀・明	口径16.1 底径9.5 高4.1	景德鎮窯 「大明弘治年製」銘
129 白磁綠彩龍文盤	15—16世紀・明	口径18.3 底径10.9 高4.2	景德鎮窯 「大明弘治年製」銘
130 白磁綠彩龍文鉢	15—16世紀・明	口径19.8 底径8.0 高8.7	景德鎮窯 「大明弘治年製」銘
131 青花黃彩花果文盤	16世紀・明	口径29.3 底径18.7 高5.4	景德鎮窯 「大明正德年製」銘
132 法花蓮池文壺	15—16世紀・明	口径16.9 胴径29.7 底径19.1 高33.6	
133 法花蓮花文鉢	15—16世紀・明	口径18.0 底径10.8 高9.5	
134 法花牡丹文鉢	15—16世紀・明	口径18.0 底径11.2 高9.3	
135 五彩花鳥文壺	16世紀・明	口径9.0 胴径19.0 底径11.0 高22.0	景德鎮窯
136 五彩魚藻文壺	16世紀・明	口径20.2 胴径42.0 底径24.2 高34.8	景德鎮窯 「大明嘉靖年製」銘
137 青花黃地紅彩魚藻文壺	16世紀・明	口径22.1 胴径34.7 底径21.0 高30.6	景德鎮窯 「大明嘉靖年製」銘
138 青花花鳥文八角合子	16世紀・明	胴径29.7 底径22.5 通高17.5	景德鎮窯 「大明嘉靖年製」銘
139 五彩花蝶文方盤	16世紀・明	一辺17.8 高4.6	景德鎮窯 「大明嘉靖年製」銘
140 黃地紅彩雲鶴文角形合子	16世紀・明	縦10.5 横12.4 通高6.8	景德鎮窯 「大明嘉靖年製」銘
141 青花紅彩龍濤文鉢	16世紀・明	口径20.2 底径7.7 高9.2	景德鎮窯 「大明隆慶年造」銘
142 五彩花鳥蓮池文瓶	16—17世紀・明	口径9.1 胴径27.0 底径18.3 高55.3	景德鎮窯 「大明萬曆年製」銘
143 青花人物文瓶	16—17世紀・明	口径5.9 胴径23.1 底径13.2 高40.1	景德鎮窯 「大明萬曆年製」銘
144 五彩龍文瓶	16—17世紀・明	口径11.8 胴径10.3 底径7.5 高12.3	景德鎮窯 「大明萬曆年製」銘
145 五彩龍文重層盒	16—17世紀・明	胴径16.7 通高17.5	景德鎮窯 「大明萬曆年製」銘
146 五彩魚藻文輪花鉢	16—17世紀・明	口径35.5 底径22.0 高9.7	景德鎮窯 「大明萬曆年製」銘
147 五彩人物文輪花鉢	17世紀・明	口径36.9 底径23.7 高7.9	景德鎮窯 「大明萬曆年製」銘
148 青花龍鳳文杯	16—17世紀・明	口径8.5 底径3.5 高4.2	景德鎮窯 「大明萬曆年製」銘
149 五彩人物文杯	16—17世紀・明	口径8.8 底径3.8 高4.2	景德鎮窯 「大明萬曆年製」銘
150 五彩力士形燭台	16—17世紀・明	高22.5	景德鎮窯 「大明萬曆年製」銘
151 青花蝦蟇鉄拐文輪花鉢	17世紀・明	口径22.1 底径16.4 高5.5	景德鎮窯
152 青花象唐子文鉢	17世紀・明	口径20.3 胴径23.3 底径16.4 高5.0	景德鎮窯
153 青花持塔羅漢文盤	17世紀・明	口径22.0 底径9.8 高3.2	景德鎮窯

作品番号	作品名	制作年・時代	寸法 (cm)	備考
154	青花玉兔文盤	17世紀・明	口径21.6 底径13.0 高2.6	景德鎮窯
155	五彩梅樹文角形瓶	17世紀・明	口径5.8×5.8 胴径6.6×6.6 底径6.6×6.6 高13.8	景德鎮窯
156	五彩人物文香炉	17世紀・明	口径6.1 通高9.5	景德鎮窯
157	五彩山水文鉢 (五客)	17世紀・明	口径16.9 底径9.3 高4.0	景德鎮窯 「成化年製」銘
158	五彩獅子鳳凰文盤	17世紀・明	口径38.8 底径19.0 高9.0	
159	五彩鳳凰文盤	17世紀・明	口径43.9 底径21.8 高10.4	
160	五彩綵花玉兔文盤	17世紀・明	口径19.8 底径15.2 高3.2	景德鎮窯 「大明成化年製」「福」銘
161	五彩花鳥文瓶	17—18世紀・清	口径25.8 胴径29.5 底径20.8 高74.8	景德鎮窯
162	黒地五彩蓮池文角形瓶(一対)	17—18世紀・清	口径12.0 胴径14.4×14.4 底径11.1×11.1 高47.7	景德鎮窯
163	五彩花鳥文盤	17—18世紀・清	口径31.6 底径26.2 高5.0	景德鎮窯
164	青花釉裏紅銅器文瓶	17—18世紀・清	口径3.4 胴径9.8 底径7.3 高22.7	景德鎮窯 「大清康熙年製」銘
165	粉彩百鹿文壺	18世紀・清	口径16.0 胴径36.0 底径24.5 高44.1	景德鎮窯 「大清乾隆年製」銘

## (5)展評など

新聞 (報道記事をのぞく)

展評創造と再生くり返した巨大なエネルギーみる 朝日新聞 (西部) / (源) 60・7・17

庄巻日本陶磁の源流 読売新聞 / (加) 60・7・24

エッセイ「中国陶磁2000年の流れ」展によせて 榎本徹 中国新聞 / 60・7・16



中国陶磁展会場風景



# 戦後日本画の一断面

——模索と葛藤——

1986(昭61)年1月7日～2月9日

月曜日休館・1月15日開館



主催＝山口県立美術館  
会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ  
常設展示室Ⅱ

1986.1.7.火 → 2.9.日



朝倉 樹  
宮崎 輝  
宮崎 巴人  
宮田 重義  
上田 誠生  
大野 伊富  
加田 文吉  
輪田 七五郎  
佐藤 多鶴  
下村 謙之介  
中村 正次  
長崎 榮人  
野村 謙治  
赤田 隆樹  
野野 貞吉  
丸本 信三  
上 谷 勇夫  
横山 権三  
渡辺 守

模索と葛藤

戦後日本画の一断面

山口県立美術館

## (1)趣旨

この展覧会は戦後のとくに1950・60年代の20年間に制作された作品70点(21作家)で構成した。この期間をとくにここでとりあげるのは、すでに戦前から始まっていた新たな「日本画」模索の道すじの延長にこの時期があたり、さらに50・60年代という年代的なひろがりについては、戦後の大幅な社会変革と大量の外来思潮の荒波のなかで、当時の若く、最も感受性の強い世代の作家たちが模索や試行をとおして、表現性や造形性の上で、ある程度の展開を示すことができたのが、この20年間ではないかと考えたからである。

副題とする「模索と葛藤」が作家個々人のレベルの問題であることは当然のことであるが、それらの主張をある程度まとめたものとして、それぞれの美術団体や研究グループが新しく成立し、その消長によって時代相が形成されたということは、やはりこの時期を語る上では見過ごすことができない。つまり日展や院展といった戦前からの既成団体以外の団体・グループなどを中心として起った日本画変革の動きを、ここではとくに注意した。

このように戦後新たに生まれた新団体やグループに結集した作家たちは、より先鋭な形で、新日本画を追求しようとし、従来の日本画にはみられなかった画題や表現形式を生みだそうとした。そうした中で、紙あるいは絹、岩絵具、膠という日本画本来の素材を越えた実験さえ試みる作家もあらわれたわけである。

たしかに50・60年代の日本画変革の動きは、その混迷と多様化の時代相の反映であったかもしれないが、そこで活躍した作家たちは少なくとも時代のアクチュアルな思潮をその創造の基点として、なんとか内的転換をはかろうと模索・葛藤したのではないだろうか。

なおこのたびの展覧会では、その内容を整理する意味から出品作品を便宜的に表現と画題の2つに分け、さらにそれを以下の5つの傾向に分けてみた。

表現Ⅰ 大画面構図と構築性

表現Ⅱ 墨線と色彩

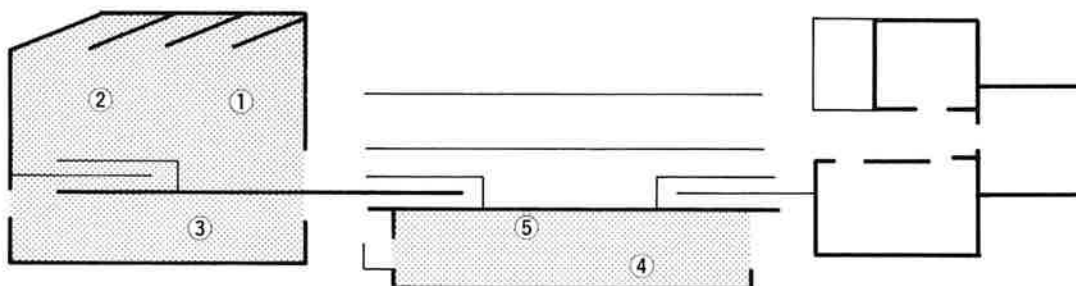
表現Ⅲ 抽象的傾向と素材の可能性

画題Ⅰ 人間像とその変容

画題Ⅱ 生物形態とその象徴化

日本画の伝統性をもつあらゆる問題と対峙し、模索、葛藤した作家たちの作品を通して、日本画自体が日本の現代美術と平行して歩み、互いに最も接近した時代、つまりその接点としての時代相をみることによって、われわれ自身が、もう一度日本画そのものの意味を考えなおしてみることも必要ではないかと考えた。

## (2)会場構成



①大画面構図と構築性 ②人間像とその変容 ③生物形態とその象徴化

④墨線と色彩 ⑤抽象的傾向と素材の可能性

## (3)カタログ

責任編集 菊屋吉生

内容

ごあいさつ

「戦後日本画の一断面」展によせて

河北倫明(京都国立近代美術館長)

図版(カラー・モノクロ)

戦後日本画の風雲児たち

針生一郎(和光大学教授・美術評論家)

京都における日本画の革新—パンリアルとケラー

木村重信(大阪大学教授・美術評論家)

日本画変革の流れ—戦前からの流れに重点を置いて—

菊屋吉生(山口県立美術館学芸員)

作家作品紹介・年譜・資料 菊屋吉生

出品目録

●A4版 178ページ ●アート紙110kg/

4色オフセット24ページ モノクロ72ページ

●上質紙90kg/オフセット82ページ



戦後日本画の一断面  
—模索と葛藤—

## (4)出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状・寸法(cm)	制作年	所蔵
1	昆明石林	丸木位里	紙本墨画・屏風4曲1双 (各)180.0×360.0	1957	原爆の図・丸木美術館
2	房絵の海	丸木位里	紙本墨画・額 78.0×144.0	1967	原爆の図・丸木美術館
3	紅梅	丸木位里	紙本彩色・屏風2曲1隻 182.0×182.0	1967	原爆の図・丸木美術館
4	残照	船田玉樹	紙本彩色・額 236.0×206.0	1956	広島県立美術館
5	秋意	船田玉樹	紙本彩色・額 207.0×161.0	1957	
6	川	横山 操	紙本彩色・パネル7面 226.0×630.0	1956	福井県立美術館
7	MADO(窓)	横山 操	紙本彩色・額3面 (右)88.6×48.0 (中)36.5×89.3 (左)89.0×49.2	1960	新潟県美術博物館
8	ウォール街	横山 操	紙本彩色・額 271.0×136.0	1962	東京国立近代美術館
9	十勝岳	横山 操	紙本彩色・パネル7面 243.0×633.5	1962	新潟県美術博物館
10	少年少女 (原爆の図・第5部)	丸木位里 ・俊	紙本墨画・屏風4曲1双 (各)180.0×360.0	1951	原爆の図・丸木美術館
11	魚と人	渡辺 学	紙本彩色・額 181.5×228.0	1957	
12	運ぶ	渡辺 学	紙本彩色・額 228.0×181.0	1962	東京セントラル美術館
13	魚・人	渡辺 学	紙本彩色・額 227.5×182.0	1962	東京国立近代美術館
14	作品A	三上 誠	紙本彩色・額 137.0×92.5	1957	福井県立美術館
15	湿地A	三上 誠	紙本彩色・額 121.0×121.0	1957	神奈川県立近代美術館
16	作品	三上 誠	紙本彩色・額 115.3×147.1	1968	福井県立美術館
17	経絡暦	三上 誠	紙本墨画・額 170.5×121.5	1968	京都国立近代美術館
18	見物人	水谷勇夫	紙本彩色・額 162.0×130.7	1960	
19	獲物の顔No.13	水谷勇夫	紙本彩色・額 116.0×91.0	1963	
20	戦争そしてセックスー獣姦	水谷勇夫	紙本彩色・額 162.0×130.7	1964	
21	いがみあい	星野真吾	紙本彩色・額 183.0×184.0	1959	
22	喪中の作品	星野真吾	紙本彩色・額 121.0×122.8	1964	
23	黒い西日	星野真吾	紙本彩色・額 182.4×91.1	1966	
24	働く人	朝倉 摂	紙本彩色・額 181.5×258.2	1952	山口県立美術館
25	日本 1958-2	朝倉 摂	紙本彩色・屏風6曲1隻 167.6×369.0	1958	山口県立美術館
26	黒人歌手ポール・ロブソン	朝倉 摂	紙本彩色・屏風4曲1隻 109.0×242.4	1959	東京国立近代美術館

番号	作 品	作 者	材質・形状・寸法(cm)	制作年	所蔵
27	空華	中村正義	紙本彩色・額 204.5×128.0	1951	豊橋市美術博物館
28	舞子	中村正義	紙本彩色・額 193.4×125.5	1959	BSN 新潟美術館
29	男と女	中村正義	紙本彩色・額 160.5×226.5	1963	豊橋市美術博物館
30	自画像(ノイローゼ)	中村正義	紙本彩色・額 41.0×31.8	1954	
31	自画像	中村正義	紙本彩色・額 40.8×31.8	1956	
32	顔	中村正義	紙本彩色・額 45.5×22.8	1968	
33	火	岩崎巴人	紙本彩色・額 123.4×80.5	1957	奈良県立美術館
34	飛び越える馬	岩崎巴人	紙本彩色・額 138.8×185.0	1960	奈良県立美術館
35	凍れるシベリアにて	岩崎巴人	紙本彩色・額 209.5×180.0	1964	山口県立美術館
36	変貌する山	岩崎巴人	紙本彩色・額 207.5×264.8	1966	山口県立美術館
37	寒村	長崎莫人	紙本彩色・屏風 2曲 1 隻 137.0×168.0	1955	常泉寺
38	三人	長崎莫人	紙本彩色・ガラス粉・額 162.5×134.5	1956	山口県立美術館
39	たそがれの畑	長崎莫人	紙本彩色・ガラス粉・額 134.3×162.7	1957	山口県立美術館
40	原始太陽	藤田隆治	紙本彩色・額 136.1×120.7	1960	山口県立美術館
41	三眠	藤田隆治	紙本彩色・額 91.5×182.2	1963	山口県立美術館
42	魚拓	藤田隆治	紙本彩色・額 105.0×93.0	1963	東京国立近代美術館
43	水芭蕉に関する作品・迎春	佐藤多持	紙本墨画彩色・額 89.1×130.4	1961	
44	水芭蕉曼陀羅 め	佐藤多持	紙本墨画彩色・額 161.8×91.0	1966	
45	水芭蕉曼陀羅 黄14	佐藤多持	紙本墨画彩色・屏風 4曲 1 隻 162.2×364.7	1968	
46	群翔 A	上田臥牛	紙本彩色・額 112.8×177.2	1964	奈良県立美術館
47	裸木	上田臥牛	紙本彩色・額 162.2×130.6	1966	
48	冬樹	上田臥牛	紙本彩色・額 182.0×226.7	1967	東京国立近代美術館
49	池畔	下村良之介	板・彩色・額 154.5×114.5	1957	京都市美術館
50	7つの軌跡	下村良之介	板・紙粘土・彩色・額 122.0×231.5	1963	
51	鳥不動	下村良之介	板・紙粘土・墨・額 185.0×235.0	1965	京都国立近代美術館
52	鸞翔	下村良之介	紙・紙粘土・彩色・額 183.0×275.0	1968	京都市美術館
53	悲しき鹿	加山又造	紙本彩色・額 182.0×225.7	1954	東京国立近代美術館
54	駈ける	加山又造	紙本彩色・屏風 6曲 1 隻 178.0×328.5	1955	

番号	作 品	作 者	材質・形状・寸法(cm)	制作年	所蔵
55	駱駝と人	加山又造	紙本彩色・額 162.0×130.0	1957	福井県立美術館
56	凍る日輪	加山又造	紙本彩色・額 162.3×130.5	1964	神奈川県立近代美術館
57	蝕(B)	岩崎 鐸	板・石コウ・ブリキ ・銀箔・彩色・額 152.0×123.0	1959	板橋区立美術館
58	電子 M.I.	岩崎 鐸	板・コンクリート・鉄 ・彩色・額 153.0×244.0	1960	板橋区立美術館
59	CHAOS	大野俶嵩	紙本墨画彩色・額 136.0×120.5	1958	
60	金と黒のコラージュ	大野俶嵩	板・布・彩色・額 60.5×213.0	1958	
61	緋No.24	大野俶嵩	板・布・彩色・額 141.0×129.0	1964	京都市美術館
62	巷	野村 耕	板・紙型・彩色・額 152.0×120.5	1956	京都市美術館
63	澆澆	野村 耕	板・紙・墨・彩色・額 121.0×122.0	1959	
64	裂	野村 耕	板・紙型・彩色・額 151.5×91.0	1964	
65	生きる	楠田信吾	板・砂・彩色・額 162.0×111.4	1961	
66	Work	楠田信吾	板・塗料・彩色・額 162.0×130.0	1963	
67	作品67	楠田信吾	板・塗料・彩色・額 121.5×122.0	1963	
68	断層	岩田重義	紙・粘土・彩色・額 117.1×90.7	1957	
69	黄いろな	岩田重義	板・砂・彩色・額 92.0×120.0	1960	
70	Work	岩田重義	油彩・キャンバス・板・布 ・額 130.0×162.0	1963	

## (5)展評など

### 新聞（報道記事をのぞく）

#### 展評

- あふれる革新への気概 毎日新聞（西部）/（三田）61・1・9（夕）  
 日本画の戦後問う試み 朝日新聞（西部）/（源）61・1・11  
 大胆な反逆児らの軌跡 読売新聞（西部）/（秋山）61・1・13（夕）  
 伝統に挑む熱気が漂う 中国新聞/（寺本）61・1・24  
 日本画はいま―戦後回顧の動きに寄せて 京都新聞/（太田垣）61・2・22

#### シリーズ

- 戦後日本画の一断面―模索と葛藤― 毎日新聞（県内）/1. 横山操「十勝岳」（61・1・14）2. 中村正義「舞子」（1・15）3. 三上誠「経絡暦」（1・17）4. 岩崎巴人「変貌する山」（1・18）5. 加山又造「悲しき鹿」（1・21）6. 岩田重義「Work」（1・22）7. 丸木位里・俊「原爆の図第5部」（1・23）

エッセイ

変革の20年「戦後日本画の一断面」展 菊屋吉生 新美術新聞/61・1・1 (No.421)

「戦後日本画の一断面」に寄せて 菊屋吉生 西日本新聞/61・1・26

美術雑誌

戦後、ポスト日本画時代の熱気 加山又造(談) 芸術新潮/61・2

日本画が熱くなった時代 田中幸人 美術手帖/61・3



戦後日本画の一断面展会場風景



THE・NINE 展会場風景

デザイン ナウ  
**THE・NINE**

——9人のクリエイターたち——

1986(昭61)年6月27日～7月27日

月曜日休館

主催＝山口県立美術館

会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ



山口県立美術館

(1)趣旨

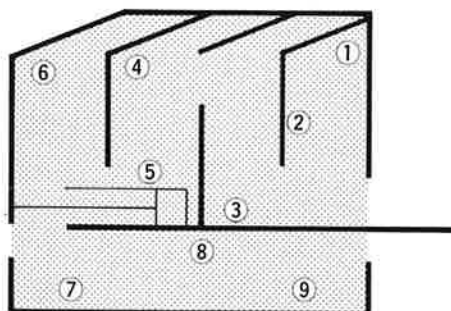
イラストレーションやポスター作りは、それによって伝えられるメッセージが日常生活に即したものであり、しかもマスメディアを通すことが前提となっているため、長い間絵画などの純粹美術と明らかに区別されて扱われてきた。しかし、マスメージをテーマとするポップ・アートの登場や、制作プロセスの技術革新などによって、表現というレベルでは、もはやその区別は曖昧なものとなっているとさえいえる。

たとえばイラストレーションは、特定のメッセージを具体的に伝えるというものもちろんあるが、メッセージそのものが説明的でない場合も多く、また描き手であるイラストレーターのキャラクターを重視する傾向がさらに強まっている現状では、絵画制作となら変わるところはない。あるいは、写真を使うことや印刷というプロセスを経ることも、写真自体がすでに芸術性を獲得し、複数性も表現のひとつの要素と考えられる今日では、とくにこれらを純粹美術と区別することは意味がないことになる。したがって、それぞれの表現が質の高いものになっているかどうか、その基本的なところが問題だといわなければならないだろう。

80年前後期は、いわゆるニューウエイブ世代の登場によってデザイン界も大きく変ってきたように思われる。それは、60年代後半に横尾忠則らの登場によって活性化された部分を引きつぎながら、個性豊かな作家たちが次第にメジャーな領域に食い込んでいったことによるものであり、また制度的にはアートディレクションが確立されて、メッセージをどのように伝えるかが、単に一カットの枠やポスターの枠をこえて、総合的な戦略のもとに展開されるようになったからである。イラストレーション原画は、印刷までもてばよい単なる下絵ではなく、それ自体が強い表現性をもつものである。と同時にそれは、印刷という媒体やそうした制度を支えるさまざまな人を通してこそ社会性を獲得するものであり、そうしたシステムの重要さはいっそうはっきりしたものとなってきたといえよう。

9人のイラストレーター、アートディレクターたちの仕事は、その意味で最も今日的な意味を狙うものである。

## (2)会場構成



- ①サイトウ・マコト ②井上嗣也 ③戸田正寿 ④田中紀之 ⑤谷口康彦  
⑥日比野克彦 ⑦河村要助 ⑧吉田カツ ⑨湯村輝彦

## (3)カタログ

責任編集 高田美規雄

内容

ごあいさつ

図版

消費される絵画 三浦雅士

デザインの地平線からどれだけ浮上するか 榎本了彦

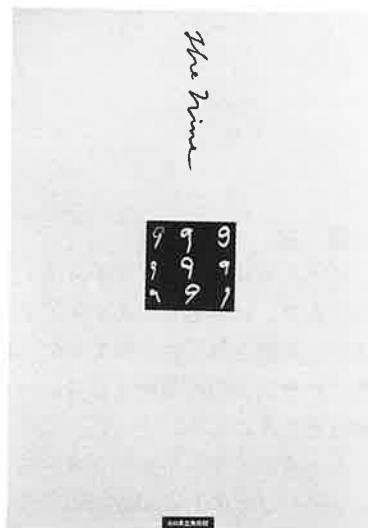
戦後のグラフィックアートと今日 高田美規雄

年表

作家プロフィール

出品目録

- A 4版 116ページ ● アート紙 110kg/4色オフセット
- 60ページ ● ニューエイジ 90kg/モノクロ 56ページ
- 装飾・デザイン 谷口康彦



## (4)出品作品

107点

## (5)展評など

新聞（報道記事をのぞく）

展評

- あらゆるジャンルから技法や新傾向取り込む 朝日新聞（西部）/（源）61・7・2  
イメージの自由な遊び 毎日新聞（西部）/（三田）61・7・10  
イメージ性強めるポスター 中國新聞/（寺本）61・7・12



## 雲谷派の系譜

——雪舟の後継者たち——

1986(昭61)年10月9日～11月16日

月曜日・11月4日休館



主催＝山口県立美術館  
会場＝企画展示室Ⅰ・Ⅱ  
常設展示室Ⅱ



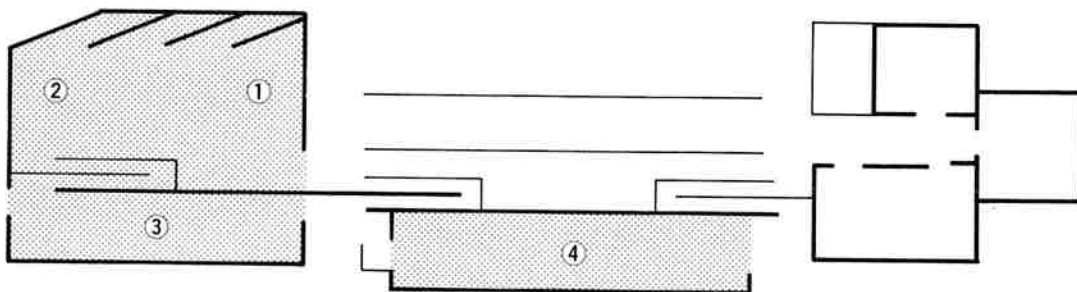
### (1)趣旨

狩野派や土佐派、住吉派、そして円山・四条派など、江戸時代には数多くの流派が活躍した。しかしながらそれらはいずれも中央に基盤を置くものであって、地方に派生し、そこで長く命脈を保ったものとなると、雲谷派以外の例を筆者は知らない。その点でも、美術史上における雲谷派の特異な位置といったものが察せられて興味深いのが、残念なことに今まで雲谷派の展開、とくに等益以降のそれについては、あまり明らかにされてはいなかったようである。雲谷派を地方画派としてみる認識がよかったこともあろうが、結局は雲谷派についての情報量の不足が、こういった状況をもたらしたのであろう。

そこで今回の展覧会では、雲谷派の画系の中核、萩本藩の雲谷家および弟子家に焦点をあて、画人約30名・70余点の作品によって、桃山期から幕末までの雲谷派の展開を概観し、その変貌の過程を明らかにすることに主眼を置いた。ただしその場合、単に各時代、各画人ごとの画業の評価を試みるのではなく、むしろそれらを含む「流派」と、その背後にある幕藩体制の在り方を通して、雲谷派の展開を多角的にとらえてみたいというねらいがあった。雲谷派が流派として在る以上、また藩のお抱え絵師である以上、そこには動かしがたいある種の制約といったものが存在しているのであり、それらを検討してみることが、雲谷派の画業を認識するための有効な手段になりうると思えたからに他ならない。そのため作品の他に雲谷派に関する手紙や萩古地図、系図、給禄台帳などの資料類を多数展示し、藩体制のもとで彼らが実際にはいかなる処遇を受けており、またどのような組織機構を有していたかなど、できるかぎり御用絵師としての彼らの実態を把握することにつとめた。

作品・資料ともおおむね時代順に3室に分けて展示し、特別出品として雪舟筆「山水小巻」と「牧牛図」2幅を加えた。

## (2)会場構成



主に制作年順に展示 ①桃山期の作品 ②江戸初期の作品 ③江戸中期の作品 ④江戸後期～幕末の作品

## (3)カタログ

責任編集 山本英男

内容

ごあいさつ

「雲谷派の系譜」展によせて

武田恒夫(大阪大学文学部教授)

図版

雲谷派研究の思い出 田中助一(美術史学会会員)

雲谷派の流派体制と画風展開 山本英男

資料・年譜・系図・略歴・参考作品

参考作品目録・落款・印章・文献目録

出品目録(邦文・英文)

●A4版 222ページ ●アート紙110kg/

4色オフセット40ページ モノクロ100ページ

上質紙110kg82ページ



## (4)出品作品

作品番号 特別出品	絵師名	作品名	材質	形状	寸法(cm)	所蔵
〃	雪舟	山水小巻	紙本墨画	1巻	23.2×167.3	山口県立美術館
〃	〃	牧牛図(渡河)	紙本淡彩	1幅	30.0×30.5	山口県立美術館
〃	〃	牧牛図(牧童)	紙本淡彩	1幅	30.2×31.4	山口県立美術館
1	雲谷等顔	山水図屏風	紙本淡彩	6曲1双	各153.7×357.0	熊谷美術館
2	〃	群馬図屏風	紙本淡彩	6曲1双	各153.5×354.0	山口県立美術館
3	〃	唐人物図屏風	紙本淡彩	2曲1双	146.6×172.4	
4	〃	高士図	絹本著色	座屏2基のうち1基 (2面)	名径最大34.2	高桐院
5	〃	瀟湘八景図押絵貼屏風	紙本墨画	4曲1双	画面各55.0×39.1	龍光院
6	〃	達磨図	紙本著色	1幅	98.1×42.9	徳隣寺
7	雲谷等益	達磨図	紙本著色	1幅	99.5×39.5	智恩寺

作品番号	絵師名	作品名	材質	形状	寸法(cm)	所蔵
8	〃	山水図屏風	紙本淡彩	6曲1双	各150.0×356.4	
9	〃	樹下高士・山水図	紙本淡彩	3幅対	各114.2×46.6	
10	〃	樓閣山水図屏風	紙本淡彩	6曲1双	各153.5×355.4	大阪市立美術館
11	〃	琴棋書画図屏風	紙本著色金砂子	6曲1双	各61.4×362.4	熊谷美術館
12	〃	四季花鳥図屏風	紙本淡彩	6曲1双のうち右隻	169.0×372.0	東福寺
13	〃	喝石岩図	絹本淡彩	1幅	52.3×79.2	大慈院
14	〃	雪舟像	絹本淡彩	1幅	104.9×34.2	常栄寺
15	雲谷等与	雪舟像	絹本淡彩	1幅	83.1×30.8	
16	〃	維摩月夜乗船図	絹本淡彩	1幅	35.5×49.8	楞嚴寺
17	〃	樓閣山水図屏風	紙本淡彩	6曲1隻	146.2×350.4	山口県立美術館
18	雲谷等的	高士騎驢・花鳥図	(中)紙本淡彩 (左右)紙本著色	3幅対	各116.0×49.0	串本応挙芦雪館
19	〃	瀟湘八景図	紙本墨画	1幅	66.6×191.2	
20	雲谷等宅	樓閣山水図屏風	紙本淡彩	4曲1双のうち左隻	162.7×235.2	
21	〃	驟雨・蟹図	紙本淡彩	1幅(2面)	(驟)34.0×22.2 (蟹)23.2×24.3	
22	〃	韃靼人狩獵図	紙本著色	1幅	109.8×54.3	
23	雲谷等爾	韃靼人狩獵図屏風	紙本淡彩	6曲1双	各117.7×339.2	禅林寺
24	〃	山水図巻	紙本淡彩	1巻	36.7×1481.9	菊屋家住宅保存会
25	〃	対月図	紙本淡彩	1幅	71.0×43.9	山口県立美術館
26	〃	臨濟禪師像	絹本著色	1幅	89.6×39.5	西林寺
27	〃	崖下騎驢図	絹本淡彩	1幅	44.5×70.0	
28	雲谷等哲	花鳥図	絹本著色	双幅	各90.6×35.5	山口県立美術館
29	雲谷等瑠	琴棋書画図屏風	紙本淡彩	6曲1双	各153.6×358.2	山口県立美術館
30	〃	瀧見観音図	絹本淡彩	1幅	95.2×37.1	東京国立博物館
31	〃	花鳥図屏風	紙本金地著色	6曲1双	各159.2×361.8	
32	〃	壽老・松・梅図	(中)絹本淡彩 (左右)絹本墨画	3幅対	各107.5×35.5	
33	〃	牧馬図押絵貼屏風	紙本淡彩	2曲1隻	画面各130.0×58.5	
34	〃	萩八景図巻	絹本淡彩	1巻	39.2×924.3	防府毛利報公会
35	雲谷等甫	西湖図屏風	紙本淡彩	6曲1双	各155.2×356.8	
36	雲谷等珠	柳に孔雀・鳳凰図屏風	紙本金地著色	6曲1双	各154.7×355.4	
37	雲谷等祚	桜花図屏風	紙本金地著色	6曲1隻	159.0×355.6	禅昌寺
38	雲谷派	桜花図屏風	紙本金地著色	6曲1隻	159.4×356.4	禅昌寺
39	雲谷派	貼交屏風	絹本著色・紙本著色	2曲1隻(全16面)		山口県文書館
40	雲谷派	釈迦三尊・十六羅漢図	紙本淡彩	全19幅のうち6幅	各136.0×56.5	本禅寺
41	雲谷等有	西湖図	絹本淡彩	1幅	56.1×82.9	安養寺
42	〃	雲谷等爾像	紙本淡彩	1幅	97.0×43.9	徳隣寺
43	〃	老松図屏風	紙本金地墨画	6曲1隻	167.8×423.0	
44	〃	帝鑑図屏風	紙本金地著色	6曲1双	各161.2×353.2	東京国立博物館
45	雲谷等直	帝鑑図屏風	紙本金地著色	6曲1双	各155.4×357.6	
46	雲谷等鶴	花鳥図屏風	紙本金地著色	6曲1双	各156.4×359.8	山口県立美術館
47	〃	漁村夕照図	絹本淡彩	1幅	67.3×31.1	
48	〃	龐居士・靈昭女・花鳥図	絹本著色	3幅対	各103.6×36.5	東京国立博物館
49	雲谷等徴(澄)	瀟湘八景図押絵貼屏風	紙本淡彩	8曲1双のうち1隻	画面各126.4×39.6	萩市郷土博物館
50	〃	弁財天・花鳥図	絹本著色	3幅対	各109.2×44.3	
51	雲谷等叔	墨梅図	絹本墨画	双幅	各100.2×38.3	
52	〃	防長古器考(挿図)	紙本墨画・紙本淡彩	全161冊のうち6冊		山口県文書館
53	雲谷等琳	花鳥図屏風	紙本金地著色	2曲1双	各162.6×170.6	菊屋家住宅保存会

作品 番号	絵師名	作品名	材質	形状	寸法(cm)	所蔵
54	雲谷等陳(受)	喝石岩図	絹本著色	1幅	115.8×67.2	龍華院
55	雲谷等竺	内藤興盛像	絹本著色	1幅	86.7×41.5	善生寺
56	〃	西湖図屏風	紙本墨画金砂子	6曲1隻	155.5×356.4	山口県立美術館
57	〃	帝鑑図屏風	紙本著色金砂子	6曲1双	〃156.3×349.8	
58	雲谷等村	牧童図	紙本墨画	1幅	113.0×47.8	東京国立博物館
59	雲谷等潤	酔李白・太公望図	紙本淡彩	2幅	〃121.4×50.0	
60	〃	松・海棠に鯉図	絹本淡彩	双幅	〃84.2×33.3	
61	雲谷等徽	西湖図	絹本淡彩	1幅	55.5×86.9	萩市郷土博物館
62	雲谷等隆	山水図	絹本淡彩	双幅	〃95.8×33.0	
63	雲谷等球	武田信玄像	紙本著色	1幅	94.5×38.8	
64	雲谷等龍(溪)	金山寺図屏風	紙本墨画	6曲1隻	151.3×358.2	
65	〃	山水図屏風	紙本墨画	6曲1隻	152.9×354.4	
66	〃	花卉図	紙本著色	双幅	〃90.3×43.8	西林寺
67	雲谷等起	毛利家歴代肖像図	紙本淡彩	1幅	123.5×56.3	山口県立山口博物館
68	三谷等宿	鷹図押絵貼屏風	紙本淡彩	6曲1双	画面各117.0×52.4	
69	生駒等壽	瀟湘八景図巻	紙本墨画・紙本淡彩	1巻	28.5×1064.2	東京国立博物館
70	長富等珍	月に鷗鴎・牡丹図	(鷗)紙本墨画 (牡)紙本著色	2幅	〃120.7×50.2	萩市郷土博物館

## (5)展評など

新聞(報道記事をのぞく)

展評

「雲谷派の系譜—雪舟の後継者たち—」初公開作品中心に三百年の流れ追う 朝日新聞(西部) / (源) 61・10・19

「雲谷派の系譜」展をみて 簡明さと写実性に今日の新しさ持つ 中国新聞 / (寺本) 61・10・28

「雲谷派の系譜」展 画風の理解と再評価促す 読売新聞(西部) / (秋) 61・10・29

雲谷派の系譜展 流派の歴史掘り起こす 毎日新聞(西部) / (三田) 61・11・6

その他

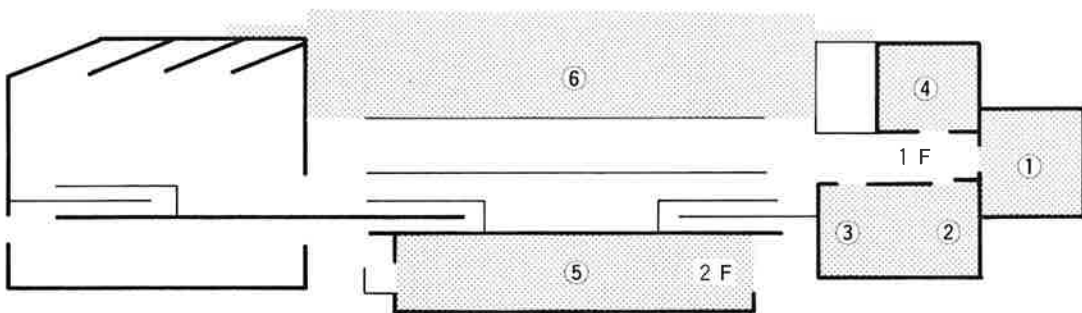
雲谷派の系譜展に寄せて 山本英男・県立美術館学芸員に聞く(上)(下) 朝日新聞(県内) / 61・10・23~24



雲谷派展会場風景

## (2)常設展

館蔵品（借用品をふくむ場合もある）の常時公開の場として常設展示室を設け、年4回でいどの展示替えでテーマを設定して館蔵品を紹介している。常設展示のエリアは、図に示されるように5つの室からなっており、このうち4室が1階フロア、1室が2階フロアに設置されている。前4室を常設展示室Ⅰと総称し、それぞれの室は特定の展示内容にかぎられている。すなわち、①絵画展示室Ⅰが香月泰男、②同Ⅱが小林和作、③資料展示室が版画・素描・画稿などの第2次資料、④郷土工芸室が萩焼および赤間硯の展観にそれぞれ利用されている。一方、2階フロアは⑤常設展示室Ⅱと称し、館蔵品全般から選ばれた作品紹介の場として利用されており、常設ⅠとⅡは相互補完的に機能し全体として偏りのない展示となるよう配慮されている。この他に戸外には⑥野外展示場が設けられている。ここは、館内展示が不可能な立体造形の紹介・展観の場として現代彫刻数点が設置されているが、鑑賞の合間の休憩の場としても利用されている。



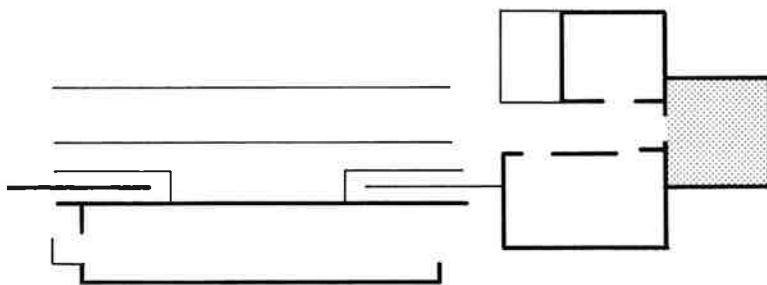
常設展示室(①～④)	462.309㎡（延べ面積）
常設展示室Ⅱ(⑤)	471.825㎡（◇）
野外展示場(⑥)	1,370㎡（◇）

※ 凡例 常設展示記録は、各展示室に即して整理し、また、個々については、名称・趣旨・出品目録の順に編集されている。

## 常設展示室 I

### 絵画展示室 I

(香月泰男)



#### 1. シベリア・シリーズ

1985(昭和60)年4月2日～6月30日

#### 趣 旨

「シベリア・シリーズ」は、洋画家香月泰男の出征から復員にいたるまでの従軍体験（1943～47）をシベリア抑留期を中心に57点の連作で絵画化したものである。復員後まもなく制作に着手され没年までつづけられた同シリーズ（1947～74）は、浜田知明の銅版画連作「初年兵哀歌シリーズ」などとともに戦争をモチーフにして成功した点で我が国戦後洋画史にはきわめてユニークな仕事といっている。

#### 出品作品（すべて油彩・キャンバス）

番号	作品	制作年
1	朕	1970
2	点呼(右・左)	1971
3	バイカル	1971
4	-35℃	1971
5	日本海	1972
6	雪山	1972
7	絵具箱	1972
8	海位爾	1973
9	道	1973
10	デモ	1972
11	渚(ナホトカ)	1974
12	月の出	1974
13	日の出	1974

#### 2. 常設特別展示 香月泰男・浜田知明 ——戦後40年からの追想——

1985(昭和60)年7月2日～9月8日

#### 趣 旨

1945年、第二次世界大戦の終結。敗戦によって戦後をむかえた日本は、その後40年のあいだに世界の経済大国になるまでに復興をとげた。だが、この戦後は当時を体験した美術家にとってどのような意味をもっていたのだろうか。アメリカの中国美術史家マイケル・サリヴァンは、戦後日本において戦争の影響をなんらかの形で自己の表現活動に反映した美術家はきわめて少ないと指摘する。日本の

戦後美術は戦争へのこだわりを一掃したところから出発した。彼はその現象を、戦争にこだわりそのリアクションから再出発した欧米の戦後美術と比較して、そこに絵画から苦悩や思想性を排除し、軽さ、美しさ、情感などを優先させる日本美術の伝統的特質を見いだしている。しかし、実際には日本にも戦争にこだわりつづけた少なからぬ美術家はいた。彼らの仕事は経済成長期以降の繁栄のおかげでしだいに風化しつつある戦争の悲惨や不幸を個人的メッセージとして人びとに語りつづけてもきた。その中で、もっとも息のながくつづけられてきた仕事として注目されるのが、香月泰男（山口県）の「シベリア・シリーズ」と浜田知明（熊本県）の「初年兵哀歌シリーズ」である。ふたりはともに西日本の出身であり、また彼らの仕事は地元で制作されつづけてきた点でも共通している。このふたつのタイプの異なる連作を通して、彼らにとっての戦争と戦後を考えてみたい。

## 出品作品

番号	作品	制作年
浜田知明 「初年兵哀歌シリーズ」		
1	初年兵哀歌(ぐにゃぐにゃとした太陽がのぼる)	1952
2	初年兵哀歌(陣地)	1953
3	初年兵哀歌(便所の伝説)	1951
4	初年兵哀歌(歩哨)	1951
5	初年兵哀歌(歩哨)	1954
6	初年兵哀歌(濫)	1978
7	初年兵哀歌	1953
8	初年兵哀歌(歩哨)	1951
9	初年兵哀歌(風景)	1952
10	初年兵哀歌(風景)―(一隅)	1954
11	初年兵哀歌(銃架のかげ)	1951
香月泰男「シベリア・シリーズ」		
12	雲	1968
13	別	1967
14	護	1969
15	雨	1968
16	海位爾	1973
17	黒の太陽	1961
18	ホロンバイル	1960
19	朕	1970
20	青の太陽	1969
21	北へ西へ	1959
22	避難民	1960
23	業火	1970
24	運ぶ人	1960
25	アムール	1962
26	埋葬	1948
27	穴掘人	1960
28	乗客	1957
29	涅槃	1960
30	雪	1963
31	海〈ペーチカ〉冬	1966
32	星〈有刺鉄線〉夏	1966
33	ダモイ	1959

番号	作品	制作年
34	復員〈タラップ〉	1966
35	伐	1964
36	凍河〈エニセイ〉	1966
37	-35℃	1971
38	月の出	1974
39	〈私の〉地球	1968

### 3. シベリア・シリーズ

1985(昭和60)年9月10日～12月8日

出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作品	制作年
1	雨〈牛〉	1947
2	朝陽	1965
3	雪	1963
4	煙	1969
5	道	1973
6	1945	1959
7	凍土	1965
8	奉天(右・左)	1970
9	雪〈窓〉	1963
10	鋸	1964
11	左官	1956
12	絵具箱	1972
13	雲	1968

### 4. シベリア・シリーズ

1985(昭和60)年12月10日～1986(昭和61)年3月9日

出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作品	制作年
1	避難民	1960
2	北へ西へ	1959
3	業火	1970
4	囚	1965
5	アムール	1962
6	運ぶ人	1960
7	乗客	1957
8	埋葬	1948
9	雪	1963
10	涅槃	1960
11	伐	1964



番号	作品	制作年
12	海〈ペーチカ〉冬	1966
13	列	1961

## 5. シベリア・シリーズ

1986(昭和61)年3月11日～4月13日

出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作品	制作年
1	〈私の〉地球	1968
2	復員〈タラップ〉	1966
3	点呼(右・左)	1971
4	ナホトカ	1961
5	私〈マホルカ〉	1966
6	渚〈ナホトカ〉	1974
7	デモ	1973
8	日本海	1972
9	バイカル	1971
10	荊	1965
11	餓	1964
12	ダモイ	1959
13	-35℃	1971

## 6. 香月泰男の中期作品

1986(昭和61)年6月27日～9月21日

### 趣 旨

1940年から50年代にかけての20年間は、大きく分けると、香月泰男の画業において中期様式が生まれ定着する時期と、後期様式(シベリア・シリーズ)への過渡的な様相をしめす時期に分けられる。中期様式は、茶や青を主調色にした心象性のつよい画面が特徴だが、50年代になると画面はしだいに構成化の度合をつよめ、さらに後半では白の使用がめだってくるとともにマチエールのこころみとして方解末が絵具に混ぜられるようになる。こうした表現傾向の変化を代表的な作品でたどるとともに、この時期の画稿帖や未公開の自筆文記録などを併設展示して、絵画の変化を画家の内的生活との関わりのもとで鑑賞できるように構成した。

出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作品	制作年
1	石と壺	1940
2	釣床	1941
3	風	1948
4	草上	1950
5	鳩と青年	1954
6	仕事場	1952

番号	作品	制作年
7	休憩	1952
8	二人	1955
9	1945	1959
10	北へ西へ	1959
11	涅槃	1960
12	業火	1970
13	-35℃	1971
14	〈私の〉地球	1968

\*出品資料 1950年代の画原帖 8点ほか

## 7. シベリア・シリーズ(1)

1986(昭和61)年9月23日～12月14日

出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作品	制作年
1	餓	1964
2	埋葬	1948
3	運ぶ人	1960
4	涅槃	1969
5	朕	1970
6	点呼(右・左)	1972
7	雪山	1972
8	海〈ベーチカ〉冬	1966
9	〈私の〉地球	1968
10	日本海	1972
11	業火	1970

## 8. シベリア・シリーズ(2)

1986(昭和61)年12月16日～1987(昭和62)年3月15日

出品作品 (すべて油彩・キャンバス)

番号	作品	制作年
1	凍土	1965
2	北へ西へ	1959
3	黒の太陽	1961
4	雨	1967
5	鋸	1964
6	星〈有刺鉄線〉夏	1966
7	青の太陽	1969
8	業火	1970
9	-35℃	1971
10	バイカル	1971
11	月の出	1974
12	日の出	1974

番号	作品	制作年
13	〈私の〉地球	1968
14	日本海	1972

## 9. シベリア・シリーズ(3)

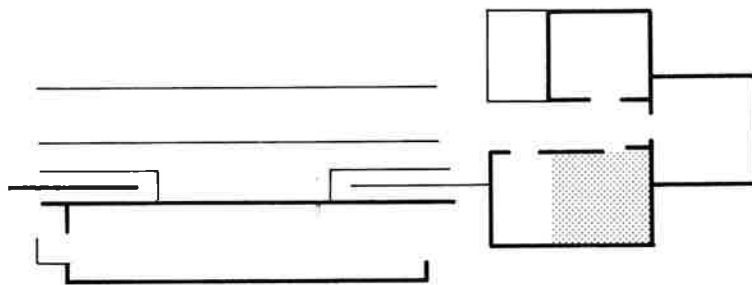
1967(昭和42)年3月17日～6月21日

### 出品作品

番号	作品	制作年
1	餓	1964
2	1945	1959
3	穴掘人	1960
4	ナホトカ	1961
5	窓〈雪〉	1963
6	列	1961
7	凍土	1965
8	伐	1964
9	凍河〈エニセイ〉	1966
10	煙	1969
11	奉天(右・左)	1970
12	雨	1968
13	バイカル	1971

## 絵画展示室Ⅱ

(小林和作)



## 1. 小林和作の油彩画

1985(昭和60)年4月2日～6月30日

### 趣 旨

山口県吉敷郡秋穂町出身の小林和作(1888～1974)は、豊麗な色彩と筆太でのびやかなタッチで日本各地の自然を描き、風景画の領域に独特な画境をきりひろいた。彼の油彩画は、日本人の感性にうったえかける独特の主観的装飾的スタイルが特長だが、小林和作の絵に多くの人びとが共感を寄せるとするならば、それは、四季おりおりの風物自然に対して多くの日本人がもっている季節感、自然観を集約するものが画家のスタイルのなかに凝縮されているからかもしれない。各時期の作品とともに、

小林和作の日本画を併陳した。

#### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	上高地(其の三)	小林和作	油彩・キャンバス	1925
2	エクス風景	〃	〃	1929
3	海	〃	〃	1964
4	婦人像	〃	〃	
5	海	〃	〃	1964
6	秋山	〃	〃	
7	春	〃	〃	
8	佐渡の海	〃	〃	
9	春の海	〃	〃	1974
10	果物	〃	〃	
11	きつつき	〃	紙本彩色・軸	
12	桃鳩	〃	紙本淡彩・軸	
13	檉鳥	〃	紙本彩色・軸	
14	南画風山水	〃	絹本墨画彩色・軸	
15	山茶花と青鳩	〃	絹本彩色・軸	
16	白椿	〃	〃	

## 2. 特別展示 香月泰男・浜田知明 ―戦後40年からの追想―

1985(昭和60)年7月2日～9月8日

\* 絵画展示室(香月泰男)2. のとおり

## 3. 小林和作のコレクション

1985(昭和60)年9月10日～12月8日

### 趣 旨

吉敷郡秋穂町出身の小林和作(1888～1974)は、その師友にとってはパトロン的な存在でもあり、また自分の目で選びぬいた古美術(浮世絵、南画、琳派作品など)の収集家としても知られている。

今回は画家自身の作品と、彼のコレクションのなかから、林武や梅原龍三郎など彼の師友の作品および浮世絵のコレクションの一部などを紹介した。

#### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状
1	南画風山水	小林和作	絹本墨画彩色・軸
2	きつつき	〃	紙本彩色・軸
3	白椿	〃	絹本彩色・軸
4	隠岐国賀	〃	水彩・紙

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
5	大佐山	小林和作	水彩・紙	
6	日の岬	〃	〃	
7	川治湖	〃	〃	
8	松山付近	〃	〃	
9	女	里見勝三	油彩・キャンバス	
10	婦人像	〃	〃	
11	大和絵人物	松岡映丘	絹本彩色・軸	
12	富士	竹内栖鳳	〃	
13	洛北春風	堂本印象	〃	
14	紺糸を干す	小野竹喬	絹本彩色・軸	
15	フローレンスタ映	西山英雄	紙本彩色・額	
16	カプリ島風景	山脇信徳	油彩・キャンバス	
17	ノートルダム	林 武	水彩・紙・額	
18	椿	中川一政	紙本彩色・額	
19	婦人の顔	青山熊治	油彩・キャンバス	
20	濃彩人物画	福沢一郎	油彩・板	
21	女と龍	梅原龍三郎	水彩・紙・扇面額	

#### 4. 特別展示 雪舟と芳崖

1985(昭和60)年11月1日～11月17日

##### 趣 旨

中世絵画史を語るうえで雪舟の存在を抜きに考えることはできない。雪舟(1420～1506)は中国(明代)の地をみずから踏んで宋・元画を学び、帰国後は豊後、周防などに画室をかまえて独自の画風をうちたてた。爾来、晩年にいたるまで全国各地をめぐり写生の境地をふかめていったが、山口はその活動の本拠地であり、ここに彼は画室、雲谷庵をかまえ晩年をすごした。この雪舟の山口における画蹟は、雲谷派をはじめとする近世の画家たちに受け継がれていったが、幕末から明治中期に活動した狩野芳崖(1828～88)も、狩野派の絵画修業として雪舟を模写したひとりである。雪舟の芳崖への影響関係を具体的にしめすことはむづかしいが、修業期の芳崖において雪舟の存在はすくなくからぬものがあつたことは十分に推測される。

##### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	山水小卷	雪舟	紙本墨画・画卷	1474
2	牧牛図(牧童)	〃	紙本淡彩・軸	
3	牧牛図(渡河)	〃	〃	
4	八臂弁財天図	狩野芳崖	絹本彩色・軸	
5	羅漢図	〃	〃	
6	羅漢図	〃	〃	
7	懸崖飛沫図	〃	絹本墨画・軸	
8	雪中山水図	〃	紙本墨画淡彩・軸	
9	五十鈴川神仙図巻	〃	紙本墨画淡彩・画卷	

## 5. 小林和作の水彩画

1985(昭和60)年12月10日～1986(昭和61)3月9日

### 趣 旨

モチーフをもとめて日本各地を旅した小林和作は、旅先で目にした自然の景観をさまざまな油絵にまとめているが、彼が遺した風景水彩画はその数をはるかに上まわっている。当館で所蔵する風景水彩画は、鉛筆やペンで輪郭をとり、そのうえに透明水彩絵具で塗りかさねる手法のものがほとんどで、複雑な技巧のあとがみえないところは、それが実景をまえにして即興的に描かれたことをしめしている。それだけに臨場感があり、また実景の澄んだ空気や空間のひろがりをつたえるうえで透明水彩絵具が実に効果的につかわれていることもその特長のひとつとなっている。透明水彩絵具への愛好は、小林和作が若い時代にセザンヌに傾倒したといわれていることと無縁ではないかもしれない。館蔵する水彩画を展示紹介した。

### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状
1	蓼科山中	小林和作	水彩・紙
2	英彦山	〃	〃
3	妙高山中	〃	〃
4	阿久根	〃	〃
5	〃	〃	〃
6	福光	〃	〃
7	大山	〃	〃
8	眼下風景	〃	〃
9	桜島	〃	〃
10	土佐四手峠	〃	〃
11	本郷風景	〃	〃
12	青木湖	〃	〃
13	奈良	〃	〃
14	岡山金光付近	〃	〃
15	刑部	〃	〃
16	九重山中星生山腹	〃	〃
17	青木湖	〃	〃
18	戸隠山中	〃	〃
19	伊予久方	〃	〃

## 6. 小林和作のコレクション

1986(昭和61)年3月11日～4月13日

### 趣 旨

小林和作は、その師友にとってはパトロ的な存在でもあり、また自分の目で選びぬいた古美術(浮世絵、南画、琳派など)の収集家としても世に知られている。画家自身の作品とともに、彼のコレクションのなかから林武や梅原龍三郎などの作品を紹介した。

## 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	フローレンスタ映	西山英雄	紙本彩色・額	
2	カプリ島風景	山脇信徳	油彩・キャンバス	
3	婦人の顔	青山熊治	〃	
4	ノートルダム	林 武	水彩・紙・額	
5	椿	中川一政	紙本彩色・額	
6	濃彩人物画	福沢一郎	油彩・板	
7	女と龍	梅原龍三郎	水彩・紙・扇面額	
8	慶長時代風俗遊樂之図		紙本彩色・軸	
9	寛永時代風俗人物図		〃	
10	立ひざ美人	政信	絹本彩色・軸	
11	豊国風立美人		紙本彩色・軸	
12	歌麿風肉筆浮世美人		〃	
13	美人画	宗寿	絹本彩色・軸	
14	美人画	広丸	紙本彩色・軸	

\*このほか、小林和作作品数点

## 7. 小林和作の風景画

1986(昭和61)年6月27日～9月21日

### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	佐渡の海	小林和作	油彩・キャンバス	1964
2	海	〃	〃	
3	海	〃	〃	
4	風景	〃	〃	
5	風景	〃	〃	
6	山湖	〃	〃	1955
7	秋山	〃	〃	
8	秋晴	〃	〃	
9	風景	〃	〃	
10	春の山	〃	〃	1951
11	室戸岬	〃	水彩・紙	
12	紀伊大島	〃	〃	
13	鎌手	〃	〃	
14	隠岐白島	〃	木版・紙	
15	坊ノ津の海	〃	〃	
16	紀州の海	〃	〃	
*以下、小林和作コレクション				
17	水館図夏		紙本墨画淡彩・軸	
18	避世漁樵図	富岡鉄斎	〃	
19	富士	竹内栖鳳	絹本彩色・軸	
20	紺糸を干す	小野竹喬	〃	
21	洛北春風	堂本印象	〃	

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
22	フローレンスタ映	西村英雄	紙本彩色・額	
23	ノートルダム	林 武	水彩・紙・額	

## 8. 特別展示 中本達也

1986(昭和61)年9月23日～12月14日

### 趣 旨

戦後洋画界において、山口県大島郡出身の中本達也（1922～73）は特異な存在を占めている。中本達也のテーマは人間が生きているその根源的な姿をひたすら追究するところにあった。彼は、海などに生きる人びとのたくましい生命を、力のこもった線、象の皮膚のように厚いマチエール、それらをつきぬけるような色彩などで描きだしたが、それはまさしく生命力そのものの表現であり、またそうした表現要素から線の要素のみを抽出したのが、彼の銅版画とすることができる。中本達也の銅版画は、技術的には腐食銅版（エッチング）だが、どちらかという直彫（ドライポイント）的要素のつよい銅版画であり、彫り刻んだ線は生々しいほどに作家の息づかいをつたえている。油彩画はじめ銅版画、水彩などの作品を通して中本達也が一貫して追究したテーマとそれに依拠してつくられた彼の絵画世界を紹介する。

### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	洪水	中本達也	油彩・キャンバス	1956
2	憩える海人	〃	〃	1957
3	魚人	〃	〃	1958
4	渇	〃	〃	1958
5	岩の蛾	〃	〃	1961
6	海の扉	〃	〃	1961
7	残された壁(壇)	〃	〃	1967
8	残された壁(女)	〃	〃	1967
9	人	〃	〃	1967
10	人間の邑(右)	〃	石版・紙	1968
11	人間の邑(左)	〃	〃	1968
12	海	〃	銅版・紙	1962
13	さかな	〃	〃	1962
14	少女	〃	〃	1962
15	森	〃	〃	1962
16	南瓜	〃	〃	1962
17	夏の花	〃	〃	1962
18	春	〃	〃	1962
19	野	〃	〃	1962
20	鳥	〃	〃	1962
21	Sacra S. Michele	〃	水彩・パステル・紙	1964
22	古代ローマの二人	〃	墨・紙	1964
23	カット絵原画	〃	〃	1968
24	〃	〃	〃	1968
25	〃	〃	油彩・墨・紙	1968



番号	作品	作者	材質・形状	制作年
26	カット絵原画	中本達也	墨・コラージュ・紙	1968
27	M氏宛葉書	〃	墨・紙	1970
28	装画	〃	油彩・墨・紙	
29	〃	〃	墨・紙	
30	黒潮	〃	カゼインカラー・紙	1959

## 9. 小林和作の世界

1986(昭和61)年12月16日～1987(昭和62)3月15日

### 趣 旨

小林和作は、はじめ日本画を学んだのち洋画に転向し、とくに豊かな色彩を駆使した野生と気品をあわせもつ風景画において独創的な境地をきりひらいた。小林和作は、また油彩画に本領を発揮するかたわら、メモがわりの水彩スケッチ、余技的な日本画や陶器の絵付けなど、数々の興味深い小品も残している。それにユーモアあふれる随筆や自分の審美眼を唯一のよりどころとして集められたいわゆる小林コレクションも、小林和作の人間の魅力の一面をよく伝えている。

そうした幅ひろい小林芸術の一端を、油彩画をはじめさまざまな資料をとおして紹介した。

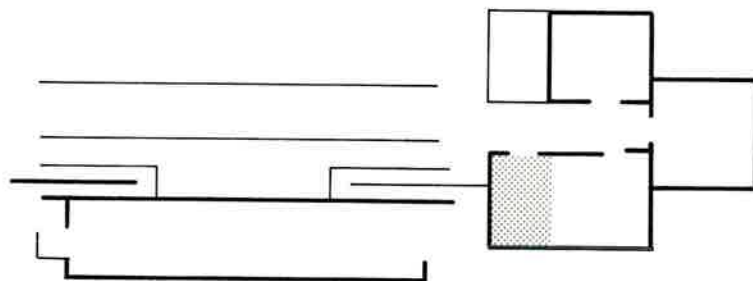
### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	秋果	小林和作	油彩・キャンバス	
2	婦人像	〃	〃	1966
3	春の山	〃	〃	
4	秋山	〃	〃	
5	春	〃	〃	
6	海	〃	〃	1964
7	佐渡の海	〃	〃	
8	山湖	〃	〃	1955

\*このほか、固定ケースに小林和作の日本画数幅、絵付け皿、資料など

## 資料室展示室

(美術史資料のほか)



### 1. 中本達也の銅版画

1985(昭和60)年9月10日～12月8日

#### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	鳥	中本達也	銅版・水彩・紙	1957
2	ザクロ	〃	銅板・紙	1960
3	南国の夷	〃	〃	1961
4	魚	〃	〃	1959
5	小さな花	〃	〃	1960
6	生き物	〃	〃	1961
7	潮	〃	〃	1960
8	網	〃	〃	1960
9	一つの葉	〃	〃	1960
10	黒土	〃	〃	1960
11	青い夷	〃	〃	1960
12	壁の人	〃	〃	1962
13	少女	〃	〃	1960
14	西瓜	〃	〃	1960
15	巢	〃	〃	1961

### 2. 宮崎進・山本文彦のデッサンと版画

1985(昭和60)年12月10日～1986(昭和61)年3月9日

#### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	ふたつのコンポジション	宮崎 進	鉛筆・紙	
2	裸のコンポジション	〃	〃	
3	顔	〃	〃	
4	こしかける	〃	〃	
5	よりかかる女	〃	〃	
6	ひざまづく裸婦	〃	〃	
7	ふたつの裸	〃	〃	

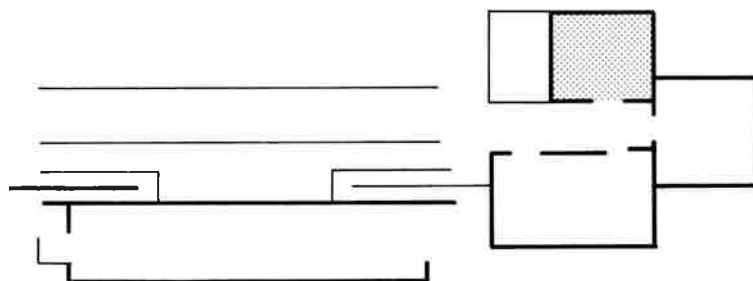
番号	作品	作者	材質・形状	制作年
8	立つ女	宮崎 進	鉛筆・紙	
9	ねむり	山本文彦	石版・紙	1976
10	てんとうむし	〃	〃	1976
11	ゆふぐれ	〃	〃	1976
12	ずきん	〃	〃	1976
13	みず	〃	〃	1976
14	かべ	〃	〃	1976

### 3. 画卷展

1986(昭和61)年12月16日～1987(昭和62)年3月15日

\* 佐々木縮往 韃靼人狩獵図巻ほか

### 郷土工芸室



#### 1. 郷土の陶芸Ⅲ

1985(昭和60)年2月19日～5月19日

#### 趣 旨

現在では萩焼一色に塗りつぶされた感のある山口県の陶芸も、近世においてはさまざまな窯が各地に築かれ、さかんに陶芸活動がいとなまれていた。「シリーズ・郷土の陶芸」は、そういった陶磁器を紹介し、山口県の陶磁史を概観しようとするものである。

#### 出品作品

番号	作品	所 蔵
1	須佐松鶴文花入	須佐町立中央公民館
2	須佐龍文花入	〃
3	須佐鉢	〃
4	須佐鉢	〃
5	須佐鉢	〃
6	須佐耳付花入(町指定文化財)	〃
7	須佐獅子置物	〃
8	須佐三島茶碗	個人蔵
9	須佐飴釉徳利	〃
10	須佐飴釉水注	〃
11	須佐手付油壺	〃

番号	作品	所蔵
12	須佐水注	個人蔵
13	須佐飴釉花入	〃
14	須佐壺	〃
15	須佐香炉	山口県立山口博物館
16	須佐獅子置物	〃
17	須佐油壺	個人蔵
18	須佐茶碗	〃
19	須佐破片	〃

## 2. 近・現代の萩焼と赤間硯

1985(昭和60)年5月21日～8月11日

### 趣旨

萩焼は、素地となる大道土の性質を最大限にいかしきって、独自のほだあいをもったやきものである。西日本各地の陶芸は、いわゆる文祿・慶長の役のさいに渡来した李朝陶工の系譜をひくものが多く、萩焼も江戸時代はじめに、李勺光、李敬の名で伝えられる李朝の陶工によって窯がひらかれたといわれる。以後、李朝陶芸の特質を色濃くのこしながらも、楽焼などとの交流によって和風化をしめし、茶碗を中心に、いわゆる茶陶としての地位を確立、今日に及んでいる。そうした長い萩焼の歴史をふまえて作陶にうちこんできた明治以降の代表的作家の作品を紹介した。

一方、赤間硯は、現在は楠町を中心に採取される良質の原石を加工するもので、その歴史はすでに室町時代にその存在が確認されるほど古い伝統工芸品。江戸時代には赤間ヶ関の発展とともに名物としてさかんに生産、販売され、「硯商う店軒をつらねて」と頼山陽の日記にみられるような繁栄ぶりをしめすとともに、墨をこまかくおろし筆をいためない硯として文人墨客に珍重されてきた。現代における赤間硯の第一人者、故堀尾卓司の作品を紹介した。

### 出品作品

番号	作品	作者	制作年
1	萩ちりめん釉花入れ	坂高麗左衛門(11代)	1979
2	萩魚文壺	〃	1975
3	萩茶碗	〃	1975
4	萩茶入れ	〃	
5	萩刷毛目茶碗	坂倉新兵衛(12代)	
6	萩茶碗	〃	
7	萩茶入れ	坂倉新兵衛(14代)	1974
8	萩茶碗	坂田泥華(13代)	1977
9	萩灰被耳付花入	田原陶兵衛(12代)	1979
10	萩茶碗	〃	1978
11	萩筆洗切茶碗	三輪休和	1975
12	萩茶碗	三輪休雪(11代)	1975
13	萩茶碗	〃	1979
14	麦文壺	吉賀大眉	1979
15	花器「暁雲」	〃	1946
16	萩井戸茶碗	〃	1973
17	赤間硯(蘭花研)	堀尾卓司	1956
18	〃(豊艶)	〃	1959
19	〃(双体)	〃	
20	〃(すみすり)	〃	1979

### 3. 現代の陶芸

1985(昭和60)年8月13日～11月17日

#### 趣 旨

伝統的拘束のつよい陶芸の分野において、単に新しい造形の可能性を探るというだけでなく、逆に新しい表現を求めるために土と火という素材を選んだといえる作家たちにとって、もはやジャンルの枠は存在しないのかもしれない。新収蔵品をふくめ、現代陶芸を代表する作家の作品をとおして陶による新しい造形の世界を紹介した。

#### 出品作品

番号	作 品	作 者	制作年
1	赤ちゃんのヘルメット	田中英人	1973
2	表層・深層	星野 暁	1982
3	コピー'82	三島喜美代	1982
4	起土	伊藤公象	1982
5	砂の聖書	荒木高子	1980
6	証言	鯉江良二	1973
7	雷童	三輪龍作	1981
8	アイス・バケツ	P.ボーコス	1982
9	プレート	〃	1982
10	陶酔記	佐藤 敏	
11	モナリザ	〃	
12	無題	中村康平	
13	世紀末の風景	〃	1985
14	伝道の書Ⅱ	西村陽平	1975
15	パンチを侵蝕するアルミ	〃	1980

### 4. 郷土の陶芸Ⅳ

1985(昭和60)年11月19日～1986(昭和61)年2月23日

#### 出品作品

番号	作 品	所 蔵
1	鉄絵群仙図大鉢	萩市郷土博物館
2	色絵寿老人図茶入	〃
3	染付人物図水指	〃
4	染付花鳥図蓋付瓶	〃
5	染付人物図瓶	〃
6	染付唐子図杯洗	〃
7	染付人物図鉢	〃
8	色絵高砂図杯	〃
9	色絵高砂図杯	〃
11	色絵官女図杯	〃
12	色絵美人図杯	〃

番号	作 品	所 蔵
13	色絵人物杯	萩市郷土博物館
14	色絵鯉図杯	〃
15	兜采配図大杯	〃
16	太刀軍配図大杯	〃
17	桜花図碗	〃
18	桜花図杯台	〃
19	色絵蓋付碗(五客)	〃
20	色絵高砂図杯	〃
21	色絵唐子図杯	〃
22	色絵浦島図杯	〃
23	色絵武者図杯	〃
24	色絵杯(四客)	個 人 蔵
25	染付網目文皿	〃
26	色絵人物文瓶	〃
27	色絵萩図杯(三客)	〃
28	菊花文大瓶	〃
29	色絵鳳文香炉	〃
30	染付笹図大瓶	山口県立山口博物館
31	色絵美人図杯洗	〃
32	染付端果文八稜鉢	〃
32	染付花鳥文瓶	〃
34	染付花卉文瓶	〃
35	染付金彩海樹文筆筒	〃
36	色絵人物文小皿(九客)	〃
37	染付梅樹文大皿	個 人 蔵

## 5. 古萩と現代

1986(昭和61)年2月25日～4月13日

### 出品作品

番号	作 品	作 者	制作年
1	萩花文割俵形鉢	古萩	
2	萩桧垣文筆洗割高台茶碗	〃	
3	萩茶碗	〃	
4	萩茶碗	〃	
5	萩飛獅子置物	〃	
6	萩牡丹唐草文手洗	〃	
7	花器「暁雲」、萩井戸茶碗	吉賀大眉	1973
8	萩茶碗	坂倉新兵衛(12代)	
9	萩水指	〃	
10	萩御本手茶碗	坂倉新兵衛(14代)	1974
11	萩茶碗	坂高麗左衛門(11代)	1980
12	萩魚文壺	〃	1975
13	萩茶碗	坂田泥華(13代)	1977

番号	作品	作者	制作年
14	萩茶碗	田原陶兵衛(12代)	1978
15	萩編笠水指	三輪休和	1973
16	萩水指	三輪休雪(11代)	1981
17	萩鉢「早春」	三輪龍作	1981

## 6. 萩焼と赤間硯

1986(昭和61)年6月27日～10月11日

### 出品作品

番号	作品	作者	制作年
1	萩茶碗	坂倉新兵衛(12代)	
2	萩水指	〃	
3	萩茶碗	坂倉新兵衛(14代)	1974
4	萩茶碗	田原陶兵衛(12代)	1978
5	萩水指	〃	1978
6	萩茶碗	坂田泥華(13代)	1977
7	萩茶碗	三輪休和	1975
8	萩水指	〃	1973
9	萩茶碗	三輪休雪(11代)	1979
10	萩水指	〃	1981
11	萩茶碗	坂高麗左衛門(11代)	1980
12	麦文壺	吉賀大眉	1946
13	萩井戸茶碗	〃	
14	白釉壺(花器)	〃	1962
15	萩鉢「雷童」	三輪龍作	1981
16	萩鉢「早春」	〃	1981
17	赤間硯(双体)	堀尾卓司	
18	〃 (豊麗)	〃	1959
19	〃 (すみすり)	〃	1979
20	〃 (蘭花研)	〃	1956
21	〃 (ビルディング)	〃	1970
22	〃 (おしべ)	〃	1957

## 7. 個人コレクション展Ⅲ

1986(昭和61)年10月13日～1987(昭和62)年1月18日

### 趣 旨

個人コレクションは、たとえば国宝、重要文化財といった名品とよばれるものがなくとも、テーマや方向性が明らかで、まとまった個性のようなものが感じられるものであれば意味があるといえよう。「シリーズ・個人コレクション」は、県内のそうした個性のあるコレクションを所蔵家の許諾を得てシリーズで紹介するもので、今回は徳山市の萬台彦治郎氏の中国・朝鮮・日本の陶磁器コレクションを紹介した。

## 出品作品

番号	作 品
1	青磁花文三足鉢
2	青磁花文三足盤
3	青花花鳥文鉢(芙蓉手)
4	青磁双耳壺(宋胡録)
5	青磁鉄絵花文瓶
6	青磁浄瓶
7	白磁鉄絵花文瓶
8	白磁青花雲龍文壺
9	萩割高台茶碗
10	萩俵形茶碗
11	萩片口(三輪雪山)
12	萩建水・萩湯冷まし(大和松緑)
13	楽山耳付花瓶(倉崎権兵衛)
14	絵唐津片口
15	唐津花卉文水指
16	瀬戸印花文水注
17	瀬戸龍文石皿
18	信楽肩衝壺
19	伊賀耳付水指
20	丹波四耳壺
21	赤膚鶴亀文水指
22	八千波千鳥文瓶

## 8. 郷土の陶芸

1987(昭和62)年1月20日～4月19日

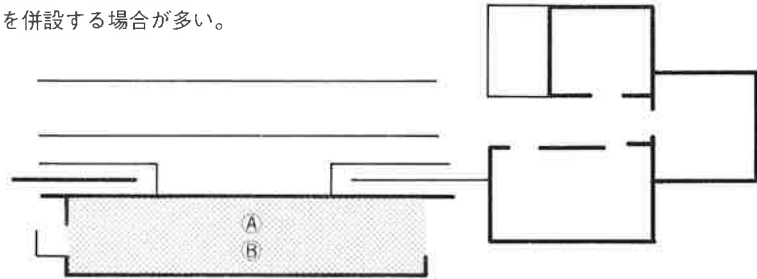
### 出品作品

番号	作 品	所 蔵
1	佐野土鼎	玉祖神社
2	佐野 壺	〃
3	佐野大壺	〃
4	佐野土鼎	〃
5	佐野 壺	〃
6	佐野大壺	〃
7	佐野土鼎(明治銘)	〃
8	佐野土鼎(昭和銘)	〃
9	西浦赤絵大鉢	個人蔵
10	佐野火鉢	〃
11	佐野蒸籠	〃
12	手回しロクロ	〃
13	西浦素焼香炉	山口県立山口博物館
14	西浦赤絵蓋付鉢	
15	西浦赤絵大鉢	〃
16	鶏血水注	〃
17	堀越手付壺	〃
18	堀越雲助	〃
19	佐野火消壺	〃
20	堀越蓋付壺	〃



## 常設展示室Ⅱ

※ 展示エリア①②はともに石膏ボードによるパネル壁面からなっているが、このうち展示エリア②の壁面は可動壁面となっており、この壁面の奥には固定ケースが設置されている。したがって、このエリアは壁面として油彩等の展示に利用されるほか、これを取払い、固定ケースで日本画等の展示も可能である。このため、同時期に①②を使い分け、別趣旨の常設展示を併設する場合が多い。



### 1. 藤田隆治展

1985(昭和60)年2月5日～5月12日

#### 趣 旨

豊浦郡豊北町に生まれた藤田隆治(1907～65)は、はじめ長府に帰郷中の高島北海に師事、のち上京して野田九浦に就いて日本画を学んだ。日本画会や青龍社展で活躍、1936年のベルリンオリンピック芸術展では3等賞を受賞した。戦後は個展を中心に作品を発表、毎日新聞社主催の現代日本美術展にも委嘱出品をしている。1965年1月57歳で逝去。戦前は平明な写実を基本とした作品を描いたが、戦後は絵具の材質感を生かした幻想的な作風に移った。遺族から寄贈された戦後制作の作品を展示した。

#### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	原始太陽	藤田隆治	紙本彩色・額	1960
2	三眠	〃	〃	1963
3	動的な群像	〃	キャンバス・彩色・額	1964
4	魚貝石	〃	絹本彩色・額	
5	鳥と魚	〃	〃	
6	鷺のいる風景	〃	紙本彩色・屏風2曲1双	
7	魚のいる風景	〃	キャンバス彩色・額	
8	有明海	〃	紙本彩色・額	
9	格子魚	〃	〃	

### 2. 安井賞受賞作家展

1985(昭和60)年2月5日～5月12日

#### 趣 旨

昭和初期の日本洋画壇の大きな支柱であった安井曾太郎の功績を記念し、1956(昭和31)年財団法人安井曾太郎記念会が誕生、現代美術の振興のため「安井賞」が設定された。以後この賞が具象的傾向の新人の登龍門としてたかく評価され、多くの受賞者を画壇におくりだしている。山口県関係作家のなかには中本達也(故人・第3回)宮崎進(第10回)山本文彦(第14回)の諸氏がこの賞を受賞し

ているが、本展ではこれらの作家に焦点をあて、その代表作を展示・紹介した。

#### 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	憩える海人	中本達也	油彩・キャンバス	1957
2	森の声	〃	〃	1960
3	海の扉	〃	〃	1961
4	残された壁(女と男)C	〃	油彩・紙・板	1967
5	人間の扉	〃	油彩・キャンバス	1967
6	残された壁(人間断片A)	〃	混合技法コラージュ・紙	1967
7	旅芸人	宮崎 進	油彩・キャンバス	
8	小屋	〃	〃	
9	黄色い壁	〃	〃	1976
10	オートバイ	山本文彦	〃	1971
12	星の園にて	〃	〃	1977
13	木精の地(1)	〃	〃	1979

### 3. 植木茂の彫刻

1985(昭和60)年5月14日～7月7日

#### 趣 旨

今日でこそ大きな流れとなっている抽象彫刻だが、まとまった運動として我が国に根づいたのは、ようやく戦後になってからである。一方、絵画の分野では、自由美術家協会が結成された昭和12年ごろから抽象絵画がまとまった運動として現われる。

植木茂(1913～84)は、その自由美術協会の第1回展から彫刻家として出品し、抽象彫刻ではパイオニア的な作家のひとりである。その後、昭和18年に応召して、制作は中断するが、戦後、創作活動が再開したのは山口県においてだった。山口県では、彼は深川町(現、長門市)と下関市で過ごしたが、この間、昭和25年にモダン美術家協会を結成したり、また地元では下関美術家協会を興すなどさかんに活動している。昭和26年に大阪に移ってから旺盛な創作活動をつづけ、トルソと名づけられた木彫を中心に、欧米の抽象彫刻とはひと味ちがった日本的感性にうらうちされた有機的な抽象作品を制作した。また彫刻以外でもパウハウスの研究を通じてデザインの仕事をてがけるなど幅ひろい活躍をみせた。没後、遺族から寄贈された作品を展示し、その制作のあとをたどった。

#### 出品作品

番号	作 品	作 者	素 材	制作年
1	トルソ	植木 茂	タモ	1947
2	(作品)	〃	木	1940年代
3	ボッカ	〃	チーク	1943
4	トルソ	〃	シオジ	1947
5	体	〃	チーク	1978
6	トルソ	〃	ケヤキ	1947
7	トルソ	〃	ケヤキ	1947
8	トルソ	〃	ケヤキ	1979年より前
9	仏陀	〃	シオジ	1947

番号	作品	作者	素材	制作年
10	体	植木 茂	ケヤキ	1978
11	(作品)	〃	木	
12	(作品)	〃	木	
13	(作品)	〃	シオジ	
14	トルソ	〃	シオジ	1952
15	トルソ	〃	ケヤキ	1981
16	トルソ	〃	シオジ	1952
17	トルソ	〃	ケヤキ	1981
18	トルソ	〃	ケヤキ	1983
19	トルソ	〃	ケヤキ	1980
20	トルソ	〃	ケヤキ	1981
21	連	〃	ケヤキ	1971
22	トルソ 3	〃	ケヤキ	1980
23	体	〃	ケヤキ	1976
24	トルソ	〃	ケヤキ	1979年より前
25	トルソ	〃	ケヤキ	1981
26	(作品)	〃	シオジ	
27	トルソ	〃	ケヤキ	1979年より前
27	漂船	〃	チーク	1975
28	(作品)	〃	鉄	
29	トルソ	〃	ブロンズ	1968
30	鳥	〃	ケヤキ	1949
31	トルソ	〃	ケヤキ	
32	トルソ	〃	ケヤキ	
33	トルソ	〃	ケヤキ	
34	トルソ	〃	ケヤキ	
35	トルソ(人によせてA)	〃	木	1959
36	トルソ	〃	木	
37	トルソ	〃	木	

#### 4. 雲谷派展Ⅱ

1985(昭和60)年10月8日～12月22日

##### 趣 旨

雲谷派は、毛利家の御用絵師として幕末まで存続した流派である。「雲谷」という名称は、画僧雪舟の旧居雲谷庵に由来する。毛利輝元は、家臣である原治兵衛の雪舟の「山水長巻」を模写させたが、その出来があまりにみごとであったので、雲谷庵と長巻を彼にゆだね、姓を雲谷、名を雪舟等楊の1字をとって等顔とかえさせ、雪舟画系の継承者とした。以来雲谷家は、次代の等益をはじめとして有力画人を多数輩出したが、その地盤がおおむね周防・長門を中心としたいわば地方画派的存在であったため、等益以後の画人たちは、やがて忘れ去られ、歴史の中に埋没してしまった。

山口県下には幸い雲谷派の遺品が多数現存しており、その中には中央画壇にひけをとらぬのもけっして少なくない。シリーズで第2回めにあたる本展では等顔の画系をついだ等益、等与らの作品を始祖等顔の作品とともに紹介した。

## 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	所蔵
1	群馬図屏風	雲谷等顔	紙本淡彩・6曲1双	館蔵
2	楼閣山水図屏風	雲谷等益	紙本墨画淡彩金砂子・6曲1双	館蔵
3	草山水図屏風	雲谷等与	紙本墨画・6曲1双	館蔵
4	琴棋書画図屏風	雲谷等的	紙本淡彩・6曲1双	当館寄託
5	四季耕作図屏風	雲谷等爾	〃・6曲1双	山口市歴史民俗資料館蔵

## 5. 桂ゆき展

1985(昭和60)年10月8日～12月22日

### 趣旨

桂 ゆき(1913～)は、戦前・戦後を通じてそのユニークな活動ぶりでよく知られている。彼女は、モノの存在感や見えかたを早くから絵画的なテーマに据えてきた。とはいってもそれは少しも堅苦しいものではない。彼女の目に映じた、あるいは感じたものをそのまま日常の素材(縄、布、紙、野菜など)を利用して表現するといった制作ぶりで、それがあるときは社会風刺的な作品となり、またあるときはわれわれの認識の構図にふかく問いかけてくる作品ともなっている。しかし、桂ゆきの絵画世界は、この種の作品にありがちな凝装された深刻さや生真面目さとは無縁である。それは、彼女独特の茶化しやくすぐりの、いつてしまえば上質の遊びの精神で一貫していることからくるものだろう。初期の作品から近作まで13点を紹介した。

## 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	帰り道	桂 ゆき	油彩・キャンバス	1934
2	笑う人	〃	〃	1968
3	作品	〃	〃	1949
4	アダムとイヴ	〃	〃	1968
5	作品	〃	〃	1968
6	赤と白の対話	〃	油彩・板	
7	虎の威を借りた狐	〃	油彩・キャンバス	1955
8	つぶされた	〃	油彩・紙・板	1973
9	異邦人	〃	油彩・紙・キャンバス	1961
10	作品(コラージュ)	〃	コラージュ・板	1979
11	TWOFORMS	〃	油彩・キャンバス	1961
12	ラストスパート	〃	油彩・紙・板	1964
13	欲張り婆さん	〃	〃	1966

## 6. 山口の近代日本画

1986(昭和61)年2月25日～4月13日

## 趣 旨

近代日本画黎明期の中心的存在であった狩野芳崖や、明治初期における京都画壇の旗頭であった森寛斎からはじまり、文展・帝展を舞台に当時の画壇をリードした高島北海、さらに昭和期にはいつて官展を中心に松林桂月や中倉玉翠・伊藤響浦・檜崎鉄香・兼重暗香らが活躍した。さらに京都画壇でおもに花鳥図を描き注目された福田翠光、戦後になると画面構成や表現技法に工夫を凝らした藤田隆治・澤野文臣・西野新川・小野具定らがいる。それらの作家を一堂に会し、山口県出身作家による日本画近代化のながれを展望した。

## 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	呂洞賓鉄拐図	狩野芳崖	紙本墨画淡彩・軸	
2	松林瀑布山水図	森 寛斎	絹本墨画彩色・軸	
3	雪景山水図	高島北海	〃	1916
4	日本亞伯山溪図	〃	〃	1916
5	群仙図	金子鷗雨	紙本墨画彩色・軸	
6	蓬萊瑞色図	田中伯陰	絹本彩色・軸	1921
7	愛吾廬図	松林桂月	〃	1936
8	雁来紅朝顔図	松林雪貞	〃	
9	若鷹図	福田翠光	〃	1944
10	梅にかささぎ図	兼重暗香	〃	1930
11	海老と魚	藤田隆治	紙本彩色・額	
12	芭蕉の雨	中野弘彦	〃	1977

## 7. 山口の近代洋画

1986(昭和61)年2月25日～4月13日

## 趣 旨

具象から抽象まできわめて幅広い領域で多面的な展開をみせてきた山口県の洋画史の流れを戦後洋画を中心に紹介した。

## 出品作品

番号	作 品	作 者	材質・形状	制作年
1	パーミヤン回想	入江一子	油彩・キャンバス	1977
2	薄雪	尾崎正章	〃	1977
3	赤と白の対話	桂 ゆき	油彩・板	
4	おどけ役者	桑重儀一	油彩・キャンバス	1933
5	壁に倚れる女	永地秀太	〃	
6	残された壁〈女と男〉C	中本達也	油彩・紙・板	1967
7	マドモワゼル S	錦義一郎	油彩・キャンバス	
8	明王	松田正平	〃	1977
9	黄色い壁	宮崎 進	〃	1976
10	木精の地(Ⅰ)	山本文彦	〃	1979
11	A STREET SCENE NO.7	吉村芳生	紙・コンテ・額	1978
12	作品1	殿敷 侃	新聞紙・シルクスクリーン・額	1981

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
13	作品2	殿敷 侃	新聞紙・シルクスクリーン・額	1981
14	84-163	服部碩夫	油彩・キャンパス	1984

## 8. 植木茂と現代彫刻

1986(昭和61)年6月27日～8月31日

### 出品作品

番号	作品	作者	素材	制作年
1	トルソ	植木 茂	タモ	1947
2	(作品)	〃	木	1940年代
3	ボッカ	〃	チーク	1943
4	トルソ	〃	シオジ	1947
5	体	〃	チーク	1978
6	トルソ	〃	ケヤキ	1947
7	トルソ	〃	ケヤキ	1947
8	トルソ	〃	ケヤキ	1979年以前
9	仏陀	〃	シオジ	1947
10	体	〃	ケヤキ	1978
11	(作品)	〃	木	
12	(作品)	〃	木	
13	(作品)	〃	シオジ	
14	トルソ	〃	シオジ	1952
15	兎小屋の主人	〃	ケヤキ	1979年以前
16	トルソ	〃	ケヤキ	1981
17	トルソ	〃	ケヤキ	1983
18	トルソ	〃	ケヤキ	1980
19	トルソ	〃	ケヤキ	1981
20	連	〃	ケヤキ	1971
21	トルソ 3	〃	ケヤキ	1980
22	体	〃	ケヤキ	1976
23	トルソ	〃	ケヤキ	1979年以前
24	トルソ	〃	ケヤキ	1981
25	トルソ	〃	ケヤキ	1979年以前
26	漂船	〃	チーク	1975
27	(作品)	〃	鉄	
28	(作品)	〃	鉄	1970年代
29	トルソ	〃	ブロンズ	1968
30	鳥	〃	ケヤキ	1949
31	トルソ	〃	ケヤキ	
32	トルソ	〃	ケヤキ	
33	トルソ	〃	ケヤキ	
34	トルソ	〃	ケヤキ	
35	(作品)	〃	シオジ	
36	マスク	澄川喜一	木	1977

番号	作品	作者	素材	制作年
37	そりのあるかたち 9-27	澄川喜一	木	1979
38	とりとそぎ	〃	木	1980
39	そりのあるかたち	〃	木	1980
40	おうぎ	〃	木	1981
41	カミガミトモガミ	最上寿之	木	1979
42	漂流	豊福知徳	木	1958

## 9. 戦後の日本画

1986(昭和61)年11月20日～1987(昭和62)年2月1日

### 趣 旨

近代以降、日本が経験した変革期が大雑把にいうと2つあったとすれば、1つは明治期であり、もう1つは今次世界大戦においてだった。端的にいうと、この2つの変革期を通してその底にあったのは、同時代の表現として日本画で表現しうるリアリズムとは何であり、それはどうすれば獲得できるのかという命題だったといっている。そしてそのうちの前者、つまり第1の変革期を担った主要な系譜がつぎのような線に求められることはよく知られている。つまり、フェノロサ、岡倉天心らの理論的指導者とその精神に共鳴をしめした狩野芳崖、橋本雅邦、横山大観らの制作活動にはじまり、かれらの理念に依拠して創設された日本美術院にいたる線がそれで、この系譜において近代日本画のもっともラジカルな実験がこころみられたとみることは異論なく認められているところである。

だとすれば、第2の変革期、つまり今大戦後にこれとよく似た活動を担った典型像はどこに求められるだろうか。あるいは、それはすでに制度化され既成画壇化した美術団体から飛びだし、それまでの表現のワク組みを1歩も2歩もこえようとした個性的な作家やそうした作家同士によって結成された前衛的なグループのなかに求められるかもしれない。そうしたエネルギーにみちた作品などをふくめて現代日本画が生まれてくる過程の一端を紹介した。

### 出品作品

番号	作品	作者	材質・形状	制作年
1	三眠	藤田隆治	紙本彩色・額	1963
2	鳥と魚	〃	絹本彩色・額	
3	懐壁	西野新川	紙本彩色・額	1962
4	湖底の村	〃	〃	1974
5	漁港	小野具定	〃	1965
6	裏日本	〃	〃	1972
7	凍れるシベリアにて	岩崎巴人	〃	1964
8	荒れる海	〃	紙本彩色・ガラス粉・額	1967
9	三人	長崎莫人	〃	1956
10	たそがれの畑	〃	〃	1957
11	蚊帳	小野具定	紙本彩色・額	1949
12	働く人	朝倉 撰	〃	1952
13	日本 1958- 2	〃	紙本彩色・屏風 6 曲 1 双	1958
14	淀の河州	沢野文臣	紙本彩色・額	1956
15	水芭蕉曼陀羅・黄14	佐藤多持	紙本墨彩色・屏風 4 曲 1 双	1968
16	動的な群像	藤田隆治	キャンバス彩色	1964
17	鷲のいる風景	〃	紙本彩色・屏風 2 曲 1 双	

## 10. 現代の陶芸

1987(昭和62)年1月20日～4月19日

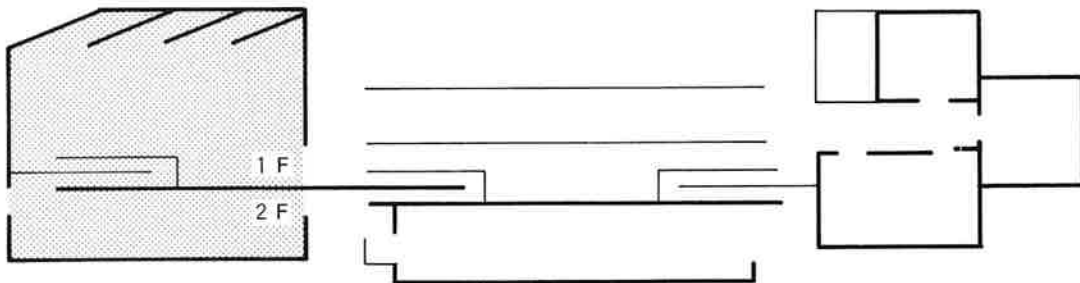
### 出品作品

番号	作品	作者	制作年
1	モナリザ	佐藤 敏	1976
2	陶酔記	〃	1984
3	陶による石の群	杉浦康益	1984
4	伝道の書Ⅱ —白熱の中の崩壊—	西村陽平	1975
5	ペンチを侵蝕するアルミ	〃	1980
6	カップを破壊する石	〃	1982
7	独逸浪漫主義 —アツシジに寄せて—	〃	1982
8	独逸浪漫主義Ⅱ	〃	1982
9	燃えない木	〃	1984
10	プレート	P. ボーコス	1982
11	スタック	〃	1982
12	アイスバスケット	〃	1982
13	砂の聖書	荒木高子	1980
14	LOVE	三輪龍作	1969
15	女	〃	1976
16	花Ⅰ	〃	1977
17	花Ⅱ	〃	1977
18	予感	〃	1977
19	流砂の人	〃	1979
20	LOVE(ハイヒール)	〃	1980
21	鉢「早春」	〃	1981
22	鉢「雷童」	〃	1981
23	花器	〃	1982
24	起土—魚形の仮説—	伊藤公象	1982
25	証言	鯉江良二	1973
26	スパーク・スパーク・ アーム	〃	1982
27	赤ちゃんの帽子	里中英人	1973
28	表層・深層	星野 暁	1982
29	Appearance・Substance	〃	1982
30	ニュースペーパー '82	三島喜美代	1982
31	コピー '82	〃	1982
32	世紀末の風景 1 - 3	中村康平	1983
33	DANGO	金子 潤	1984



### (3)共催展など

いわゆる共催展は、新聞社などの企画による巡回展が主なものである。原則として年2回程度開催する。展示場は、企画展示室ⅠおよびⅡを使用する。



※ 凡例 共催展記録は、名称・趣旨・展観  
カタログの順で編集されている。

# ピカソ展

——長女マヤ・ピカソの秘蔵コレクション——

1985(昭60)年5月3日～6月9日

月曜日休館

主催 TYSテレビ山口・毎日新聞社・山口県立美術館

後援 外務省・文化庁・フランス大使館

協力 エール・フランス

会場 企画展示室I・II

## 趣旨

ピカソが生涯のなかで制作した作品の数は、陶器の絵付けなども含めると8万余点。そのうち半分にあたる4万点が、ピカソの没後、この巨匠の身边に遺産としてのこされたという(1973年没)。

その継承権をもった人物が6人いた。筆頭者が、マリーナ・ピカソ。ディアギレフ・ロシヤ・バレエ団のバレリーナだった当時、ピカソと結ばれた最初の妻、オルガ・コクローヴァ(1965年没)との間に生まれたパウロ・ピカソの長女であり、ピカソにとっては孫にあたる。ついで、のこる5人のなかにマヤ・ルイス・ピカソ、今回その一部が紹介されるマヤ・コレクションの所蔵家となる女性がいた。マヤは、ピカソとマリー・テレーズ・ヴァルターとの間に1935年に生。ピカソにとってオルガとの嫡子パウロについて血をわけた2番めの子であり、最初の女兒だった。このとき、ピカソ54歳、マリーは25歳。母親マリー・テレーズ・ヴァルターは、17歳の少女のころ当時40代半ばだったピカソと知りあい、その後、ピカソの芸術と生涯にふかく関わりをもつ幾人かの女性のひとりとなった。幾人かの女性とは、フェルディナンド・オルピエ、マルセル・アンペール(エヴァ)、オルガ・コクローヴァ、ドラ・マール、フランソワーズ・ジロー、ジャクリーヌ・ロックといった人びとだが、なかでもマリーは、結婚こそはしなかったが、これらの女性とくらべるとピカソともっとも長い時間をともに過ごした。そしてピカソが逝った年から4年おくれて1977年、67歳で世を去っている。ピカソの死後できたマヤ・コレクションは、この年あらたに加えられた母マリーの遺産によってさらに充実したに違いない。この母子2代にわたるマヤ・コレクションから油彩、素描など89点で構成されたのが、このたびのピカソ展である。マヤのピカソ・コレクションの公開では我が国では2度めだが、紹介された作品はすべて未公開の作品からなっていた。ピカソの初期から晩年にいたる画業の軌跡の一端が展望できるとともに、マリー、マヤ母子とピカソとの愛情の交歓をほうふつさせるような私的生活をうかがわせる作品なども含まれ、ピカソの代表作からなるオーソドックスな回顧展とはまた別の趣をもつ興味をひく展覧会だった。

## カタログ

監修 瀬木慎一

内容

あいさつ 主催者

メッセージ マヤ・ルイス・ピカソ

ピカソ・愛と芸術のドラマ 瀬木慎一

カラー図版

カタログ

年譜



# ルーベンス展——巨匠とその周辺——

1985(昭60)年10月2日～11月4日

月曜日休館

主催 K R Y山口放送・読売新聞西部本社・山口県立美術館

後援 外務省・文化庁・ベルギー大使館・山口県・山口県教育委員会

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

## 趣 旨

17世紀バロック絵画を代表する巨匠、ペーテル・パウル・ルーベンス(1577～1640)の大規模な回顧展は、日本のみならず、地元ヨーロッパでも実現しがたい困難な展覧である。というのは、ルーベンスに帰属するとされる作品の数は少なくないにもかかわらず、その代表作は各地の美術館や教会の主要コレクションとして移動が困難であり、またその大きさも巨大なため、物理的にも動かしがたいからである。バロック絵画は、色彩表現の豊かさもさることながら、壮さ、力動感あふれる構成という意味において、このスケールの要素は欠かせないものである。したがって、肖像画や油彩下描きなどでは、ルーベンスの卓越した構想力や技術力の片鱗を伺うことはできても、最もバロックらしい壮麗さはほとんど理解しがたいといわざるをえない。とはいえ、これまでに日本ではまとまった紹介も少ない現状では、ルーベンス自身の手になる油彩画を中心とした本展が開催されることは意義深いといえる。

たとえばその人体表現は、堅牢な下地の上に薄い色を何度も塗り重ねて輝くばかりの表情をもち、豊かなヴォリュームと柔らかさと温もりを伝えるとともに、さまざまな姿態によってみごとな運動感を表わしている。また、背景となる自然や動植物、構造物などに向けられた冷静な視線は、それらを包み込む空気をもとらえて豊かな情感を誘い込みながら、凡俗な写実を超えて精神的な高みにまで向かおうとする。もつれあう人体や豊かな色彩は、時には私たちにとって過剰なほどにも映るが、その執拗なエネルギーにこそ、画家の人間に対する愛情や生命讃歌を読みとることができるであろうし、そこにバロックという時代の精神が感じられるかも知れない。

ほぼ同時代のオランダのレンブラントが、新興市民階級を主なパトロンとして、より現実的な主題を展開したのとは対照的に、あくまでも宮廷画家としての制約を受けながら、宗教画、神話画、歴史画などの壮大な主題を独自の工房をフルに活用し、自国にとどまらない活動を展開したことは大いに注目される場所である。それは、単に彼の作品が当時から高い評価を受けていたことを示すばかりではなく、一人の人間としてのルーベンスが、時代を象徴する人物であったことをも示すものと考えられるからである。

## カタログ

年譜

参考文献(邦文・欧文)

主要展覧会

監修 中山公男

編集 ルーベンス展カタログ編集委員会

編集委員 中山公男 陰里鐵郎 高橋裕子

内容

あいさつ



ルーベンス 激情の絵筆 デイディエ・ボダール  
ルーベンス理解ということ 中山公男  
ルーベンスの絵画の制作と享受 高橋裕子  
図版(油彩・素描・版画)  
カタログ・年譜・参考文献

## 帖佐美行展

1985(昭60)年12月6日～12月22日

月曜日休館

主催 K R Y山口放送・読売新聞社

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

### 趣 旨

帖佐美行は大正4年鹿児島に生まれ、はじめ小林照雲に師事していたが、昭和15年から海野清に師事して金工を学んだ。昭和17年に文展に初入選以来、戦後も一貫して日展において地歩をかためた。

昭和30年代に入って、当時の新しい動きに呼応するように、器物中心の金工からふみだした帖佐は、建築装飾としてのレリーフパネルの制作をはじめた。それまでの一品工芸品的感覚と、近代的表現の融和をねらった作品は注目をうけ、工芸界に強い印象をあたえた。

パネルの大作をつぎつぎに制作していた帖佐も、昭和50年代に入ると転機をむかえ、ふたたび器物の制作に入る。新工芸結成後はその傾向をつよめ、「自然を愛し崇拜する気持」を底に、花鳥動物モチーフを独自の手法で器物に調和させた作品をつくる。これらのなかでは、東大寺に奉獻された「白鳳凰」「青龍」が代表作といえよう。この作風は、やわらかさをまじつつ円熟味を加えており、戦後の金工のひとつの帰結を示しつつある。

本展は、古稀をむかえた作家の初期から現在までの代表的作品90点で構成されており、帖佐工芸の展開をうかがうことのできるものとなっている。

### カタログ

編集 読売新聞社

内容

ごあいさつ

帖佐美行展によせて 河北倫明

帖佐工芸の理念と面目 植村鷹千代

図版

出品目録

帖佐美行アルバムより

帖佐美行年譜／作品歴

レリーフ制作ノートより



## ユトリロ展 没後30年記念

1986(昭61)年2月27日～3月30日

月曜日休館

主催 K R Y山口放送・読売新聞西部本社・山口県立美術館

後援 外務省・文化庁・フランス大使館・山口県・山口県教育委員会

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

### 趣旨

エコール・ド・パリの画家のひとりに数えられるモーリス・ユトリロ(1883～1955)は、モンマルトル界隈の街並みを中心に诗情あふれるパリ風景を描き続けた画家として有名であり、日本人にはとくに親しい存在ともなっている。それは、画面に塗り込められた憂愁感が私たちの感性によく響くからだと考えられるが、ユトリロ自身の生立ちの悲劇性——父親の顔も知らず、気性の激しいシュザンヌ・ヴァラドンと甘やかす祖母との間で育ち、8歳の頃からアルコールへ逃避したため、20歳前頃には発作性の酒乱に陥っていたという——は、同情を拒絶する深い絶望の淵を自らの周辺に巡らせているので、作品の親しみやすさとは裏腹に、そこには曲折したものがあるといわざるをえない。

たとえば前半期の作品にはほとんど人影が現われないし、それが現実の風景だとしても、描かれたのが昼なのか夕暮れなのか不明である。つまり、観る人はどこかで出会ったような気がする無時間的な街角の前に佇まされ、意識的に仕組まれた遠近法のなかをさまよわされるばかりである。その理由は、彼がアルコール依存症から立ち直るために絵筆を執るようになった素人絵描きであり、アカデミックな技術をもたなかったためでもあろうし、また、ウジェーヌ・アジェらによる観光絵葉書きを下敷としていたためともいえるが、なによりもユトリロ自身が、現実と乖離した自らの精神不安を無意識的にも選り好みしていたからではないだろうか。

いわゆる白の時代というのは、1909年から1914年ごろまでをさす。塗り重ねた色彩が白を基調にまとめられ、建築物の構築的な面の連続によって遠近感が強調され、背後には薄曇りの空が広がるといった作品が多い。ほぼ80年を経た今日でも、ユトリロの絵にあるような雰囲気やモンマルトル周辺は感じさせもするが、その時代にその地に生活しながら、なお郷愁にも似た距離感をユトリロが抱いていたとすれば、そのことを理解することは決して容易ではないだろう。とはいえ、また同時に人間ユトリロとは切り離して、こうした叙情性を絵画の問題としてどううけとめるべきなのかは、改めて考えてみなければならない重要な点なのである。

### カタログ

#### 内容

あいさつ

メッセージ ジャン・ファブリス(ユトリロ相続人)  
ジルベール・ペロル(フランス大使)

序文 ルネ・ユイグ

モンマルトルの申し子モーリス・ユトリロ 匠 秀夫

ユトリロ—その生涯と作品— ジャン・ファブリス

図版

カタログ



年譜

オマージュ

参考文献(邦文・欧文)

展覧会歴

## 大黄河文明の流れ 山東省文物展

1986(昭61)年4月26日～6月15日

月曜日休館

主催 山口県・西武美術館・朝日新聞社・KRY山口放送

後援 外務省・文化庁・中国大使館・朝日イブニングニュース社・国鉄九州総局・広島鉄道管理局・米子鉄道管理局

### (1)趣旨

山東省は、中国東部に位置し、「中華民族のゆりかご」とよばれる黄河がその流れを渤海にそそぐ河口をもつ。黄河文明は世界四大文明のひとつにも数えられ、仰韶、龍山文化は古くからよく知られていた。しかし、近年の考古学の成果はさらに各地にそれぞれ性格を異にする独自の連続性をもつ文化を確認しつつある。山東省においても、今から約7000年前といわれる北辛文化や、それにつづく、大汶口文化、さらには山東龍山文化と、その文化の展開が明らかにされつつある。

本展は、山口県と友好省県の関係にあるこの山東省の全面的協力のもとに、山東省博物館をはじめとする省内諸施設の協力をえて、国の一級文物に指定されている作品をはじめ、各時代の貴重な文物を一堂にあつめ、黄河下流域の文物によって、その文明の諸相をうかがおうとしたものである。時代が6000年の長きにわたるため、以下の4部にわけて構成した。

#### 第1部 黄河と農耕文明

——新石器時代——

#### 第2部 齊・魯の国と青銅器

——商時代から戦国時代——

#### 第3部 画像石と蓬萊の国

——秦・漢帝国——

#### 第4部 中国芸術の開花

——三国時代から明時代——

第1部は土器・石器が中心で、約7000年前でありながら、すでにかかなりの完成度を見せている北辛文化の土器、文字の原初的な例ともいわれる記号をともなった大汶口文化の土器、卵殻黒陶に代表される龍山文化の土器などの優品とともに、農耕文化を象徴する石器などが出品された。

第2部は青銅器の時代で、齊・魯両国の故城からの発掘品が中心となった。鬼面の銅鉞や、戦国の銅鏡、犧尊など見どころの多い遺物がそろった。

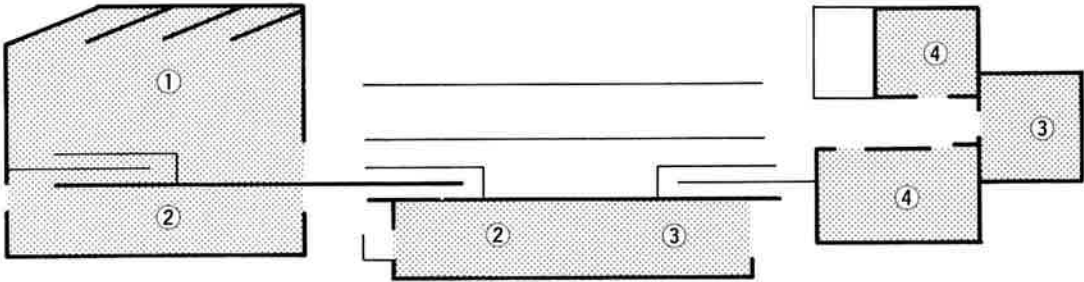
第3部は秦・漢時代の山東省の出土遺物で、負壺陶鳩や、金縷玉衣、鍍金銅編鐘など、国外初公開

の貴重な遺品が出品された。

第4部は多彩な中国芸術の一端の紹介という展示になった。主なものは仏像と陶磁器で、仏像は北魏から唐までの各時代の様式を、陶磁器は山東省内で発見または、生産された代表的な陶磁器をそろえた。展覧会の最後は明時代初期の魯王墓からの出土品で、これも国外初公開である。

この展覧会は、山口県で公開されたあと、東京、大阪と巡回して展示された。

## (2)会場構成



- ①第1部 黄河と農耕文明 ②第2部 齊・魯の国と青銅器 ③第3部 画像石と蓬萊の国  
④第4部 中国芸術の開花

## (3)カタログ

総監修 岡崎敬(九州大学教授)

監修 近藤喬一(山口大学教授)

特別協力 関野雄(東京大学名誉教授)

編集 山口県・朝日新聞社・西武美術館

内容

ごあいさつ 平井龍(山口県知事)

ごあいさつ 西武美術館・朝日新聞社・K R Y山口放送

ごあいさつ 李昌安(山東省省長)

祝辞 岡崎敬(九州大学教授)

山東省の概略

出品物出土地点分布図 山東省

山東省の歴史と考古学の成果 蔣英炬(山東省石刻芸術博物館長)

黄河文明のあけぼの 近藤喬一(山口大学教授)

図版

作品解説 吳文祺(山東省文物考古研究所第2室主任)

張從軍(山東省石刻芸術博物館業務室主任)

山東省の主な博物館

山東遊歩



中国歴史年表

用語解説

記号銘文集 拓本制作山東省

出品目録・図版索引

挿図一覧

英文リスト

(中国語翻訳 竹下弘美)

● A 4 版 186ページ・アート紙110kg 4色オフセット186ページ

#### (4)出品目録

番号	名称	数量	寸法(cm)	出土年	出土地	所蔵
北辛文化						
1	黄褐陶鼎	1	高さ37.5 口径23.5	1979	滕県北辛	滕県博物館
2	灰黒陶釜	1	高さ28.4 口径34.2	1979	滕県北辛	滕県博物館
3	紅陶鉢	1	高さ7.1 口径20.1	1979	滕県北辛	滕県博物館
4	磨白(下石)	1	長さ67 幅32	1964	滕県北辛	滕県博物館
	磨白(上石)	1	長さ37	1964	滕県北辛	滕県博物館
大汶口文化						
5	彩陶鉢形鼎	1	高さ30 口径25	1971	鄒県野店	山東省博物館
6	彩陶豆	1	高さ29.5 口径26	1974	泰安市大汶口	山東省文物考古研究所
7	灰陶多孔器台	1	高さ39 底径29.2	1971	鄒県野店	山東省博物館
8	灰陶觚形杯	1	高さ28 口径14.5	1978	兗州県王因	兗州県図書館
9	紅陶鼎	1	高さ28.3 口径17	1959	泰安市大汶口	山東省博物館
10	紅陶袋型足器	1	高さ25.8	1957	安丘県景芝鎮	山東省博物館
11	白陶双鬚鬲	1	高さ34	1977	莒県陵陽河	莒県博物館
12	白陶双層口鬲	1	高さ37.2	1977	臨沂市大範辺莊	臨沂市博物館
13	紅陶獸形壺	1	高さ21.6 長さ22.4	1959	泰安市大汶口	山東省博物館
14	灰陶壺	1	高さ26.8 胴径20.8	1959	泰安市大汶口	山東省博物館
15	灰陶盃	1	高さ17.5	1975	茌平県尚莊	山東省文物考古研究所
16	灰陶尊	1	高さ57.5 口径29.5	1961	莒県陵陽河	莒県博物館
17	石鏃	1	長さ22 刃幅18	1961	滕県崗上村	山東省博物館
18	双孔石鏃	1	長さ15	1959	泰安市大汶口	山東省博物館
19	穿孔玉斧	1	長さ13.7 刃幅7.6		章丘県董東	済南市博物館
20	玉首飾	11		1971	鄒県野店	山東省博物館
21	骨筒	1	高さ7.7	1959	泰安市大汶口	山東省博物館
龍山文化						
22	灰陶鳥頭形足鼎	1	高さ22.4 口径34	1977	諸城県呈子	諸城県博物館
23	灰陶甌	1	高さ32 口径19	1977	諸城県呈子	諸城県博物館
24	紅陶高流鬲	1	高さ39.7	1960	濰坊市姚官莊	山東省博物館
25	橙黄陶鬲	1	高さ29.2	1960	濰坊市姚官莊	山東省博物館
26	白陶封口流鬲	1	高さ31	1964	濰坊市姚官莊	山東省博物館
27	黒陶壺	1	高さ30.5 口径11		寿光県火山埠	寿光県文化館
28	黒陶四耳壺	1	高さ15.5 口径7.2	1977	諸城県呈子	諸城県博物館
29	黒陶竹節盆	1	高さ16 口径24	1957	安丘県峒峪	山東省博物館
30	黒陶高台豆	1	高さ19.2 盤口径39.2	1960	濰坊市姚官莊	山東省博物館
31	黒陶單把杯	1	高さ10.7 胴径9	1977	臨沂市大範莊	臨沂市博物館
32	卵殻黒陶杯	1	高さ22.5 口径8.8	1973	臨沂市大範莊	臨沂市博物館
33	卵殻黒陶蓋付杯	1	高さ19.5		臨沂市湖台	臨沂市博物館
34	卵殻黒陶高柄杯	1	高さ22.6 口径9	1975	日照県東海峪	山東省文物考古研究所



番号	名称	数量	寸法(cm)	出土年	出土地	所蔵
35	双孔石包丁	1	長さ12.7 幅5.8	1960	濰坊市姚官莊	山東省博物館
36	卜骨	1	長さ33.5 幅15	1975	茌平県尚莊	山東省文物考古研究所
南・周						
37	銅方鼎	1	高さ23.2 口辺16.1×13.8	1957	長清県小屯	山東省博物館
38	銅貫耳卣	1	高さ23.7 胴径26.1	1957	長清県小屯	山東省博物館
39	銅甌	1	高さ48 口径30.5	1963	蒼山県東高堯	臨沂市博物館
40	銅鉞	1	長さ32.7 肩幅23.3 刃幅34.5	1966	益都県蘇埠屯	山東省博物館
41	銅鳥形足鼎	1	高さ20.5 口径18.5	1982	滕県莊里西	滕県博物館
42	銅方座簋	1	高さ22.5 座高9 口径20.5 辺長18.5~19	1982	滕県莊里西	滕県博物館
43	銅夔文壺	1	高さ26.3 口径16.3		黄県収集	煙台市博物館
44	銅四耳壺	1	高さ38 口径10.2	1978	曲阜県魯国故城	曲阜県文物管理委員会
45	銅盤	1	高さ10.3 口径38.6	1978	曲阜県魯国故城	曲阜県文物管理委員会
春秋						
46	銅獸文簋	1	高さ17.5 辺長31.6×22	1963	肥城県小王莊	山東省博物館
47	銅魚龍文盤	1	高さ15.1 口径33.8	1963	肥城県小王莊	山東省博物館
48	銅匜	1	高さ21.5 長さ42	1981	臨朐県泉頭	臨朐県文化館
49	銅豆	1	高さ26.3 盤口径27.6	1969	曲阜県魯国故城	山東省博物館
50	銅	1	高さ40.7 口径16.8	1963	莒県天井汪	山東省博物館
51	銅鑑	1	高さ53.5 銅径58	1925	沂水県	山東省博物館
52	銅獸耳壺	1	通高47 口径16.5	1977	沂水県劉家店子	山東省文物考古研究所
53	銅盆	1	通高27 器体の高さ17.5 口径22.3	1977	沂水県劉家店子	山東省文物考古研究所
54	銅編鐘	9	通高13.6~26.9 口長径8~16.2 鼓間6.1~12	1975	莒南県大店	山東省文物考古研究所
55	銅矛	1	長さ30.2 幅5.6	1981	臨沂市鳳凰嶺	山東省文物考古研究所
56	銅鷹首壺	1	通高55 胴径28.7	1970	諸城県臧家莊	諸城県博物館
戦国						
57	真鍮象嵌銅豆	1	通高27.5 盤口径18.5	1975	長清県崗辛	山東省博物館
58	金銀象嵌銅犧尊	1	高さ29.4 身長43.8		臨淄区商王村	臨淄文物保管所
59	金銀象嵌銅鏡	1	径29.8 厚さ0.7	1963	臨淄区商王村	山東省博物館
60	金銀象嵌銅杖首	1	高さ20.5 幅22	1978	曲阜県魯国故城	曲阜県文物管理委員会
61	銀猿形帯鉤	1	長さ16.7 幅6.8	1978	曲阜県魯国故城	曲阜県文物管理委員会
62	青玉璧	1	外径31 内径10.8 厚さ0.8	1978	曲阜県魯国故城	曲阜県文物管理委員会
63	玉佩	11		1978	曲阜県魯国故城	曲阜県文物管理委員会
64	齊刀陶范	1	残長26.6 幅13 厚さ3.1		臨淄区齊国故城	山東省博物館
65	齊刀	4	長さ18.2 18.2 18.7 18.4 幅2.8 2.9 2.9 2.9		臨淄区齊国故城	山東省博物館
秦・漢						
66	陶量	1	高さ10.3 口径20.4		鄒県紀王城	山東省博物館
67	漆衣陶鼎	1	高さ20 胴径22.7	1973	臨沂市銀雀山	山東省博物館
68	漆衣陶壺	1	高さ30.6 胴径21.3	1973	臨沂市銀雀山	山東省博物館
69	漆衣陶盒	1	高さ18.7 口径21	1973	臨沂市銀雀山	山東省博物館
70	負壺陶鳩	1	通高51 幅43.5 前後の長さ38	1969	済南市無影山	済南市博物館
71	銅車馬器	5	金象嵌銅馬面 鍍金銅獸頭車飾 鍍金銅轅 金銀象嵌銅衡箒 鍍金銅蓋弓帽	1970 1970 1970 1970 1970	曲阜県九龍山 曲阜県九龍山 曲阜県九龍山 曲阜県九龍山 曲阜県九龍山	山東省文物考古研究所 山東省博物館 山東省博物館 山東省文物考古研究所 山東省博物館
72	鍍金銅編鐘	9	通高6.4~10.4 口長径4.4~6.6 鼓間3.3~6.1	1983	臨淄区稷山	臨淄区文物保管所
73	銅戈	1	高さ14 長さ22.5 高さ11.9 径3.6	1978	臨淄区窩托	淄博市博物館
	金鐘	1		1978	臨淄区窩托	淄博市博物館

番号	名称	数量	寸法(cm)	出土年	出土地	所蔵
74	銀盤	1	高さ5.5 口径37	1978	臨淄区窩托	淄博市博物館
75	銀盒	1	高さ11 口径11.4	1978	臨淄区窩托	淄博市博物館
76	金頭衣	1	高さ27 幅21.8	1978	臨沂市洪家店	臨沂市博物館
	金足衣	2	高さ12.3 長さ28	1978	臨沂市洪家店	臨沂市博物館
	金手衣	2	長さ14.5 幅12.2	1978	臨沂市洪家店	臨沂市博物館
77	鉄犁范	2	高さ25.5 幅28.2	1972	萊蕪市元省荘	山東省博物館
78	孫子竹簡	1	長さ20.6 幅0.5	1972	臨沂市銀雀山	山東省博物館
79	緑釉厨俑	1	高さ29.8 幅16.6		高唐県東壩河	山東省博物館
80	緑釉井戸	1	高さ41.2 胴径41.2 底径16.2		高唐県東壩河	山東省博物館
81	銅鎮墓獸	1	高さ30 長さ61.6 幅18.4	1967	諸城県前凉台	諸城県博物館
82	永初六年銘鉄刀	1	長さ111.5 幅3 刀背の厚さ1	1974	蒼山県下荘	蒼山県図書館
83	西王母百戯図画像石	1	縦82.5 横83.5 厚さ20	1958	滕県西戸口	山東省博物館
84	鋪首街環図画像石	1	縦100 横105 厚さ8.5		滕県龍陽店	山東省博物館
南北朝・隋・唐						
85	普泰二年銘銅弥勒像	1	高さ23 幅9.5	1983	博興県崇徳村	博興県図書館
86	河清三年銘銅弥勒像	1	高さ28 幅26	1983	博興県崇徳村	博興県図書館
87	天保九年銘石仏像	1	高さ12 幅56	1982	無棣県于何庵	惠民地区文物管理所
88	青磁蓮華文四耳尊	1	高さ59 口径13.1 胴径29.4	1982	淄川区和荘	淄博市博物館
89	銅菩薩像	1	高さ64		濰坊市収集	山東省博物館
90	石侍衛俑	1	通高97 座幅23.5 厚さ14.7	1976	嘉祥県英山	嘉祥県文物管理所
91	備騎図壁画	1	縦65 横70	1976	嘉祥県英山	山東省博物館
92	青磁双耳瓶	1	高さ35.2 口径8.9 胴径21.5		曲阜県	山東省博物館
93	三彩双魚瓶	1	高さ24.5 口径4.1		益都県	山東省博物館
94	顕慶五年銘石阿弥陀像	1	高さ52 幅32.9	1979	茌平県広平収集	聊城地区博物館
95	石騎馬女俑	2	高さ32.2, 35.2		済南市収集	山東省博物館
宋・元・明						
96	黒釉双耳罐	1	高さ21.8 口径16.5		茌平県収集	茌平県図書館
97	青花雲龍文罐	1	高さ33 口径13.3 胴径24	1967	鄒県九龍山	鄒県文物管理所
98	傘をもつ俑	2	通高61.8 俑の高さ27.3	1971	鄒県九龍山	山東省博物館
	木馬をひく俑	1	高さ29	1971	鄒県九龍山	山東省博物館
	木馬俑	1	高さ32 長さ31	1971	鄒県九龍山	山東省博物館
	俑踏台をかつぐ俑	1	高さ27	1971	鄒県九龍山	山東省博物館
	侍衛俑	1	高さ27.3	1971	鄒県九龍山	山東省博物館
99	玉硯	1	辺長16.2 幅9.5	1971	鄒県九龍山	山東省博物館
100	魯王木宝	1	高さ7.5 辺長10.5	1971	鄒県九龍山	山東省博物館
付属展示品						
1	大汶口35号墓(模型)	1				
2	蘇埠屯1号商王墓(模型)	1	高さ57.5 長さ202 幅131.5			
3	銅鉞(複製品)	1	長さ31.8 肩幅30.7 刃幅35.8			
4	楽舞雜技俑(複製品)	1	通高21.7 盤の長さ67.5 盤の幅48			
5	銅鏡(複製品)	1	縦115.1 横57.7 厚さ1.2			
6	『孫臏兵法』竹簡(複製品)	12	長さ5.2~27.5 幅0.5			
7	沂南画像石墓(模型)	1	高さ45.4 長さ102.5 幅123.5			
8	沂南画像石(拓本)	2	縦48×横236, 縦48×横190			
9	宋山小祠堂画像石(拓本)	6	残高162, 面幅189 深さ68			
10	銭選『白蓮図巻』(複製品)	1	縦42×横90.3			

## (5)展評など

新聞（報道記事をのぞく）

エッセイ

山東省文物展に見る日本文化の源流 朝日新聞（西部）/源弘道60・5・31

シリーズ

山東省とわたし 朝日新聞（西部）

黄河文明の足跡1～6 朝日新聞（西部）

山東省歴史の旅1～4 朝日新聞（西部）

山東省文物展1～30 山口新聞

「大黄河文明の流れ」をみて 朝日新聞（西部）

## フランス美術の黄金時代展

——ロココから印象派まで——

1986(昭61)年11月29日～12月21日

月曜日休館

主催 TYSテレビ山口・毎日新聞社・山口県立美術館

後援 外務省・文化庁・フランス大使館・フランス芸術活動協会

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

### 趣 旨

フランス美術が、ローマやオランダからの影響を脱して独自の絵画伝統をきづきはじめるのは、ロココの時代、すなわち18世紀にいたってからである。それはルイ15世（1715～74）の宮廷美術からはじまった。ルイ15世治下のフランスは、宗教戦争を背景に展開した17世紀バロックの壮重、禁欲的なテーマに代わって、軽快、官能的なモチーフを好んでとりあげ、そのスタイルも、極端な遠近法、大胆な短縮法などを駆使して天上と地上との宗教的・精神的宇宙論をダイナミックな構図でうたいあげたバロック時代とちがって、あくまで現世的なものにこだわり、それを節度を失しない無理のない、いわゆる洗練したスタイルで表現した。

しかし、やがて広域的に古典古代への関心が時代の流行になると、あたらしい傾向のスタイルがめばえる。ロココの過剰な装飾性は一掃され、人体の彫塑的な描写、絵画構成の単純化、古代演劇をほうふつさせる厳格な構図のなかでのドラマティックな群像表現などが主流を占めるようになった。フランスではダヴィッドがそのスタイルを完成した。新古典主義とよばれるこのスタイルは、フランス革命が王政を廃し市民出身のナポレオンが皇帝となり、ダヴィッドがその首席画家にとりあげられることで、公のスタイルとなり、第1共和制、帝政、その後につづく王政復古の時代を通じて時代様式の主流を占めた。しかし、新古典主義のスタイルは人間の内面的な感情をすらきびしい構図のもとに抑制して描く傾向がつよく、そうした厳格な構図におさめきれない近代的自我意識は別の表現スタイルの絵を創造した。ジェリコーからドラクロアへとつながっていくロマン主義の絵画がそれで、かれらの開拓したスタイルは、本来、動的なものは動的なまま、激情的なものは激情的なままに表現するという意味で、それらを厳格な形態、構図におさめて一旦儀式的なものに還元してしまう新古典主義の

スタイルとまっこうから対立するものだった。が、しかし、リアリズム絵画の概念にさまざまなアプローチの仕方があることをしめし、実際、そのためにさまざまなころみをなし、その進展が格段にすみやかだった時間の総体を近代絵画とよぶならば、その第一歩はロマン主義においてはじまったとすることができるのではないだろうか。

その延長上にクールベの自然主義、カラー、ミレーなどに代表されるバルビゾン派がつづく。クールベは、スタイルとしては本質的にはなんら新しさをつけ加えなかったものの、本来、テーマやモチーフの価値を決定するのは画家自身であるとして、貴族社会から革命期をへて市民社会に伝えられてきた社会的通念化した絵画主題のヒエラルキーを否定した。そのヒエラルキーをいかにも権威あるかのように墨守する新興階級であるブルジョアジーの無知と俗物性（スノビズム）を痛罵したのである。その精神はバルビゾン派の画家たちにも共有され、かたくなに閉ざされていたテーマ領域ははだいに広がりを見せるようになる。こうしたさまざまな問題意識からさまざまな流れが合流したとき、テーマにおいてスタイルにおいて絵画の革命、印象主義が成立したのである。

今回の展覧会は、そうした18世紀から19世紀にかけてのフランス絵画史の大まかな展開の軌跡を、ルーブルはじめカーン（カーン市）、ファーブル（モンペリエ市）などフランス各地の計11の美術館から出品された77点の油彩作品でたどれるよう構成された。比較的に見る機会のすくないロココの宮廷美術や新古典主義の萌芽のころの作品なども注目されたが、時代の変遷とともに変化していく絵画スタイルを迫る楽しさとともに、ダヴッドとグロ、ゲランとドラクロア、トマ・クチュールとマネといった師弟関係のあった画家たちが、そうした師弟関係にもかかわらず最終的には師とはまったく違ったスタイルを生みだしながら時代をつくっていった様子がうかがわれるなど、フランス絵画史のさまざまな側面をかいまみせる興味ぶかい展観だった。

## カタログ

あいさつ 主催者

メッセージ 駐日フランス大使ジルベール・ペロル

「フランス絵画への1視点—ロココから印象派までを辿って」

山梨俊夫

カラー図版

カタログ

美術館紹介 カーン美術館・ディジョン美術館

グルノーブル美術館・ファーブル美術館

オルレアン美術館・ナント美術館

レンヌ美術館・ルーアン美術館

トゥール美術館・トロア美術館

略年表(1700年—1900年)



## 徳川美術館の名宝

1987(昭62)年1月6日～2月8日

月曜日休館

主催 徳川美術館・山口県立美術館・テレビ山口・毎日新聞社

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ

## 趣 旨

室町以後、安土・桃山の混乱の時代を経て元和元（1615）年の大坂夏の陣を最後に大きな戦乱があとを絶って、天下泰平の世となる。いわゆる元和偃武が徳川家康によって唱えられ、これから以後約250年にわたる徳川幕府の治世がはじまるわけである。

近世における大名の地位も、領地領民の完全な統制を基礎として作りあげられた幕藩体制の中に組みこまれ、種々の拘束制限を受けたのであった。しかしこうした諸外国にはほとんど例をみない強固で集権的、封建的な支配組織が比較的早くから確立されたことが、そののち長く幕藩体制を存続させる上で重要な理由となった。

尾張徳川家は、そうした近世大名の中にあってもきわめて特殊な存在であった。尾張徳川藩は、家康の第9男であった初代義直が慶長12年4月に、8歳にして尾張に封ぜられたのにはじまり、のち美濃と信濃の一部を加封されて慶長末年には総石高61万9千5百石といわれ、その当主は従二位権大納言を極位極官とする家格とされた。つまり將軍家と密接な関係にあるこの尾張家と、さらに紀伊家および水戸家を加えたいわゆる「徳川御三家」は、家康自身によって徳川幕府の制度としてとくに設けられた家であるがゆえ、他の近世大名とは別格のきわめて上位に扱われていたのであった。

こうした近世諸大名の中にあっても、御三家筆頭という特殊な性格を維持しつづけた尾張徳川家の宝物は、徳川家康よりの拝領品をはじめ、武具類、飾り道具、能道具といった武器や公式行事の飾りに用いた、いわゆる表道具とよばれるもの、さらには調度類、衣服類、絵画書蹟など、私的趣味性の高い、いわゆる裏道具ともよばれるものなど、多岐にわたり、その内容も大名道具としての品格と生活意識を強く反映させている。

今回の展覧会では、特別出品として『源氏物語絵巻「橋姫」(国宝)』をはじめとし、『風俗図屏風(相応寺屏風)』、『葵紋散槍梅文辻が花染小袖』、『白天目茶碗』、『初音蒔絵婚礼調度』(いずれも重要文化財)などを中心に、約130点余りの美術作品が展示された。

## カタログ

編集 徳川美術館

内容

ごあいさつ

徳川美術館紹介 徳川義宣(徳川美術館長)

図版・解説

武将の権威、武家の備え、武士の象徴、

体制の確立、書院のもてなし、大名の財宝、

武家の式楽、武家の茶の湯、藩主の修養、

大名の美意識、くらしの調度、婦人のたしなみ

尾張徳川家歴代





---

# 事業

---

## Ⅱ. 普及活動

## (1)山口県美術展覧会

### 第39回山口県美術展覧会

会期 1985(昭和60)年9月6日～23日(9月9日、17日は休館)

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ、常設展示室Ⅱ

#### ○運営委員

美術作家

田口克己 田中米吉

三輪龍作 広実泉城

下瀬信雄 富永恒光

学識経験者

杉本春生 山本二郎 斉藤武男

県教育委員会

吉武康昌

#### ○審査員

三木多聞 乾 由明 中原佑介 鈴木健二

山内 観 山岸亨子 田中江舟 服部碩夫

#### ○平面部門受賞者

〈最優秀賞〉

路地 福田博文

〈優秀賞〉

HANIWA-Visualize(6) 足立勝身 密会 福田之広

A.NUMERAL.1～0(RE D) 殿敷 侃 青松 時重文生

SCENE-85-8 吉村芳生

〈奨励賞〉

白華 上村倅子 子供獅子 光石 勝

ボディ、スペシャルNo. 1 古田真理子 しら雲の 岡崎文子

越える 藤津八重子

〈佳作賞〉

工場風景(Ⅱ) 三上研治 ふたご兄弟 岡本国治

蝶(その2) 酒井 治 虹のある風景 古林喜明

因子創生(社会Ⅰ) 山本昭博 春 村中 寛

不確定な形・A 岡田博幸 雨情 岩本 進

鼓動(旅の夢No. 1) 金井健一 試練の朝 高橋孝治

夏に, Ⅰ 小田善郎 若山牧水の歌 向井田貞子

シリーズ《斜角のけしき》より  
——色彩宇宙—— 小林功於 張祐之詩 坂本美恵

座 石丸康生 文鼎山水之一節 井上功一



牛	吉川幸昭	ミラボオ橋	松永圭子
鳥の大合唱	松本政子	李白詩	竹重秀治
走	山田詳生		

○立体部門受賞者

〈最優秀賞〉

萩深鉢 大和信昭

〈優秀賞〉

萩銅彩大鉢 止原伸郎 Building III 大井秀規

〈奨励賞〉

回池硯 日枝敏夫 粉華金彩角器 加藤重美

〈佳作賞〉

萩茶碗 玉村好松 添革流文花器 中山和代

白釉窯変壺 岡田 裕 灰被陶筥 新庄貞嗣

鉄絵野葡萄文壺 大井正則 拳骨 小川幸造

萩窯変刻線文壺 大野孝晴

○実 績

部 門	分 野	出品点数	入選点数	入賞点数	展示合計	展示率%
平 面	日 本 画	74	11	2	13	18%
	工 芸	15	1	2	3	20%
	デザイン	21	5	1	6	29%
	洋 画	232	35	12	47	20%
	写 真	168	27	8	35	21%
	書	156	23	7	30	19%
	(計)	666	102	32	134	20%
立 体	彫 刻	10	2	2	4	40%
	工 芸	128	19	10	29	23%
	デザイン	0	0	0	0	0%
	(計)	138	21	12	33	24%
	総 計	804 (794)	123 (146)	(44) 43	167 (189)	21% (24%)

( )は59年度

## 第40回山口県美術展覧会

会期 1986(昭和61)年9月11日～28日(9月16日、22日は休館)

会場 山口県立美術館

### ○運営委員

美術作家

下瀬信雄 田口克己  
田中米吉 富永恒光  
広実泉城 大和保男

学識経験者

斉藤武男 杉本春生 山本二郎  
県教育委員会  
東 章

### ○審査員

今井凌雪 中原佑介 服部碩夫 本間正義  
三木多聞 三輪龍作 山内 観 山岸享子

### ○平面部門受賞者

〈最優秀賞〉

彼の地 吉村芳生

〈優秀賞〉

待ちくたびれた(Ⅰ)	河村純一郎	漁師たち	福田博文
火口にて(Ⅱ)	小田善郎	寒山詩二首	明石坤生
二面石	保手浜孝		

〈奨励賞〉

RED LIGHT GIRL	古田真理子	光景	中道元治
BATH ROOM [雲]	久間啓子	路陽	水津昭登
去りゆく時……その似	尾瀉正美	やまたかみ	貴松幸枝

〈佳作賞〉

遠い夏の日	河村忠昭	雪の日	兵藤治雄
洗うⅢ	井上恵美子	ミコシ	光石 勝
虚Ⅱ	有田敏朗	思い出の夏	神本尚明
菊ヶ浜の夕虹	村田 隆	阿蘇の黎明	伊藤耐子
「ぬけがら」	福田之広	おかえりなさい	中島篤巳
FRIENDS	長瀬篤孝	王維詩	佐貫陸子
子供〔Ⅰ〕	山本哲生	唐詩	山本政子
因子創生(親子)	山本昭博	僧懷濬詩	大島房子
越える	藤津八重子	おもはぬに	小島 清

HANIWA-VISUALIZE (86C)  
足立勝身

○立体部門受賞者

〈最優秀賞〉

古代幻想(1) 金子信彦

〈優秀賞〉

無題 田辺 武 陶管 加藤重美

〈奨励賞〉

Pype Man 兼原啓二 黒釉焰飾花器No. 1 上原伸郎

〈佳作賞〉

Building VIII 大井秀規 風字様硯 日枝敏夫

炭化窯変五角壺(連山夕映え) 井戸茶碗 大和吉孝

松村拓夫

六面广口花器 近藤 守 フォンタナ萩風 清水啓功

○実績

部門	分野	出品点数	入選点数	入賞点数	展示合計	展示率%
平面	日本画	61	11	1	12	20%
	工芸	13	3	1	4	31%
	デザイン	20	6	1	7	35%
	洋画	275	34	14	48	17%
	写真	198	31	8	39	20%
	書	163	25	6	31	19%
	(計)	730	110	31	141	19%
立体	彫刻	14	3	2	5	36%
	工芸	140	26	9	35	25%
	デザイン	3	1	0	1	33%
	(計)	157	30	11	41	26%
総計		887 (804)	140 (123)	42 (44)	182 (167)	21% (21%)

## (2)現代美術展

### 山口の現代美術Ⅲ

1985(昭60)年6月14日～7月7日

月曜日休館

主催 山口県立美術館

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ



#### (1)趣 旨

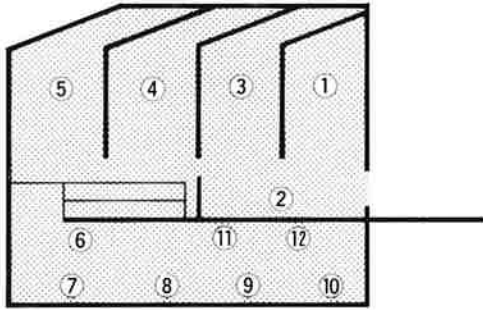
作家も、そして発表の場も限られる山口県において、現代美術を活性化させる目的で企画された本シリーズの3回目。今回は県関係作家5人と、東京で先鋭的な活動を展開している一グループとのジョイント展として構成された。

多様化の一途をたどるといわれる現代美術だが、確かにさまざまな素材や技法の組み合わせとしては多様化傾向をみせるものの、表現の本質的な問題は、おそらく60年代以降足踏みしているのではないだろうか。というのは、戦後の抽象表現主義—アンフォルメルなどの50年代を経て、60年代のポップ・アート他のさまざまなアートの出現は、たとえばコンセプチュアル・アートのように、芸術の制度に批判を加えることによって展開してきたため、制度自体が柔軟になってしまうと当初の緊張感はほとんど無意味になってしまう一面があり、その後はめくるめくスタイルの変貌にも似て、美術は焦点を失ってしまったかに思われるからである。問題はいつもまわる。何が表現(=芸術)なのか、と。それが何によっても可能であることはアルテ・ポーヴェラによって宣言されているので、私たちはそれ以来常に<sup>ゼロ</sup>0状態におかれているとあっていいし、「これは何だろう」といった素朴な疑問からスタートすることを強いられてもいる。

ところで、いわゆるインスタレーション(設置)という考え方が広まってきたのは、平面にしる立体にしる、作品そのものの中に意味を閉じこめるのではなく、現実<sup>ゼロ</sup>に提出された素材がどのような関係を示唆するかという、いわばその全体性に注意が向けられるようになったからであろう。もともと作品は、それを含む空間と特殊な関係を結んでいた。展示空間が問題とされるのはその意味であるが、もっと積極的に場にかかわって作品を構成し、その内部を身体ごと通過させて深い感覚を喚起しようとするのがこれである。

このように、既成の平面や立体の枠はとりはられ、さまざまな表現が試みられる状況は続いているとはいえ、私たちがおかれた<sup>ゼロ</sup>0状態を揺さぶるエネルギーが、私たちの周辺から沸きおこってくる<sup>ゼロ</sup>ことが期待される。

## (2)会場構成



①蔵重範子 ②柳井嗣雄 ③河村正之 ④荒瀬景敏 ⑤砥上賢治 ⑥吉川陽一郎  
⑦松浦寿夫 ⑧菊池敏直 ⑨岡崎乾二郎 ⑩佐川晃司 ⑪伊藤 誠 ⑫高木 修

## (3)カタログ

責任編集 高田美規雄

内容

図版

作家略歴

作家のことば

ごあいさつ

エッセイ 高田美規雄

迂回のパッサージュ 松浦寿夫

出品目録

●大スキラ版60ページ ●ニューエイジ90kg

表紙デザイン 磯部司



## (4)出品作品

作者	作品	制作年	技法	寸法
荒瀬景敏	Principles often clash with interests	1982	アクリル・カラー, キャンバス, パネル	160.5×140.5×4枚
〃	Cutback series 1	1984	アクリル・カラー, キャンバス, パネル	221.0×160.5
〃	Cutback series 7	1984	アクリル・カラー, キャンバス, パネル	200.8×131.0
〃	Cutback series 2	1984	アクリル・カラー, キャンバス, パネル	221.0×140.5
〃	Cutback series モグワイ	1985	アクリル・カラー, キャンバス, パネル	203.5×160.5
河村正之	彼の岸へ	1984	樹脂テンペラ, 油彩, キャンバス, 額	162.0×130.5×6枚
〃	暗夜の虹	1984	樹脂テンペラ, 油彩, キャンバス, 額	130.3×162.0
〃	砦	1985	樹脂テンペラ, 油彩, キャンバス, 額	161.8×259.0

作者	作品	制作年	技法	寸法
河村正之	水の無い谷間	1983	(各)樹脂テンペラ, 油彩, キャンバス, 額	116.5×90.9 130.5×80.2 130.3×162.0 60.7×91.0 65.5×91.0 145.5×97.3 65.0×53.3 80.3×65.5
	ゆらぎ飛行	1984	樹脂テンペラ, 油彩, キャンバス, 額	162.0×227.5
蔵重範子	Dream of Water People	1985	木, 布, 樹脂, その他	1100×780× <sup>H</sup> 400
砥上賢治	天然と人工	1985	ビデオ, インスタレーション	1000×780× <sup>H</sup> 400
〃	ドローイング	1985		88.0×62.0
〃	ドローイング	1985		88.0×62.0
柳井嗣雄	作品No. 0528	1985	樹脂, 砂, キャンバス, 額	72.3×123.0
〃	作品No. 0602	1985	樹脂, 砂, キャンバス, 額	91.8×182.8
〃	作品No. 0604	1985	樹脂, 砂, キャンバス, 紙, 額	91.6×182.7
〃	作品No. 0603	1985	樹脂, 砂, キャンバス, 額	95.8×195.3
〃	作品No. 0526	1985	樹脂, 砂, キャンバス, 額	91.5×182.7
〃	作品No. 0601	1985	樹脂, 砂, キャンバス, 額	91.5×182.5
〃	作品No. 0605	1985	樹脂, 砂, キャンバス, 額	72.5×103.0
〃	作品No. 0521	1985	樹脂, 砂, ベニア, 額	83.8×91.5
伊藤 誠	無題	1983	鉄	25×206×19
〃	無題	1983	鉄	86×106×30
〃	無題	1984	鉄	65×57×42
〃	ドローイング	1985	木炭, 紙	51.0×71.5
岡崎乾二郎	石灰 Lime	1985	ポリプロピレン	90×130×240
〃	あまめま	1985	ポリスチレン, アクリル, プラスチック	25×21×18
〃	やほ	1985	ポリスチレン, アクリル, プラスチック	28×18×18
〃	711・6692	1982	ポリスチレン, アクリル, プラスチック	36×28×26
菊池敏直	Pulse Series V	1985	クレヨン, アクリル組具, 綿布, パネル	120.0×112.0×3枚
佐川晃司	ドローイング	1985	パステル, 鉛筆, 紙	53.0×77.0
〃	ドローイング	1985	パステル, 木炭, 紙	47.5×63.5
〃	無題	1982	油彩, キャンバス, パネル	130.5×191.5
〃	ドローイング	1983	パステル, 鉛筆, 紙	56.0×75.5
〃	無題	1985	油彩, キャンバス, パネル	26.0×36.5
〃	ドローイング	1985	木炭, 紙	88.5×65.0
〃	ドローイング	1983	鉛筆, 紙	54.5×79.5
〃	無題	1984	油彩, キャンバス	146.0×130.8
高木 修	Untitled	1985	鉄, 大理石	350×190× <sup>D</sup> 30
松浦寿夫	庭園論	1985	アクリル, キャンバス	180.5×216.0
〃	庭園論	1985	アクリル, キャンバス	180.5×260.0
吉川陽一郎	無題	1984	鉄	220×180× <sup>H</sup> 243
〃	無題	1983~85	鉄	175×60× <sup>H</sup> 102

## (5)展評など

若手を中心に自由な表現で 朝日新聞(西部)/ (源) 60・6・19  
地域純血主義捨てて 毎日新聞(西部)/ (三田) 60・6・20

「山口の現代美術」を見て 中國新聞/（寺本）60・7・2

その他

きょうまで「山口の現代美術Ⅲ」 読売新聞（県内）/（小林）60・7・7

山口の現代美術Ⅲ展によせて 朝日新聞（県内）/（高田）60・6・16、6・23

かお 砥上賢治さん 中國新聞（県内）/60・6・15

## 現代の陶芸Ⅲ

——いま、やきもの色に心ときめくか——

1987(昭62)年2月28日～3月22日

月曜日休館

主催 山口県立美術館

会場 企画展示室Ⅰ・Ⅱ



### (1)趣旨

本展も、今回で3回目をむかえた。第1回目を行った1982年からの時間的経過の大きさを思わないわけにはいかない。第1回の「いま、土と火でなにが可能か」は、美術館側に明確なテーマがあったわけではなかったが、展覧会としては、陶芸のインスタレーション化がつよく現われたものとなった。

第2回目の「いま、大きなやきものになにが見えるか」では、形式化をつよめつつあるかに見える、いわゆるオブジェの再検討をねらい、構築性をスケールの拡大の中で見ようとした。この会場では、各作家たちの計算された構築力と、千葉盲学校の生徒たちの自由さがきわだった対比を見せた。

この2回をふまえて、今回は「色彩の問題」をテーマとした。参加作家は4名であるが、ⅠとⅡの両展の傾向が現われた。

井上雅之の作品は、金網による形からできている。その金網に、土のかわりとして耐火物をぬりつけ、そこに低火度釉で文様をほどこしパーナーで焼いている。ここ数年来、井上は陶土や陶石を用いて、ロクロによって器状のものをつくり、それを分解し、再構成するという作品をつくっている。今回の作品も、形態的な面などから見れば、その延長上にあるともいえるが、制作法、材料などがちがうため、実際の印象は大きく異なる。陶や磁による作品が、かなり大きな作品であっても、一種の求心性、独立性を主張するのに対して、金網の形と耐火物による質感は、それ自体、虚と実との皮膚の間といった様相を見せ、独特の存在感をただよわせた。インスタレーションには、こちらの方法がむ

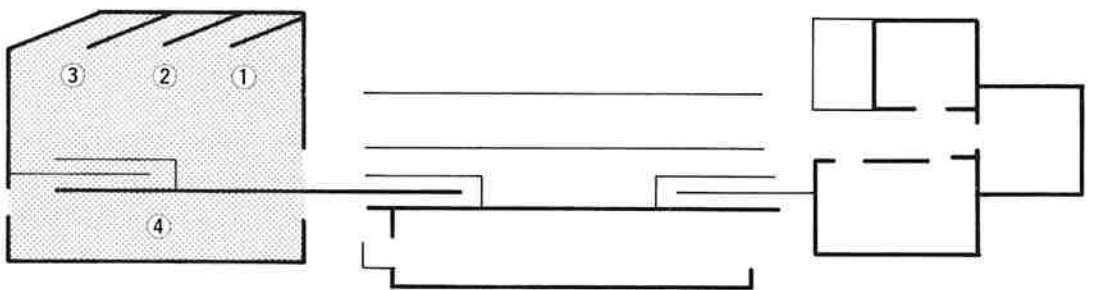
いているというべきであろう。

金子潤の作品は「ダンゴ」である。アメリカ、ネブラスカ州のオマハの煉瓦工場の巨大な窯で、1983～84年になされた仕事の中のひとつである。高さ1.8メートル、周囲6メートル、重さ約4～5トンというスケールは、やきものにすこしでも興味をお持ちのかたは、ぜひ作品の直前で実感していただきたいと思う（展覧会後も館藏品としてロビーに展示中）。絵画をまなぶつもりが、クレイワークにふみこみ、アメリカという土地で自己を見つめていったなかから成立したものとして見たい。機知と手わざ、思いつきと過飾などとは無縁のオブジェ作品である。その意味であえてモニュメンタルなっておきたい。

佐々木成の作品は8点である。さまざまな材料から、その表面の質感を石膏で型取りし、そこに泥漿を流しこんで、部品をつくり、それを構成して作品をつくっている。石膏型に、さきに、顔料で絵付けをしておけば、それは直接部品に付着し、絵付けされるわけで、単純といえば、きわめて単純な技法である部品をつくるわけだから、その組合せでなにをつくってもよいわけだが、作家は建築物をつくっている。仮りの現実感のきわめてうすい建築物は、だまし絵的な手法によって、平面的につくられている。遠近法の厳格な適用によって、平面的なものを、一見するとたいへん立体的なものに見せながら、そのことがまた、この世ならぬという感をつよめており、作家の計算はどこまでも緻密で、いきとどいている。

土門邦勝の仕事は「粉体シリーズ」の延長上にあるが、作品3点の配置方法やうち1点を会場で制作するという面など、会場を自己の手の内にいれてしまうという構成力を見せた。「垂直から水平」というタイトルにしめすように、素材を上から降らすという手法によって、横への広がりも獲得し、手わざ的な人為性から遠いがゆえに、一種のスケールを感じさせている。白、青、茶、という系統のちがう色彩の積層、微妙な色の変化を見せる粉体の広がり、すっきりとねらいどおりのインсталレーションになったといえよう。

## (2)会場構成



①土門邦勝「垂直から水平」 ②金子潤「ダンゴ」 ③佐々木成「無題」 ④井上雅之「MUG」



### (3)報告書

責任編集 榎本徹

内容

ごあいさつ

カラー図版

モノクローム図版

メッセージ

展覧会ノート——いま、やきもの色に心ときめくか—— 榎本徹

●A 4版40ページ ●アート110kg/4色オフセット4ページ、

1色オフセット36ページ



### (4)出品目録

作者名	作品名	製作年	寸法 (cm)	所蔵
井上雅之	MUG-1q	1987	240.0×163.0×350.0	
	MUG-2p	1987	265.0×57.0×85.0	
	MUG-3b	1987	87.0×405.0×108.0	
	MUG-4m	1987	177.0×160.0×110.0	
	MUG-5z	1987	87.0×185.0×110.0	
	MUG-6h	1987	257.0×60.0×257.0	
	MUG-7x	1987		
金子 潤	ダンゴ	1983-84	180×200×120	山口県立美術館
佐々木 成	無題	1986	55.0×93.0×7.0	
	無題	1986	78.0×50.0×7.0	
	無題	1987	95.0×45.0×6.0	山口県立美術館
	無題	1987	93.0×61.0×6.0	山口県立美術館
	無題	1987	81.0×65.0×7.0	
	無題	1987	91.0×60.0×7.0	
	無題	1987	76.0×54.0×6.0	山口県立美術館
土門邦勝	垂直から水平-1	1986-87		
	垂直から水平-2	1986-87		山口県立美術館
	垂直から水平-3	1986-87		

### (5)展評など

新聞 (報道記事をのぞく)

展評

「現代の陶芸」前衛作家4作家展 読売新聞 (西部) / (秋) 62・2・25

陶芸変革の一端示す 毎日新聞 (西部) / 三田晴夫62・3・5

「目奪う奇抜さと新鮮さ」朝日新聞 (西部) / (源) 62・3・7

エッセイ

いま、やきもの色に心ときめくか 中国新聞/榎本徹62・3・12

雑誌

地方美術館では何が可能か リネアモード26/奥野憲一62・7・1

### (3)美術講演会および講座

自主企画展、県美展、共催展等の展覧会事業の内容理解と普及をはかるために、下記の講演会および講座を行なった。

#### 美術講演会

日 時 1985(昭60)年7月21日 13時30分～15時  
 場 所 美術館講座室  
 講 師 長谷部楽爾(東京国立博物館学芸部長)  
 演 題 中国陶磁について  
 参集人員 90人

日 時 1987(昭62)年2月28日 13時30分～14時30分  
 場 所 美術館講座室  
 講 師 金子潤(陶芸作家)  
 演 題 オマハ・プロジェクトについて  
 参集人員 75人

#### 美術講座

年月日	60. 9. 8		60. 9. 15		61. 1. 15
講 師	作家(写真) 下瀬信夫	作家(書) 田中江舟	作家(洋画) 服部碩夫	県美展運営委員 杉本春生	美術評論家 針生一郎
演 題	県美展の写真について	県美展の書について	県美展と現代芸術(1)	県美展と現代芸術(2)	日本画の問題点と可能性
参集人員	50人	50人	60人	40人	100人

年月日	61. 9. 14		61. 9. 21		61. 10. 19
講 師	作家(洋画) 服部碩夫	作家(写真) 下瀬信雄	作家(陶芸) 三輪龍作	作家(書) 広実泉城	京都国立博物館文部技官 狩野博幸
演 題	県美展の絵画について	県美展の写真について	県美展の立体について	県美展の書について	近世の絵画一流派の興亡一
参集人員	60人	50人	60人	50人	50人

#### 美術教養講座

年月日	60. 10. 19		60. 12. 14		61. 2. 1	
講 師	当館学芸員 高田美規雄	当館研究員 安井雄一郎	当館学芸員 榎本徹	当館学芸員 米屋優	当館学芸員 山本英男	当館学芸員 菊屋吉生
演 題	バロック絵画とルーベンス	教会美術と寄進者	近代工芸の展開 —職人から作家へ—	現代の金工	近代日本画の流れ	戦後日本画の一断面
参集人員	70人		40人		65人	

年月日	61. 10. 19		61. 12. 6	62. 3. 7	
講師	当館学芸員 菊屋吉生	当館学芸員 山本英男	当館学芸員 安井雄一郎	当館学芸員 高田美規雄	当館学芸員 榎本 徹
演題	江戸初期絵画概観	雲谷派の系譜	フランスの絵画 -ロココから印象派まで-	立体と空間について	いわゆる前衛陶芸 -その発生と展開-
参集人員	30人		60人	30人	

## 実技講座

上級(60年度)

部 門	講 師	期 間	参集人員
洋 画	富 永 恒 光	7月21日(日)~26日(金)	41人
版 画	山 下 哲 郎	8月5日(月)~10日(土)	13人
日 本 画	中 村 脩	8月17日(土)~22日(木)	25人

上級(61年度)

部 門	講 師	期 間	参集人員
洋 画	富 永 恒 光	7月22日(火)~27日(日)	40人
版 画	吉 村 芳 生	8月12日(火)~14日(木)	12人
日 本 画	中 村 脩	8月18日(月)~20日(水)	18人



実技講座風景

#### (4)美術館ニュース「天花（てんげ）」

館活動の状況報告、とくに企画展の案内を中心に、年4回、12ページの構成で発行している。  
1985・86（昭60・61）年度は24号から31号まで発行された。

##### 第24号(60・6・1発行)

館蔵品紹介「トルソ」植木茂 米屋優  
中国陶磁2000年の流れ 榎本徹  
山口の現代美術Ⅲ 高田美規雄  
デッド・エンド 三輪和彦（作家）  
新収蔵品一覧



##### 第25号(60・9・1発行)

館蔵品紹介「星〈有刺鉄線〉夏」香月泰男 高田美規雄  
ルーベンス展—巨匠とその周辺— 高田美規雄  
舌足らずの県美展観 杉本春生（岩国短期大学教授）  
山口美術家伝（14）植木茂 米屋優  
高島北海とアール・ヌーヴォー 安井雄一郎



##### 第26号(60・12・1発行)

館蔵品紹介「変貌する山」岩崎巴人 菊屋吉生  
戦後日本画の一断面—模索と葛藤— 菊屋吉生  
現代美術随想 嶋田日出夫（作家）  
山東省新石器文化の展開—大黄河文明展に寄せて—  
中村徹也（山口県埋蔵文化財センター次長）  
高島北海とアール・ヌーヴォー 安井雄一郎



##### 第27号(61・3・1発行)

館蔵品紹介「菽水指」三輪休雪 河野良輔  
山東省文物展 山東省文物展開催準備室  
山口美術家伝（15）三輪休雪 河野良輔  
高島北海とアール・ヌーヴォー 安井雄一郎



### 第28号(61・6・1発行)

館蔵品紹介「芭蕉の雨」中野弘彦 菊屋吉生

THE NINE デザイン・ナワー9人のクリエイターたち 高田美規雄

俊乗房重源と勸進 米屋優

新収蔵品一覧

香月泰男の二点の「洗馬図」について 安井雄一郎



### 第29号(61・9・1発行)

館蔵品紹介「花鳥図」雲谷等鶴 山本英男

雲谷派の系譜—雪舟の後継者たち— 山本英男

県美展40年の感慨 田口克己(山口短期大学教授)

イタリア美術の戦後史 高田美規雄



### 第30号(61・11・1発行)

館蔵品紹介「漂流」豊福知徳 米屋優

フランス美術の黄金時代展

徳川美術館の名宝展 菊屋吉生

改組後県美展をふりかえる 服部碩夫(山口大学教授)

イタリア美術の戦後史(2) 高田美規雄



### 第31号(62・2・1発行)

館蔵品紹介「陶による石の群」杉浦康益 榎本徹

いま、やきもの色に心ときめくか 榎本徹

キャンセル様 三輪和彦(萩焼作家)

「となりの芝生は青いのだ」

写真の世界からアートを見ると— 下瀬信雄(写真家)

イタリア美術の戦後史(3) 高田美規雄



## (5)移動美術館

館蔵品を県下各地で広く展覧し、美術文化の振興に寄与するという趣旨のもとで移動美術館を開催した。

## 「変容する人物表現」

1985(昭60)年5月22日～26日 由宇町文化会館

同年7月3日～7日 長門市中央公民館

### (1)趣 旨

わが国の近代美術における人物表現の推移の一端を、県立美術館の絵画や彫刻などのコレクションを通して紹介した。

### (2)カタログ

大スキラ版40ページ(表紙とも)ノモノクロ27ページ

### (3)出品作品

番号	作品名	作者	制作年	寸法(cm)	素材・技法
1	男子裸像	永地 秀太	1905	62.5× 45.0	木炭・紙
2	裸 婦	〃	1905	〃	〃
3	少年像	〃	不詳	43.9× 35.5	油彩・キャンバス
4	更紗の前	〃	1924	117.0× 91.0	〃
5	壁に倚れる女	〃	1925	164.0× 82.0	〃
6	婦人の顔	青山 熊治	不詳	35.0× 21.8	〃
7	裸 婦	桑重 儀一	〃	80.5× 53.0	〃
8	女	里見 勝蔵	1931	89.4× 64.0	〃
9	マドモワゼルS	錦 義一郎	不詳	130.0× 66.0	〃
10	草 上	香月 泰男	1950	72.7×116.7	〃
11	トルソ	中野 四郎	1951	67.1(高)	塑像(ブロンズ)
12	休 憩	香月 泰男	1952	72.5×116.5	油彩・キャンバス
13	二 人	〃	1955	72.5×116.5	〃
14	憩える海人	中本 達也	1957	106.5×117.5	〃
15	1945	香月 泰男	1959	72.8×116.7	〃
16	少 女	中本 達也	1960	13.9× 8.9	銅版・紙
17	無題(裸婦抽象)	河内山賢祐	1962	96.8(高)	塑像(ブロンズ)
18	動的な群像	藤田 隆治	1964	162.0×260.4	岩彩・キャンバス
19	餓	香月 泰男	〃	162.7×112.3	油彩・キャンバス
20	古代ローマの二人	中本 達也	〃	78.0× 54.0	墨・紙
21	婦 人 像	小林 和作	1966	72.7× 60.6	油彩・キャンバス
22	残された壁(祭壇)	中本 達也	1967	145.0× 97.0	〃
23	人	〃	〃	32.4× 28.7	〃
24	アダムとイブ	桂 ゆき	1968	130.3× 97.0	油彩・紙・板

番号	作品名	作者	制作年	寸法(cm)	素材・技法
25	笑う人	桂 ゆき	1968	116.8× 91.0	油彩・キャンバス
26	人間の邑	中本 達也	〃	91.0×182.8	石版・紙
27	昼	宮崎 進	1976	145.3× 97.0	油彩・キャンバス
28	黄色い壁	〃	〃	130.2×162.1	〃
29	てんとうむし (こどもの日々シリーズ)	山本 文彦	1976	52.1× 37.1	石版・紙
30	女	三輪 龍作	〃	45.0(高)	陶彫
31	裸 婦	松田 正平	1977	65.4× 91.2	油彩・キャンバス
32	マ ス ク	澄川 喜一	〃	67.5(高)	木彫(ケヤキ)
33	星の園にて	山本 文彦	〃	161.8×162.1	油彩・キャンバス
34	花 I	三輪 龍作	〃	31.0(高)	陶彫
35	木精の地(I)	山本 文彦	1979	163.0×163.0	油彩・キャンバス
36	兎小屋の住人	植木 茂	1979以前	71.0(高)	木彫(ケヤキ)
37	無 題	〃	1970年代	27.0(高)	彫刻(鉄)
38	ふたつのコンポジション	宮崎 進	〃	62.8× 49.0	鉛筆・紙
39	立 つ 女	〃	〃	〃	〃
40	Wind of Gray	濱野 邦昭	1979	45.0(高)	塑像(ブロンズ)

#### (4)参観者内訳

日	場 所	由宇町文化会館
5月22日		3 6 6 (人)
23日		3 3 1
24日		1 6 1
25日		2 2 4
26日		2 3 3
計		1, 3 1 5 (人)

日	場 所	長門市中央公民館
7月3日		4 7 0 (人)
4日		1, 0 0 5
5日		7 0 6
6日		7 2 6
7日		5 0 1
計		3, 4 0 8 (人)

## 「動きとかたち」

1985(昭60)年10月15日～19日 東和町総合センター

同年11月22日～26日 福栄村コミュニティーセンター

### (1)趣 旨

作品の中に描かれる対象のいろいろの変化に富んだ動きやかたちは、作品をいきいきとしたものにする上で重要な働きをしている。この動きとかたちを実際の作品の中にさぐってもらい、作品のなりたちを考えてもらう。

### (2)カタログ

大スキラ版40ページ(表紙とも)ノモノクロ33ページ

### (3)出品作品

番号	作品名	作者	制作年	寸法(cm)	材質
〈人間の動き〉					
1	復員(タラップ)	香月泰男	1967	162.1×111.6	油彩・キャンバス
2	残された壁(女と男)C	中本達也	1967	166.6×181.9	油彩・紙・板
3	明王	松田正平		116.4× 72.8	油彩・キャンバス
4	夜	宮崎 進	1976	45.4× 53.0	油彩・キャンバス
5	星の園にて	山本文彦	1977	161.8×162.1	油彩・キャンバス
6	人間の声 4	中本達也	1972	119.2× 67.9	グワッシュ・紙
7	人びと	〃	1965	72.5× 51.7	水彩・墨・紙
8	西方の女	〃	1968	75.5× 56.1	水彩・コラージュ・紙
9	てんとうむし	山本文彦	1976	52.1× 36.5	石版・紙
10	みず	〃	1976	52.1× 36.5	石版・紙
11	歩む	伊藤 鈞	1962	121.0× 33.5×42.5	F.R.P
12	永遠	中野四郎	1968	35.4× 14.2×21.1	ブロンズ
〈動物の動き〉					
13	寂	福田率光	1969	147.5×137.3	紙本彩色
14	原始太陽	藤田隆治	1960	136.1×120.7	紙本彩色
15	森の声	中本達也	1960	104.5×141.0	油彩・キャンバス
16	萩飛獅子置物	不詳	江戸後期	高. 37.0	陶器
〈自然の動き〉					
17	雨	香月泰男	1968	116.1× 72.9	油彩・キャンバス
18	業火	〃	1970	162.0× 96.0	油彩・キャンバス
19	月夜	松田正平	1956	116.8× 81.0	油彩・キャンバス
20	風景	錦義一郎		73.0× 91.0	油彩・キャンバス
〈くりかえしとリズム〉					
21	格子魚	藤田隆治		90.6× 60.3	紙本彩色
22	道	香月泰男	1973	72.8×116.7	油彩・キャンバス
23	作品	桂 ゆき	1968	89.2×130.2	油彩・紙・板
24	円の響応	田中稔之	1976	182.1×227.2	油彩・キャンバス
25	作品	桂 ゆき	1979	116.5×182.2	コラージュ・板
26	点字A	田中米吉	1965	200.0×300.0	アルミ板・ラッカー
〈かたちのつながり〉					
27	網船	沢野文臣	1957	187.3×127.2	紙本彩色
28	アダムとイブ	桂 ゆき	1968	130.3× 97.0	油彩・紙・板
29	有明海(えご)	三浦俊輔	1977	145.5×112.2	油彩・キャンバス
30	つぶされた	桂 ゆき	1973	131.0× 90.0	油彩・紙・板
31	赤間硯「双体」	堀尾卓司		18.0× 42.0	石
32	赤ちゃんの帽子	里中英人	1973	20個 1組	陶
33	表層・深層	星野 暁	1982	7個 1組	陶
34	そりとそぎ	澄川喜一	1980	166.5× 64.8×35.9	木(ケヤキ)
〈線といきおい〉					
35	廃船	小野具定	1961	151.8×242.5	紙本彩色
36	変貌する山	岩崎巴人	1966	207.5×264.8	紙本彩色



番号	作品名	作者	制作年	寸法(cm)	材質
37	佐渡の海	小林和作		60.6×72.7	油彩・キャンバス
38	動	田中稔之	1958	183.8×251.0	油彩・キャンバス
39	砧風景	松田正平	1958	45.7×60.9	油彩・キャンバス
40	鉢「雷童」	三輪龍作	1981	26.0×21.0×7.0	陶器

(4)参観者内訳

日	場所	東和町総合センター
10月15日		373 (人)
16日		165
17日		274
18日		435
19日		223
計		1,470 (人)

日	場所	福栄村コミュニティーセンター
11月22日		129 (人)
23日		186
24日		265
25日		203
26日		242
計		1,025 (人)



移動美術館会場風景



---

# 事業

---

## Ⅲ. 入館者数一覧

展 覧 会 名	開 催 期 間	個				人			
		大		高		小		中	小 計
		料 金	人 数	料 金	人 数	料 金	人 数		
常 設 展	60. 4. 2~61. 3.30(302)	170	16,229	110	1,222	70	2,323	19,774	
行 動 美 術 展	60. 4. 6~60. 4.14( 8)								
日 本 現 代 工 芸 美 術 展	60. 4.17~60. 4.21( 5)	300	708	100	757	50	38	1,503	
ピ カ ソ 展	60. 5. 3~60. 6. 9( 33)	800	51,323	600	5,313			56,636	
山 口 の 現 代 美 術 Ⅲ	60. 6.14~60. 7. 7( 21)	700	794	500	248	300	24	1,066	
中 国 陶 磁 2000 年 の 流 れ 展	60. 7.13~60. 8.18( 32)	700	4,941	500	314	300	487	5,742	
第 39 回 山 口 県 美 術 展 覧 会	60. 9. 6~60. 9.23( 16)	250	5,208	200	184	150	424	5,816	
山 口 県 学 校 美 術 展 覧 会	60.11.21~60.11.24( 4)								
ル ー ベ ン ス 展	60.10. 2~60.11. 4( 30)	900	34,945	700	4,448	500	5,305	44,698	
中 ・ 四 国 国 立 大 学 美 術 展	60.11.29~60.12. 1( 3)								
帖 佐 美 行 展	60.12. 6~60.12.22( 15)	500	1,328	300	42			1,370	
戦 後 日 本 画 の 一 断 面 展	61. 1. 7~61. 2. 9( 30)	700	2,803	500	159	300	153	3,115	
山 口 大 学 卒 業 制 作 展	61. 2.13~61. 2.16( 4)								
山 口 芸 術 短 期 大 学 卒 業 制 作 展	61. 2.20~61. 2.23( 4)								
ユ ト リ 口 展	61. 2.27~61. 3.30( 28)	900	28,268	700	3,895	500	5,106	37,269	
60 年 度 計			146,547		16,582		13,860	176,989	
常 設 展	61. 4. 1~62. 3.31(242)	170	13,521	110	912	70	1,736	16,169	
大 黄 河 文 明 の 流 れ 山 東 省 文 物 展	61. 4.26~61. 6.15( 45)	800	60,735	500	7,259	300	19,293	87,287	
THE NINE デザイン展	61. 6.27~61. 7.27( 27)	700	1,922	500	779	300	132	2,833	
伝 統 工 芸 新 作 展	61. 8. 2~61. 8.10( 8)	300	872	200	57	100	121	1,050	
美 術 文 化 展	61. 8.16~61. 8.24( 8)	600	773	400	101			874	
第 40 回 山 口 県 美 術 展 覧 会	61. 9.11~61. 9.28( 16)	250	6,521	200	236	150	465	7,222	
雲 谷 派 の 系 譜 展	61.10. 9~61.11.16( 34)	700	4,558	500	443	300	171	5,172	
山 口 県 学 校 美 術 展 覧 会	61.11.21~61.11.24( 4)								
フ ラ ン ス 美 術 の 黄 金 時 代 展	61.11.29~61.12.21( 20)	900	35,161	700	4,747	400	5,167	45,075	
徳 川 美 術 館 の 名 宝 展	62. 1. 6~62. 2. 8( 30)	800	71,507	600	2,838	300	9,832	84,177	
山 口 大 学 卒 業 制 作 展	62. 2.12~62. 2.15( 4)								
山 口 芸 術 短 期 大 学 卒 業 制 作 展	62. 2.19~62. 2.22( 4)								
現 代 の 陶 芸 Ⅲ	62. 2.28~62. 3.22( 20)	700	1,316	500	102	300	45	1,463	
川 原 慶 賀 展	62. 3.28~62. 3.31( 3)					(中) 300	40		
	(62. 5.10)	700	590	500	52	(小) 100	55	737	
61 年 度 計			197,476		17,526		37,057	252,059	

団 体						計				合 計	累 計
大 人		高 大		小 中		小 計	有 料	無 料	招 待		
料 金	人 数	料 金	人 数	料 金	人 数						
140	416	90	83	50	672	1,171	20,945	1,085	0	22,030	22,030
								1,838		1,838	23,868
							1,503	196	669	2,368	26,236
600	888	400	795			1,683	58,319	34,846	11,746	104,911	131,147
600	254	400	27			281	1,347	27	281	1,655	132,802
600	319			200	22	341	6,083	141	904	7,128	139,930
200	240	150	310	100	23	573	6,389	319	696	7,404	147,334
								4,634		4,634	151,968
700	1,777	500	416	300	1,169	3,362	48,060		7,040	55,100	207,068
								629		629	207,697
							1,370	923		2,293	209,990
600	114	400	49			163	3,278	63	757	4,098	214,088
								929		929	215,017
								1,426		1,426	216,443
700	350	500	10	300	575	935	38,204		6,813	45,017	261,460
	4,358		1,690		2,461	8,509	185,498	47,056	28,906	261,460	
140	361	90	64	50	500	925	17,094	579		17,673	17,673
600	9,759	300	9,113	100	19,646	38,518	125,805	10,210	12,806	148,821	166,494
600	55	400	96			151	2,984	203	439	3,626	170,120
200	3	100	17			20	1,070	43	516	1,629	171,749
							874	259	250	1,383	173,132
200	194	150	35			229	7,451	99	929	8,479	181,611
600	530			200	85	615	5,787	244	1,241	7,272	188,883
								5,851		5,851	194,734
700	366	500	242	200	1,199	1,807	46,882	3,183	8,737	58,802	253,536
600	1,648	400	43	200	112	1,803	85,980	6,673	8,033	100,686	354,222
								1,313		1,313	355,535
								1,577		1,577	357,112
600	665					665	2,128	87	459	2,674	359,786
600	107	400	15	200	9	131	868	79	359	1,306	361,092
	13,688		9,625		21,551	44,864	296,923	30,400	33,769	361,092	



---

# 收集資料

---

## I. 館藏品貸出利用狀況

作 品	作 者	期 間	貸 出 先	展覧会名等	備 考
飲中八仙図	小田 海樞	60. 6. 25～60. 9. 11	下関市立美術館	小田海樞・大庭学徳展	
花 卉 図 巻	〃	〃	〃	〃	
繫 馬 図	狩野 芳崖	60. 7. 25～60. 8. 31	下関市立美術館	郷土の絵馬展	寄託品
漂流'58	豊福 知徳	60. 8. 26～60. 10. 20	三重県立美術館	橋本平八と円空 —木彫・鉦彫の系譜—	
萩編笠水指	三輪 休和	60. 9. 18～60. 11. 6	石川県立美術館	人間国宝 匠のわざ —重要無形文化財の人々—	
萩筆洗切茶碗	〃	〃	〃	〃	
萩耳付水指	三輪 休雪	〃	〃	〃	
萩 茶 碗	〃	〃	〃	〃	
鴨 図	高橋 由一	60. 10. 1～61. 1. 31	東京国立近代美術館	写実の系譜 —洋風表現の導入—	
復員(クラブ) —35°	香月 泰男	60. 10. 1～60. 12. 16	東京都美術館	現代美術の四十年	
月 夜	松田 正平	60. 10. 1～60. 10. 17	宇部市教育委員会	松田正平展	
高津風景	〃	〃	〃	〃	
裸 婦	〃	〃	〃	〃	
高 萩 風 景	〃	〃	〃	〃	
上高地風景 3	小林 和作	60. 10. 7～60. 12. 6	尾道市立美術館	小林和作の精華	
エクス風景 2	〃	〃	〃	〃	
春 の 山	〃	〃	〃	〃	
山 湖	〃	〃	〃	〃	
海	〃	〃	〃	〃	
海	〃	〃	〃	〃	
婦 人 像	〃	〃	〃	〃	
春 の 海	〃	〃	〃	〃	
海	〃	〃	〃	〃	寄託品
水溜りと海	〃	〃	〃	〃	寄託品
石 と 壺	香月 泰男	61. 2. 4～61. 4. 7	下関市立美術館	狩野芳崖・香月泰男展	寄託品
釣 り 床	〃	〃	〃	〃	〃
水 鏡	〃	〃	〃	〃	〃
波 紋	〃	〃	〃	〃	〃
風	〃	〃	〃	〃	〃
朝	〃	〃	〃	〃	〃
室内	〃	〃	〃	〃	〃
夏	〃	〃	〃	〃	〃
仕 事 場	〃	〃	〃	〃	〃



作 品	作 者	期 間	貸 出 先	展覧会名等	備 考
ペンキ職人	香月 泰男	61. 2. 4 ~61. 4. 7	下関市立美術館	狩野芳崖・香月泰男展	寄託品
鳩と青年	〃	〃	〃	〃	〃
星空の富士	長谷川三郎	61・8・18~61.11.15	朝日新聞社	近代絵画にみる日本の山・名作展	
黄色い壁	宮崎 進	61・8・23~61.12. 5	池田20世紀美術館	宮崎進の世界	
昼	〃	〃	〃	〃	
小 屋	〃	〃	〃	〃	
山水図屏風	雲谷 等顔	61・8・27~62. 6	文化庁	雪舟と室町水墨画展	寄託品
菽筆洗切茶碗	三輪 休和	61. 9. 26~61.11. 24	佐野美術館	人間国宝（重要無形文化財保持者）によるー日本のわざ展	
青砥藤網滑川拾銭図	狩野 芳崖	61. 9. 30~61.11. 20	下関市立長府博物館	貨幣の歴史	
日本巫伯山溪図	高島 北海	61.10. 27~61.12. 25	下関市立美術館	高島北海展	
高嶺深谷図	〃	〃	〃	〃	
春秋山水図屏風	〃	〃	〃	〃	
花 卉 図	〃	〃	〃	〃	
累 柿 研	堀尾 卓司	61.10.15~61.11. 6	下関市立美術館	堀尾卓司遺作展	
お し べ	〃	〃	〃	〃	
豊 艶	〃	〃	〃	〃	
ビルディング	〃	〃	〃	〃	
蘭 花 研	〃	〃	〃	〃	
すみすり	〃	〃	〃	〃	
双体(一組)	〃	〃	〃	〃	
菽麦文壺	吉賀 大眉	61.10.28~61.11.27	読売新聞社	日展回顧展	
漂流'58	豊福 知徳	61.11. 1 ~61.12. 7	石巻文化センター	水の文化 ー木によるはたらきかけー	
黒い西日	星野 真吾	61.11. 5 ~61.12.10	西武百貨店	戦後日本画変革の戦士たち展	寄託品
見 物 人	水谷 勇夫	〃	〃	〃	〃
星空の富士	長谷川三郎	62. 1. 17~62. 4. 12	N H K サービスセンター	モダン昭和展~近代都市生活を彩った美・アール・デコを中心にして~	
動	田中 稔之	62. 1. 20~62. 3. 10	神奈川県立県民ホール	宮脇愛子・田中稔之展	
野 性	〃	〃	〃	〃	
地平のさすらい	〃	〃	〃	〃	
三 眠	藤田 隆治	62. 1. 26~62. 3. 14	西武百貨店	戦後日本画変革の戦士たち展	
魚のいる風景	〃	〃	〃	〃	
七つの軌跡	下村良之介	〃	〃	〃	寄託品

作品	作者	期間	貸出先	展覧会名等	備考
トルソ	植木 茂	62. 2. 12～62. 4. 10	下関市立美術館	植木茂展	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
鳥	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
作品	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
仏陀	◇	◇	◇	◇	
体	◇	◇	◇	◇	
作品	◇	◇	◇	◇	
作品	◇	◇	◇	◇	
作品	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
兎小屋の住人	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
連	◇	◇	◇	◇	
トルソ3	◇	◇	◇	◇	
体	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
作品	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
漂船	◇	◇	◇	◇	
作品	◇	◇	◇	◇	
作品	◇	◇	◇	◇	
トルソ	◇	◇	◇	◇	
日本亜伯山溪図	高島 北海	62. 3. 3～62. 4. 10	西武美術館	ナンシー派アール・ヌーヴォー展	
高嶺深谷図	◇	◇	◇	◇	
花卉図	◇	◇	◇	◇	

---

# 収集資料

---

## Ⅱ. コレクション

※ 凡例 以下の目録は1985(昭60)年4月から1987(昭61)年3月までに収集された館蔵品をすべて網羅したものである。作品の整理方針および個々のデータの記録法は『山口県立美術館蔵品目録1979』に準じている。すなわち、作品は日本画(J)・洋画(O)・水彩画(W)・版画(P)・工芸(C)・資料の順で編集され、また個々のデータについては整理番号・作者・生没年・タイトル・制作年・素材技法・寸法(cm)・サイン等の位置・収蔵年とその経緯の順で記録されている。整理番号は『山口県立美術館年報(昭和58~59)』につづく通し番号とした。



J-89  
朝倉 撰 ASAKURA, Setsu  
1923~  
働く人 Laborers  
1952  
紙本彩色・額 181.5×258.2  
昭和61年度 寄贈



J-90  
朝倉 撰 ASAKURA, Setsu  
1923~  
日本1958-2 Japan 2 /1958  
1958  
紙本彩色・六曲屏風一隻 167.6×369.0  
昭和61年度 寄贈



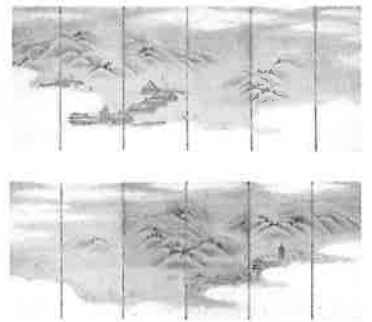
J-91  
岩崎巴人 IWASAKI, Hajin  
1917~  
凍れるシベリアにて In Frozen Siberia  
1964  
紙本彩色・額 209.5×180.0  
右上端に落款・印  
昭和60年度 寄贈



J-92  
岩崎巴人 IWASAKI, Hajin  
1917~  
変貌する山  
Mountain in Transfiguration  
1966  
紙本彩色・額 207.5×264.8  
左下端に落款・印  
昭和60年度 寄贈



J-93  
岩崎巴人 IWASAKI, Hajin  
1917~  
荒れる海 Rough Sea  
1967  
紙本彩色・額 265.0×207.0  
右下端に落款・印  
昭和60年度 寄贈



J-94  
雲谷等益 UNKOKU, Toeki  
1591~1644  
樓閣山水図 Landscape with Edifices  
紙本墨画淡彩金砂子・六曲屏風一双  
各155.8×362.6  
各隻上端に2印  
昭和60年度 購入



J-95

雲谷等竺 UNKOKU, Tōjiku  
1741~1803

西湖図 Lake Hsi

紙本墨画金砂子・六曲一隻 155.5×356.4  
左上端に落款・2印  
昭和60年度 購入

J-96

雲谷等瑤 UNKOKU, Tōhan  
1635~1724

琴棋書画図 Four Elegant Pastimes

紙本墨画淡彩・六曲一双 各153.5×357.0  
各隻下端に落款・2印  
昭和61年度 購入

J-97

雲谷等与 UNKOKU, Tōyo  
1612~68

山水図 Landscape

紙本墨画・六曲屏風一双  
各150.7×358.0  
各隻上端に落款・2印  
昭和60年度 購入



J-98

雲谷等龍 UNKOKU, Tōryū  
1804~1875

山水図 Landscape

紙本墨画・一幅 175.5×94.3  
右上端に落款・2印、左下端に印  
昭和61年度 購入



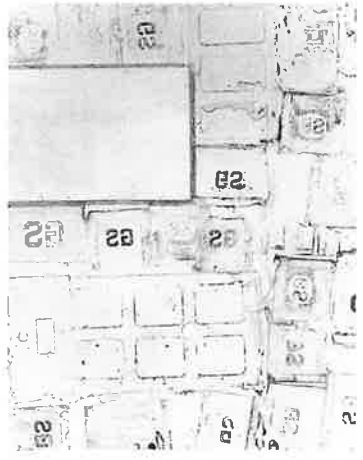
J-99

小田海儔 ODA, Kaisen  
1785~1862

雪中松鳩・寒中竹雀図

Pigeon on Pine Tree. Bamboos and  
Sparrows in Cold Winter  
1824

絹本彩色・双幅 各139.6×56.2  
右幅右下に落款・印、左幅左上に落款・印  
昭和61年度 購入

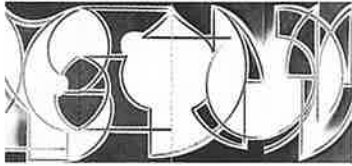


J-100

楠田信吾 KUSUDA, Shingo  
1935~

Work 1963

板・塗料・彩色・額  
昭和61年度 寄贈



J-101  
 佐藤多持 SATO, Tamotsu  
 1919~  
 水芭蕉曼陀羅・黄14  
 A Mandala of Skunk Cabbages・  
 Yellow14  
 1968  
 紙本墨画彩色・四曲屏風一隻  
 162.2×364.7  
 昭和61年度 寄贈



J-104  
 永富等運 NAGATOMI, Toun  
 1791~1832  
 西湖図 Lake Hsi  
 紙本墨画・六曲一隻  
 155.3×452.8  
 左上端に落款・2印  
 昭和60年度 購入



J-102  
 長崎莫人 NAGASAKI, Bakujin  
 1929~  
 三人 Three People  
 1956  
 紙本彩色・ガラス粉・額 162.5×134.5  
 昭和60年度 寄贈



J-105  
 野村 耕 NOMURA, Koh  
 1927~  
 α (アルファ) 1963  
 板・紙型・塗料・彩色・額 121.5×91.0  
 昭和61年度 寄贈



J-103  
 長崎莫人 NAGASAKI, Bakujin  
 1929~  
 たそがれの畑 A Farm at Dusk  
 1957  
 紙本彩色・ガラス粉・額 134.3×162.7  
 昭和60年度 寄贈



O-140  
 桂 ゆき KATSURA, Yuki  
 1913~  
 誕生 Birth  
 1985  
 木・布・紙 136.7×175.6  
 昭和61年度 購入



O-141

小林和作 KOBAYASHI, Wasaku  
1888~1974

カプリ島 Capri Island  
1928

油彩・キャンパス 60.0×72.5  
昭和60年度 購入



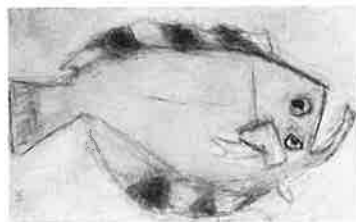
O-142

長谷川三郎 HASEGAWA, Saburo  
1906~57

聖痕を授かるアッシージの聖フラン  
チェスコ

Le Stimate De San Francesco  
1931

油彩・キャンパス 112.3×66.1  
昭和61年度 購入



O-143

松田正平 MATSUDA, Syohei  
1913~

オヒョウ(大きな魚) A Halibut  
1984

油彩・キャンパス 72.7×116.7  
左下にサイン  
昭和60年度 購入



O-144

三浦俊輔 MIURA, Syunsuke  
1911~

新雪の来る前 Before Fresh Snow

油彩・キャンパス 136.0×102.5  
右下にサイン  
昭和61年度 寄贈



S-54

植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84

鳥 Bird  
木 高39.0  
昭和59年度 寄贈



S-55

植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84

トルソ Torso  
木 高81.0  
昭和59年度 寄贈



S-56  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高33.0  
昭和59年度 寄贈



S-57  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高50.0  
昭和59年度 寄贈



S-58  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高66.0  
昭和59年度 寄贈



S-59  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高37.5  
昭和59年度 寄贈



S-60  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高33.8  
昭和59年度 寄贈



S-61  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
ボッカ Bokka  
木 高53.0  
昭和59年度 寄贈

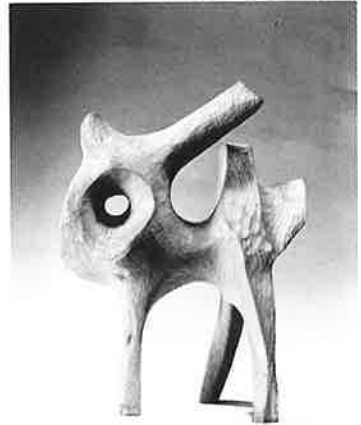




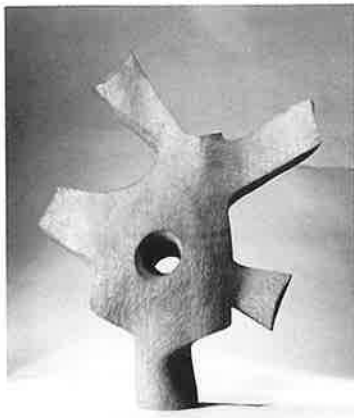
S-62  
 植木 茂 UEKI, Shigeru  
 1913~84  
 トルソ Torso  
 木 高35.0  
 昭和59年度 寄贈



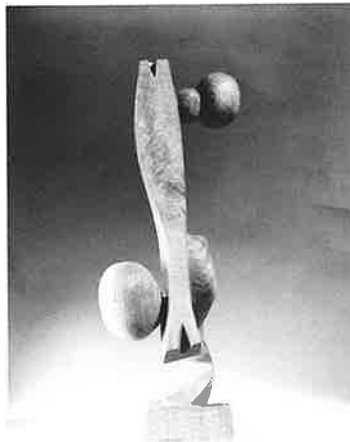
S-63  
 植木 茂 UEKI, Shigeru  
 1913~84  
 体 Body  
 木 高51.5  
 昭和59年度 寄贈



S-64  
 植木 茂 UEKI, Shigeru  
 1913~84  
 トルソ Torso  
 木 高41.5  
 昭和59年度 寄贈



S-65  
 植木 茂 UEKI, Shigeru  
 1913~84  
 トルソ Torso  
 木 高61.0  
 昭和59年度 寄贈



S-66  
 植木 茂 UEKI, Shigeru  
 1913~84  
 トルソ Torso  
 木 高71.0  
 昭和59年度 寄贈



S-67  
 植木 茂 UEKI, Shigeru  
 1913~84  
 仏頭 A Head of Buddha  
 木 高48.0  
 昭和59年度 寄贈



S-68  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
体 Body  
木 高63.0  
昭和59年度 寄贈



S-69  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高71.0  
昭和59年度 寄贈



S-70  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高87.5  
昭和59年度 寄贈



S-71  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高75.0  
昭和59年度 寄贈



S-72  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高99.0  
昭和59年度 寄贈



S-73  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
兎小屋の住人  
A Resident of Rabbit Hutch  
木 高71.0  
昭和59年度 寄贈



S-74  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高37.5  
昭和59年度 寄贈



S-75  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高71.0  
昭和59年度 寄贈



S-76  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高78.5  
昭和59年度 寄贈



S-77  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高152.0  
昭和59年度 寄贈



S-78  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
連 Continuation  
木 高90.0  
昭和59年度 寄贈



S-79  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高101.5  
昭和59年度 寄贈



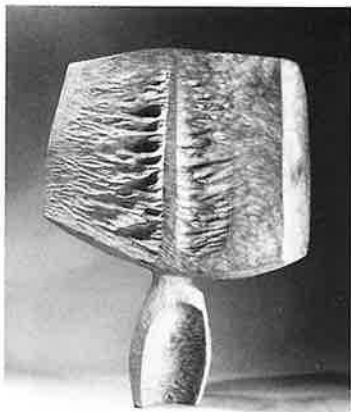
S-80  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
体 Body  
木 高166.5  
昭和59年度 寄贈



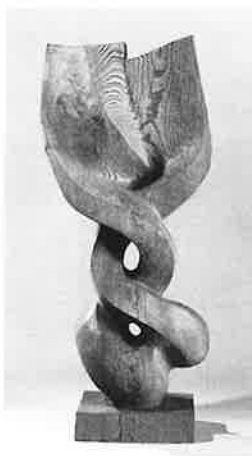
S-81  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高93.0  
昭和59年度 寄贈



S-82  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高106.5  
昭和59年度 寄贈



S-83  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高79.0  
昭和59年度 寄贈



S-84  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
トルソ Torso  
木 高112.0  
昭和59年度 寄贈



S-85  
植木 茂 UEKI, Shigeru  
1913~84  
漂船 A Drifting Ship  
木 高92.0  
昭和59年度 寄贈



S-86  
 植木 茂 UEKI, Shigeru  
 1913~84  
 作品 Work  
 鉄 高61.0  
 昭和59年度 寄贈



S-87  
 植木 茂 UEKI, Shigeru  
 1913~84  
 作品 Work  
 鉄 高27.0  
 昭和59年度 寄贈



S-88  
 植木 茂 UEKI, Shigeru  
 1913~84  
 作品 Work  
 ブロンズ 高34.5  
 昭和59年度 寄贈



S-89  
 新海竹太郎 SHINKAI, Taketaro  
 1868~1927  
 ゆあみ Bathing  
 1907  
 ブロンズ 高187.0  
 昭和61年度 購入



S-90  
 豊福知徳 TOYOFUKU, Tomonori  
 1925~  
 漂流 Drifting  
 1958  
 木 221.0×71.0×288.0  
 昭和60年度 購入



C-89  
 井澤乙也 IZAWA, Otoya  
 1959~  
 無題 Untitled  
 1983  
 土・木  
 昭和60年度 購入



C-90  
井上雅之 INOUE, Masayuki  
1957~  
KOK 85T-1  
1985  
陶・磁 19.0×98.0×28.0  
昭和61年度 購入



C-91  
井上雅之 INOUE, Masayuki  
1957~  
KOK 85E-2  
1985  
陶・磁 27.0×74.0×46.0  
昭和61年度 購入



C-92  
井上雅之 INOUE, Masayuki  
1957~  
HEK 85S-2  
1985  
陶・磁 48.0×57.0×80.0  
昭和61年度 購入



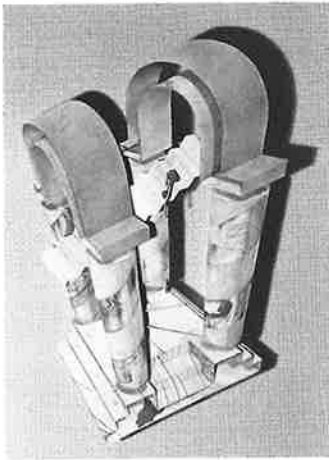
C-93  
井上雅之 INOUE, Masayuki  
1957~  
KCJ 8643  
1986  
陶・磁 73.0×65.0×94.0  
昭和61年度 購入



C-94  
金子潤 KANEKO, Jun  
1942~  
DANGO  
1984  
土 200×138×178  
昭和61年度 購入

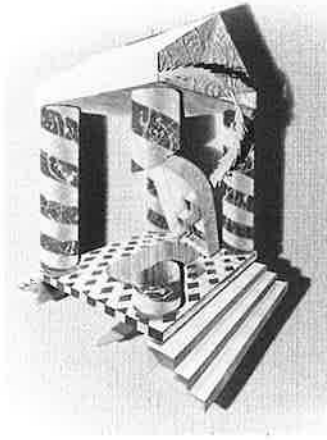


C-95  
佐々木 成 SASAKI, Hitoshi  
1948~  
無題 Untitled  
1987  
陶 76.0×54.0×6.0  
昭和61年度 購入



C-96

佐々木 成 SASAKI, Hitoshi  
1948～  
無題 Untitled  
1987  
陶 93.0×61.0×6.0  
昭和61年度 購入



C-97

佐々木 成 SASAKI, Hitoshi  
1948～  
無題 Untitled  
1987  
陶 95.0×45.0×6.0  
昭和61年度 購入



C-98

土門邦勝 DOMON, Kunikatsu  
1945～  
垂直から水平-2  
From Vertical to Horizon-2  
1986～87  
陶  
昭和61年度 購入



C-99

中村康平 NAKAMURA, Kōhei  
1948～  
世紀末の風景 1～3  
Fin-de-siècle Scene 1-3  
1985  
土 高63.1 63.9 59.3  
昭和60年度 購入



C-100

P. ボーコス PETER, Voukos  
1924～  
アイス・バケット Ice Bucket  
1982  
土 径27.0 高36.0  
昭和60年度 購入



C-101

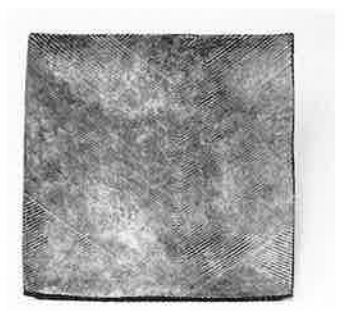
不詳  
萩茶碗 Teabowl  
江戸時代前期  
陶器 口径13.5 高9.2  
昭和60年度 購入



C-102  
不詳  
萩茶碗 Teabowl  
江戸時代中期  
陶器 口径16.0 高8.4  
昭和60年度 購入



C-103  
加藤重美 KATO, Shigemi  
1935~  
金線文陶箱 Square box  
1986  
陶 29.2×32.7×13.2  
昭和61年度 購入



C-104  
加藤重美 KATO, Shigemi  
1935~  
金線文角皿 Plate  
1986  
陶 46.1×46.3×5.8  
昭和61年度 購入



C-105  
大和保男 YAMATO, Yasuo  
1933~  
萩炎箔文陶箱 Square box  
1979  
陶 26.7×27.8×12.7  
昭和61年度 購入



## 資料

雲谷等益 UNKOKU, Tōeki

1591~1644

山水図 Landscape

紙本墨画淡彩金砂子・六曲一双

各隻上端に落款・2印

昭和60年度 寄贈

河北道介 KAWAKITA, Michisuke

1850~1907

風景(親子)

Landscape (Mother and Child)

油彩・キャンパス・マクリ 88.5×114.6

昭和61年度 寄贈

河北道介 KAWAKITA, Michisuke

1850~1907

山岳風景 Landscape

油彩・キャンパス・マクリ 99.2×131.3

昭和61年度 寄贈

雲谷等与 UNKOKU, Tōyo

1612~68

樓閣山水図 Landscape with Edifices

紙本墨画淡彩・六曲屏風一双

各146.2×350.4

上端に2印

昭和61年度 購入

河北道介 KAWAKITA, Michisuke

1850~1907

風景(牛と少女)

Landscape (Cows and Girl)

油彩・キャンパス・マクリ 87.5×115.5

昭和61年度 寄贈

桑重儀一 KUWASHIGE, Giichi

1883~1943

初夏水浴 Bathing in Early Summer

1936

油彩・キャンパス・マクリ 193.0×130.0

昭和61年度 寄贈

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
1. 哲学				
185.9	東福寺誌	大本山東福禪寺	思文閣	1979
2. 歴史				
203	アジア歴史事典1 アーエ	下中邦彦	平凡社	1985
	◇ 2 オーキワ	◇	◇	◇
	◇ 3 キンーコ	◇	◇	◇
	◇ 4 サーショ	◇	◇	◇
	◇ 5 シラーソ	◇	◇	◇
	◇ 6 ターテ	◇	◇	◇
	◇ 7 トーハ	◇	◇	◇
	◇ 8 ビーミ	◇	◇	◇
	◇ 9 ムーク補遺付表	◇	◇	◇
	アジア歴史地図	松田寿男・森 鹿二	◇	◇
	東洋史料集成	下中邦彦	◇	◇
	必携中国美術年表	山崎重久	芸心社	1983
	世界文化史年表	芸心社編集部	芸心社	1983
210	防長寺社由来第六卷	山口県文書館	同 左	1985
	◇ 第七卷	◇	◇	1986
210.46	少年少女人物日本の歴史 雪舟	中嶋純次・横井 清	小学館	1985
217.7	赤間神宮	下関市教育委員会	郷土の文化財を守る会	1985
	秋芳町地方文化研究	大庭青雨	秋芳町地区文化研究会	1985
	たかはた	(勸)山口県教育財団 山口県教育委員会	同 左	1986
	国道2号・四辻バイパス今宿東遺跡	山口県教育委員会	同 左	1986
	萩藩閥閥録	山口文書館	◇	1977
	昭和59年度徳山市社寺文化財調査概報	徳山市教育委員会	◇	1986
	萩藩閥閥録第二卷	山口県文書館	◇	1987
	府県史料 山口県一	◇	◇	1987
	萩市史第3巻	萩市史編集纂委員会	萩市	1987
	長府藩花神群「土龍窟住人」	長府博物館友の会	同 左	1987
	萩藩給録帳	樹下明紀・田村哲夫	マツノ書店	1984
	門田片川遺跡	山口市教育委員会(俳林兼商会)	同 左	1985
219.4	湯ノ口横穴群	山鹿市教育委員会	同 左	1986
222.02 222.03	中国歴史地図表第一冊	潭其驥主	地図出版社	1982

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
222.04 222.041	中国歴史地図表第二冊	潭其驥主	地図出版社	1982
222.045 222.046	〃 第四冊	〃	〃	〃
222.047 222.05	〃 第五冊	〃	〃	〃
222.5	〃 第六冊	〃	〃	〃
222.043	呉・晋(西晋)墓出土の神亭壺	長谷川道隆	考古学雑誌	1986
291.77	山口県の自然	山口県山口博物館	同 左	1986
	秋吉台の自然観察	秋吉台科学博物館	秋吉町地方文化研究会	1984
	秋吉台の自然をさぐる カルスト台地と鍾乳洞	〃	〃	1986
<b>3. 社会科学</b>				
371.45	保育指導の気配り心配り 幼児の生活空間	山口県教育財団	同 左	1986
<b>4. 自然科学</b>				
460.7	植物と動物の不思議な絆	大阪市立自然史博物館	同 左	1985
470	まちの植物(1)	大阪市立自然史博物館	同 左	1985
486.8	大阪市内の蝶	〃	〃	〃
<b>5. 技術</b>				
526	美術館Ⅰ 広域公共の美術館	日本建築家協会	彰国社	1983
523.06	建築家シンケルとベルリン 19世紀の都市環境の造形一	ヘルマン・G・ブント 杉本俊多	中央公論美術出版	1985
589.7	香月泰男のおもちゃ筐	福島慶子	求龍堂	1970
<b>7. 芸術</b>				
702	太系世界の美術			
	第1巻 先史、アフリカ、オセニア美術	木村重信	学 研	1973
	第2巻 古代西アジア美術	新 規矩男	〃	1975
	第3巻 エジプト美術	杉 勇	〃	1972
	第4巻 古代地中海美術	新 規矩男	〃	1973
	第5巻 ギリシア美術	村田 潔	〃	1974
	第6巻 ローマ美術	辻 茂	〃	1974
	第7巻 古代アメリカ美術	増田義郎	〃	1973
	第8巻 イスラーム美術	深井普司	〃	1973
	第9巻 ビザンティン美術	柳 宗玄	〃	1975
	第10巻 初期のヨーロッパ美術	〃	〃	1974

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	第11巻 ロマネスク美術	柳 宗 玄	学 研	1973
	第12巻 ゴシック美術	〃	〃	1974
	第13巻 ルネサンス美術	摩寿意 善 郎	〃	1971
	第14巻 〃	〃	〃	1973
	第15巻 〃	嘉 門 安 雄	〃	1973
	第16巻 バロック美術	土 方 定 一	〃	1972
	第17巻 ロココ美術	山 田 智三郎	〃	1973
	第18巻 近代美術	嘉 門 安 雄	〃	1971
	第19巻 近代美術	〃	〃	1973
	第20巻 現代美術	土 方 定 一	〃	1974
702.01	高橋由一油画史料	青 木 茂 編	中央公論美術出版	1984
	明治洋画史料 懐想篇	〃	〃	1985
	昨日、今日の作家たち	河 北 倫 明	芸 艸 堂	1987
702.1	山口県の現代書道	田 中 江 舟	昌 平 社	1984
702.1	志水楠男と南画郎	美術出版社	同 左	1985
702	図説万国博覧会史	吉 田 光 邦	思文閣出版	1985
702.17	金山功山禅寺	功山禅寺編集委員会	功 山 寺	1985
702.6	HISTORIA GERAL ARTE NO BRASIL VOL. I	C BMM	同 左	1985
	〃 VOL. II	C BMM	同 左	〃
	〈要覧・概要書など〉			
703	鹿児島県立博物館要覧昭和60年度	鹿児島県立博物館	同 左	1985
	東京都美術館要覧昭和60年度	東京都博物館	〃	〃
	同窓生名簿昭和56年度版	東京芸術大学同窓生名簿編集委員会	〃	〃
	芸術家年鑑	森 田 文 雄	日本美術出版	1985
	1986美術家名鑑	清 水 治	美術倶楽部出版局	1986
	博物館事業概要	萩市郷土博物館	同 左	1986
	要 覧	東京国立近代美術館	〃	
	版 画 事 典	室 伏 哲 郎	東京書籍	1985
	Propyläen kunst Geschichte	1 KARL SCHETOLD	Propyläen	1984
	〃	2 THEODOR KRAUS	〃	〃
	〃	3 JACOVELINE LAFON- TAINÉ DOSOGNE	〃	〃
	〃	4 BERTOLD SPULER	〃	〃
	〃	5 HERMANN FILLITZ	〃	〃

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	Propyläen kunst Geschichte	6 OTTO VON SIMSON	Propyläen	1984
	〃	7 I AM BIAEOSTOCKI	〃	〃
	〃	8 GEORE KAUFFMANN	〃	〃
	〃	9 ERICH HUBALA	〃	〃
	〃	10 HARALD KELLER	〃	〃
	〃	11 RODOLF ZEITLER	〃	〃
	〃	12 GIVIIO GARLDARGAL	〃	〃
703	MANIFESTI FUTURISTI	1 LVCIANO CARUSO 編	SALI MBENI	1980
	〃	2 〃	〃	〃
	〃	3 〃	〃	〃
	〃	4 〃	〃	〃
703	Note Book	LVCIANO CARUSO 編	SALI MBENI	1980
	美学事典 増補版	竹内敏雄	弘文堂	1985
703.8	日本貿易陶磁文献目録 I 1901~1984	日本貿易陶磁研究会	同 左	1985
	聖福寺収蔵品目録	福岡市教育委員会	〃	1986
	美祢市歴史民俗資料館 調査研究報告第2号	美祢市歴史民俗資料館	〃	1986
	全国美術館・博物館・所蔵 美術品目録(版画編)	文化庁	〃	1986
	From Concept to Context	Shen FU Glenn D.Lawry Ann Yonemure	Free Gallery of Art	1986
	諸文庫仮目録 I 収蔵文書仮目録 4	山口県文書館	同 左	1986
704	ARTE POVERA	germwno celant	gabriele mayyotta editore	1969
	Dialoghi Cliartista	Achille Bonito Oliva	Electa	1984
	香月泰男シベリヤ・シリーズを読む	落 合	森下紀夫	1985
	小林和作隨筆集	小林和作を語る会	同 左	〃
	画家のことは	香月泰男	新潮社	1973
	21世紀の都市デザインを考える 全国シンポジウム「ひろばと緑と彫刻と」	宇 部 市	〃	1983
	関根正二遺稿・追想	酒井忠康	中央公論美術出版	1985
	芸術の無限感	小熊虎之介	〃	1983
	感情と表現 三岸好太郎	匠 秀 夫	〃	1983
	芸術のエスプリ 藤島武二	〃	〃	1982
	絵画の将来 黒田清輝	陰里鉄郎	〃	1982
	仮象の創造 青木繁	河北倫明	〃	1982
	鉄人画論 萬鐵五郎	土方定一・陰里鉄郎	〃	1986

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	画 想 安田鞞彦	安 田 建 一	中央公論美術出版	1982
	写真と空想 古賀春江	古 川 智 次	〃	1984
	黒田清輝日記 第1巻	黒 田 清 輝	〃	1966
	〃 第2巻	〃	〃	1967
	〃 第3巻	〃	〃	1967
	〃 第4巻	〃	〃	1968
	十三松堂日記 第1巻	正 木 直 彦	〃	1965
	〃 第2巻	〃	〃	1965
	〃 第3巻	〃	〃	1966
	〃 第4巻	〃	〃	1966
	抽象への意志 モンドリアンと (デ・スタイル)	H・L・Cヤッフエ (赤根和生：訳)	朝日出版社	1984
	上村松園	山種美術館	同 左	1984
704	速水御舟	河北倫明・吉田善彦	山種美術館	1984
	東行西行	河 北 倫 明	三 彩 社	1979
705	日本美術年鑑1983	美術研究所	同 左	1985
	第21回山口県芸術祭総覧59年度	山口県教育委員会	同 左	1985
	年鑑日本のイラスト・レーション'85	第一出版センター	講 談 社	1985
	年鑑日本のグラフィックデザイン'85	社団法人日本グラフィック デザイナー協会 佐藤晃一	〃	〃
	年鑑現代日本のインテリアデザイン1984	田 中 一 光	〃	〃
	美術年鑑'86	石 坂 敏 夫	美術公論社	1986
	日本美術年鑑1984	美術研究所	同 左	1986
	唐人焼窯跡発掘調査概報	柿木村教育委員会	同 左	1982
	大和町の古代遺跡	大和町教育委員会	〃	1986
	年鑑広告美術1976	東京アートディレクターズ・クラブ	美術出版社	1976
	美術名鑑'87	美術公論社	同 左	1986
	美術年鑑1987	美術年鑑社	同 左	1987
706	社団法人、日本博物館協会昭和60 年度総会資料	日本博物館協会	同 左	1985
	20年のあゆみ昭和40-昭和60年	長崎県立美術博物館	〃	1986
	琵琶湖文化館25年のあゆみ	滋賀県立琵琶湖文化館	〃	1986
	5年のあゆみ昭和56-61年	渋谷区立松濤美術館	〃	1986
706.9	日本の美術館9 中国/四国	嘉 門 安 雄	〃	1986
706.9	郷土と博物館	鳥取博物館	〃	〃
707	伊勢歌舞伎資料調査報2	伊勢文化会議所	〃	1985

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
706	大潮会50周年記念	大潮会	同左	1986
706.9	日本の美術館9 中国/四国	新集社	ぎょうせい	1968
706	日展史15 新文展・日展	日展史編纂委員会	社団法人日展	1985
	〃 14 〃	〃	〃	1984
	校刊美術史料続篇 第一巻	藤田経世	校刊美術史料続篇刊行会	1985
	〃 第二巻	〃	〃	1985
	〃 第三巻	〃	〃	1985
	〃 第四巻	〃	〃	1985
	校刊美術史料寺院篇 上巻	〃	中央公論美術出版	1982
	〃 中巻	〃	〃	1975
	〃 下巻	〃	〃	1976
706	日展史-16 日展編	社団法人日展	同左	1986
706.9	何必館	梶川芳友	何必出版	1981
706.7	日本洋画商史	日本洋画商協同組合	美術出版社	1985
706.9	The Museum Environment	Carry Thomson	Butter wortbs	1985
708	世界の美術館			
	1. ルーブル美術館 I	柳宗玄	講談社	1965
	2. ルーブル美術館 II	吉川逸治	〃	1965
	3. 大英博物館 I	〃	〃	1965
	4. 大英博物館 II	柳宗玄	〃	1966
	5. カイロ美術館	新規矩男	〃	1968
	6. アテネ美術館	澤柳大五郎	〃	1968
	7. ローマ美術館	吉川逸治	〃	1967
	8. ヴァティカン美術館	高田博厚	〃	1966
	9. ニューデリー美術館	町田甲一	〃	1968
	10. メトロポリタン美術館	新規矩男	〃	1969
	11. ボストン美術館	高橋敏	〃	1969
	12. 東京国立博物館 I	岡田譲	〃	1966
	13. 東京国立博物館 II	〃	〃	1967
	14. ギメ東洋美術館	秋山光和	〃	1968
	15. ボストン美術館東洋	高橋敏	〃	1968
	16. ウフィツィ美術館	摩寿意善郎	〃	1967
	17. ロンドン国立絵画館	嘉門安雄	〃	1969
	18. ワシントン国立絵画館	J Walker・吉川逸治	〃	1966
	20. ミュンヘン美術館	前川誠郎	〃	1967
	21. ウィーン美術館	winzeny Oberhammer	〃	1967

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	22. アムステルダム美術館	吉川逸治	講談社	1968
	23. トルチャコフ美術館	柳宗理	〃	1969
	24. パリ国立近代美術館	〃	〃	1966
	25. エルミタージュ美術館	Valentina Bondine	〃	1969
	26. クレムリン、ロシア美術館	〃	〃	1969
	27. ベルリン美術館	Stephan Watzoldt・前川誠郎	講談社	1969
	28. シカゴ美術館	Charles Cunningham	〃	1970
	29. プレラ美術館	辻茂	〃	1970
	31. イスタンブール美術館	富永惣一	〃	1971
	32. カルカッタ美術館	上野照夫	〃	1970
	33. 京都国立博物館	同左	〃	1970
	34. メキシコ国立美術館	Román Pina-Chań	〃	1969
	35. フリーア美術館 I	同左	〃	1971
	36. 〃 II	〃	〃	1971
	全沢文庫資料全書 第8巻	神奈川県立・金沢文庫	同左	1986
709	山口県未指定文化財調査報告書4 山口県の絵馬	山口県教育委員会	同左	1986
	京都の文化財 第4集	京都府教育委員会	〃	〃
	京都の文化財	京都府教育委員会	〃	1983
	文化財を守る人々	(財)京都府文化財保護基金	同左	1978
	京都の文化財地図帳	〃	〃	1984
709.1	法隆寺献納宝物	東京国立博物館	便利堂	1975
709	赤間神宮	下関市教育委員会	郷土の文化財を守る会	1985
709	長崎県北松浦地方の文化	長崎県美術博物館	同左	1985
709.1	日本の美術館	久保貞次郎	徳間書店	1986
710	美術館名作シリーズ日本現代美術彫刻	古賀正夫	形象社	1985
710	萩国際シンポジウム	萩市	同左	1982
710	無限空間	伊藤隆康	六曜社	1984
715	中国の螺鈿 東京国立博物館編	東京国立博物館	便利堂	1981
718	造像銘記集成	久野健	東京堂出版	1985
720.1	講座美学 1. 美学の歴史	今道友信	東京大学出版会	1984
	〃 2. 美学の主題	〃	〃	1985
	〃 3. 美学の方法	〃	〃	1984
	〃 4. 芸術の諸相	〃	〃	1984
	〃 5. 美学の将来	〃	〃	1985
720.1	方眼美術論	久米桂一郎	〃	1984



分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
720.2	二科七十年史 1914-1943	二科70年史編集委員会	社団法人二科会	1985
	〃 1946-1984	〃	〃	〃
720.8	にっぽんのえ 中村幸子 VS 日比野克彦	株式会社カムプレス	小学館	1985
	岡村鞆正 VS 安西水丸	〃	〃	〃
	長岡秀星 VS 加山又造	〃	〃	1984
	谷岡ヤスジ VS 木村恒久	〃	〃	1985
	早川良雄 VS 井上嗣也	〃	〃	1985
	長友啓典 VS 黒田征太郎	〃	〃	1985
	大橋歩 VS ペーター佐藤	〃	〃	1984
	湯村輝彦 VS 河村要助	〃	〃	1984
	美術館名作シリーズ 日本現代美術絵画Ⅰ	古賀正夫	形象社	1985
	日本現代美術絵画Ⅱ	〃	〃	1985
720.28	西風のコロブスたち 若き美術家たちの肖像一	畑 祥 雄	ブレーンセンター	〃
721	近世風俗図譜第三卷洛中洛外(一)	林 屋 辰三郎	小学館	1983
	〃 第十卷歌舞伎	〃	〃	〃
	花鳥画の世界第11巻花鳥画資料集成	武田恒夫・辻惟雄	学 研	1983
	近世風俗譜第十二巻職人	網野善彦・石田尚豊	小学館	1983
	花鳥画の世界第10巻中国の花鳥画と日本	戸田禎佑・小川裕充	学 研	1983
	近世風俗図譜第四卷洛中洛外(二)	川嶋将生・辻惟雄	小学館	1983
	〃 第二巻遊楽	原田伴彦・山根有三	〃	1983
	永平寺傘松閣天井絵	永平寺祖山傘松会	大木山永平寺	1983
	近世風俗図譜第七巻遊女	切畑健・磯博	小学館	1984
	〃 第十一巻公家、武家	岡本良一・脇坂淳	〃	〃
	〃 近世風俗図譜第十三巻南蛮	松田毅一・坂本満	〃	1984
	画集 岸竹堂	洞 本 昌 男	ふたば書房	1984
	新編岡崎市史 第二章絵画	小 林 忠	美術工芸	1984
	中村貞夫画集	中 村 貞 夫	同 左	1985
	景文の写生帳京都四条派の確立者	榎 原 吉 郎	(株)京都書院	1978
	障壁画全集妙心寺天球院	大 下 敦	美術出版社	1967
	〃 名古屋城	〃	〃	1967
	〃 大徳寺真珠庵・聚光院	〃	〃	1971
	〃 大覚寺	〃	〃	1967
	〃 知恩院	〃	〃	1969

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	障壁画全集南禅寺本坊	大下 敦	美術出版社	1968
	◇ 智積院	◇	◇	1966
	◇ 健仁寺	◇	◇	1968
	◇ 西本願寺	◇	◇	1968
	京都の江戸時代障壁画	(財)京都府文化財保護基金	◇	1978
721. 3	雪舟 画業聚成	中村溪男・金澤弘	講談社	1984
721. 2	繪 卷	京都国立博物館	便利堂	1975
721. 4	狩野芳崖遺墨帖	岡倉秋水・本多天城	西東書房	1969
721. 5	琳 派	東京国立博物館	便利堂	1973
721. 7	探幽縮図	文人画研究所	同 左	1986
721. 9	岩橋英遠一道産子の眼	奥岡茂雄	北海道立近代美術館	1983
	太田聴雨作品集	日本アート・センター	太田喜多子	1983
	現代の水墨 `墨の創造と可能性の展開、	小林格史	大日本絵画	1983
	福田翠光遺作集	福田翠光遺作集刊行会	同 左	1978
	現代の日本画第一巻(あ~か)	藤本韶生	三彩社	1967
	◇ 第二巻(き~の)	◇	◇	1968
	◇ 第三巻(は~わ)	◇	◇	1968
	河鍋暁斎一本画と画稿一	河鍋楠美・ジョサイア・コンダー	暁斎記念館	1984
	暁斎画談内篇上、下	介生政和	◇	1982
	◇ 外篇上、下	◇	◇	1982
	美術館名作シリーズ日本現代美術絵画I	古賀正夫	形象社	1986
	現保日本画全集第一巻 堅山南風	堅山南風・細野正信	集英社	1984
	◇ 第二巻 奥村土牛	奥村土牛・今泉篤男	◇	1981
	◇ 第三巻 小野竹喬	小野竹喬・池田弘	◇	◇
	◇ 第四巻 小倉遊亀	小倉遊亀・弦田平八郎	◇	◇
	◇ 第五巻 宇田荻邨	宇田荻邨・塩川京子	◇	1982
	◇ 第六巻 山口華楊	山口華楊・内山武夫	◇	1981
	◇ 第七巻 山本丘人	山本丘人・飯島勇	◇	◇
	◇ 第八巻 上村松篁	上村松篁・原田平作	◇	1984
	◇ 第九巻 岩橋英遠	岩橋英遠・桑原住雄	◇	1984
	◇ 第十巻 橋本明治	橋本明治・村木明	◇	1982
	◇ 第十一巻 吉岡堅二	吉岡堅二・田中壤	◇	◇
	◇ 第十二巻 東山魁夷	東山魁夷・河北倫明	◇	1980
	◇ 第十三巻 杉山 寧	杉山寧・佐々木直比古	◇	1983
	◇ 第十四巻 奥田元宋	奥田元宋・村瀬雅夫	◇	1984

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	現保日本画全集第十五卷 高山辰雄	高山辰雄・小川正隆	〃	1981
	〃 第十六卷 森田曠平	森田曠平・倉田公裕	〃	1983
	〃 第十七卷 加山又造	加山又造・瀧悌三	〃	1980
	〃 第十八卷 平山郁夫	平山郁夫・岩崎吉一	〃	1980
723	Futurism & Futuisms	Abbeville	ニューアート西武	1986
723	無限へのヴィザ 伊藤紫虹作品集	伊藤紫虹	毎日新聞	1986
723	CARAVAGGIO	ALFRED MOIR	美術出版社	1984
	BECKMANN	STEPHAN LACRMER	〃	1983
	HALS	H.P. BAARD	〃	〃
	VERMEER	APCHUR.K WHEELOCK .JR	〃	1984
	UTRILLO	ALFRED WERNER SARINF REWALD	〃	1981
	久保木 彦	久保木 彦	同 左	
	三上誠画集	三上誠画集編集委員会	三 彩 社	1974
	Purro Pauvlo Rubens	Frans Bavdouin	Mercatorbonds	1977
	ART GALLERY DUBUFFET	針 生 一 郎	集 英 社	1986
	Boccioni	Electa Editrice	同 左	1983
723. 1	田村孝之介画集	田村孝之介	日動出版部	1977
	宮崎 進画集	宮崎 進	求 龍 堂	1986
	萩谷 巖画集	萩谷 巖	日 動 画 郎	1986
	小寺健吉画集	小寺健吉	日 動 出 版	1977
725	近代日本洋画素描大系 2、3、4	岩崎吉一	(株)講談社	1985
725. 1	松本竣介手帳	松本竣介	綜 合 工 房	1985
725	近代日本洋画素描大系 1 明治	陰里鉄郎	講 談 社	1985
	〃 5 昭和Ⅲ戦後Ⅱ	酒井忠康	〃	〃
	戦時下の絵日誌	佐藤多持	けやき出版	〃
748	祝 祭	高尾輝章	日本ゼンオン株式会社	1985
	南米移民一世の消像遙なる祖国 新正章写真集	新 正 章	朝日新聞社	1986
726. 5	絵本の研究	仲田勝之介	美術出版社	1975
	子ども美術館 9 ゆめとまぼろしをかく—幻想の絵—	藤林勲三	ポ プ ラ 社	1984
	〃 10 色をさがす—色彩の世界—	林 敬 二	〃	1987
	〃 28 かたちをえがく	山本文彦	〃	1986
727	アート・ディレクション・ツディ	東京アート・ディレクターズクラブ	講 談 社	1984

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
	年鑑広告美術1975	東京アート・ディレクターズクラブ	美術出版社	1975
	◇ 1977	◇	◇	1977
	◇ 1978	◇	◇	1978
	◇ 1979	◇	◇	1979
	◇ 1984	◇	◇	1984
	◇ 1985	◇	◇	1985
	◇ 1986	◇	◇	1986
748	ブループリント作品集	益田 凡 夫	教育図書株式会社	1985
750	京都の美術工芸 京都市内編	京都府文化財保護基金	同 左	1985
	◇ 南山城編	◇	◇	1979
	◇ 中丹編	◇	◇	1981
	◇ 与謝、丹後編	◇	◇	1983
	◇ 乙訓、北桑、南丹編	◇	◇	1980
	MODERN ART OF JAPAN 工芸	古賀 正 夫	◇	1986
751	古美術百萬人のコレクションNo. 8	金子 晴 行	(株)東洋総企	1986
	世界陶磁全集 基本用語解説索引	小 学 館	同 左	1987
751.1	肥前陶磁史考	中島浩気(青潮社)	青 潮 社	1985
751.1	現代日本の陶芸			
	別巻 現代陶芸名家鑑	原 田 裕	講 談 社	1985
	第一巻 現代陶芸のあけぼの	古 田 耗 三	◇	◇
	第二巻 用と美の巨匠	水 尾 比呂志	◇	1984
	第六巻 創作陶芸の展開Ⅱ	鈴 木 健 二	◇	1984
	第七巻 伝統と創造の意匠Ⅰ	林 屋 晴 三	◇	1985
	第九巻 ◇ Ⅲ	乾 由 明	◇	1983
	第十一巻 色絵の系譜	鈴 木 健 二	◇	1983
	第十二巻 用のデザイン	吉 田 耕 三	◇	1983
	第十四巻 土と火の奇想	乾 由 明	◇	1984
	第十五巻 明日の造型をもとめて	鈴 木 健 二	◇	1985
751.2	東洋陶磁 8 ギメ美術館	アルベール・ルポール 他	◇	1981
	陶磁大系(全四八巻)第四一巻元の染付	矢 部 良 明	平 凡 社	1980
751.2	池田満寿夫の陶芸Ⅱ	池 田 満寿夫	美術出版社	1986
751.4	世界陶磁全集20 世界(一)	相 賀 徹 夫	小 学 館	1985
751.4	◇ 21 世界(二)	◇	◇	1986
751.4	◇ 22 世界(三)ヨーロッパ	◇	◇	1986

分類	資料名	著・編者	発行	刊行年
751.5	ガレのガラス芸術	ダンカン、バルサ共著 倉田公裕監修	サンケイ新聞 写真ニュースセンター	1985
757	日本の意匠第14巻	藤岡 護	京都書院	1986
753	Textiles in Daily Life in the Middle Age	The Cleveland Museum of art	同 左	
	Material Matters	〃	〃	
	正倉院、法隆寺伝来裂	柳 孝	〃	1986
9. 文学				
934	僕と炎と唇と	三輪龍作	求龍堂	1985
	ハルローハ、イキテイル	落合東郎	論創社	〃



---

# 組織等

---

### 美術館顧問

京都国立近代美術館長	河北倫明
京都大学教養部教授	乾由明
山口県芸術祭運営委員長	三好正直
陶芸家	三輪休雪
山口県教育委員会教育長	高山治

(以上昭和60年度)

### 美術評論家

京都大学教養部教授	河北倫明
重要無形文化財萩焼保持者	乾由明
山口銀行頭取	三輪休雪
山口大学名誉教授	伊村光
	友近琢男

(以上昭和61年度)

### 美術品収集審査委員

東京国立近代美術館美術課長	浅野徹
大阪大学文学部教授	武田恒夫
ジャパンアートコンサルタント社長	浦上敏朗
山口大学名誉教授	友近琢男
山口大学教育学部教授	服部碩夫

(以上昭和60・61年度)

### 美術館職員構成

館長		河野良輔
副館長	(事)	河村平八郎
副館長	(事)	足立明男

### 総務課

課長	(事)	渡辺博
主任	(事)	内藤貴久
主任主事	(事)	中尾将史
	(技)監視員兼	梅本三男
	運転士	

### 学芸課

課長兼	(事)	足立明男
主任	(事)	榎本徹
専門学芸員	(事)	高田美規雄
	(事)学芸員	菊屋吉生
	(事)学芸員	米屋優

### 普及課

課長	(事)	芳西靖幸
	(事)研究員	安井雄一郎
	(事)学芸員	山本英男

(以上昭和60年度)



館長		河野良輔
副館長	(事)	今井克己
副館長	(事)	足立明男

総務課

課長	(事)	渡辺博
主任	(事)	田中幸一
主任主事	(事)	中尾将史
	(技) 監視員兼	梅本三男
	運転士	

学芸課

課長兼	(事)	足立明男
主任	(事)	榎本徹
専門学芸員	(事)	高田美規雄
	(事) 学芸員	山本英男
	(事) 学芸員	米屋優 (61.10転出)

普及課

課長	(事)	芳西靖幸
	(事) 研究員	安井雄一郎
	(事) 学芸員	菊屋吉生

(以上昭和61年度)

職員の動静

60. 4 館長(非常勤)河野良輔、任用
- ◇ 総務課長、小林幹生、転出(→中央児童相談所総務課長)
  - ◇ 同職に渡辺博、転入(←県庁舎建設事務局総務課総務係長)
  - ◇ 普及課長、芳西靖幸、転入(←文化課文化財保護係長)
  - ◇ 総務課主事 中谷寧夫、転出(→消防防災課主事)
  - ◇ 総務課主任主事、中尾将史、転入(←山口県税事務所主任主事)
  - ◇ 米屋優、学芸課に転属(←普及課)
  - ◇ 山本英男、普及課に転属(←学芸課)
60. 9 榎本徹、中華人民共和国へ出張(60.9.20~10.8)
60. 11 大阪大学に山本英男、研修派遣(60.12まで)
61. 4 館長(非常勤)河野良輔、任用
- ◇ 副館長、河村平八郎、転出(→視聴覚センター所長)
  - ◇ 同職に、今井克己、転入(←徳山保健所次長)
  - ◇ 総務課主任、内藤貴久、転出(→長門土木事務所用地係長)
  - ◇ 同職に、田中幸一、転入(←十種ヶ峰野活センター主任)
  - ◇ 山本英男、学芸課に転属(←普及課)
  - ◇ 菊屋吉男、普及課に転属(←学芸課)
  - ◇ 榎本徹、中華人民共和国へ出張(61.4.5~4.15)
61. 10 榎本徹、中華人民共和国へ出張(61.10.8~10.28)
- ◇ 米屋 優、辞職(→61.10.31、京都府教育委員会文化財保護課)

